

父
の
死
・
開
玄
堂

父
の
死

電話のベルが三回ほど鳴った後で、夕食の後片付けをしていた妻が食器を洗う手を止めて電話を取った。「お待ち下さい」と言ってお台所からソファに向かって歩いてくる。

「朗さん、大浜の和田さんからだけけれど」

妻は抑えた声でそう言ってお私に受話器を差し出すと、隣に座っていた娘にテレビの音量を下げてと声をかけた。

「大塚です」受話器に話しかけると、女性の声が聞こえた。

「大浜の和田です。勝さんが、昨晚、亡くなりました」

テレビの音が静かになった。

「今日、午後の会議に勝さんが来なかったのも、和田書店の方が森川の家に行ってくださいたら、亡くなっていたそうです。心筋梗塞だったと聞いています」

継母の声は落ち着いていて淀みがなかった。

「私たちにとっても突然のことで、何の心構えもできていなくて。会社の方にもお手伝いいただいて、お葬式の手配をしました。お通夜は明後日の午後六時から、お葬式は翌日の土曜日の午前十時からで、場所は、森川斎場です」

継母は、森川斎場のホームページがあること、供花や弔電については森川斎場の担当者連絡してもらいたいことなどを簡潔に伝えて、電話を切った。それでももらいたいことなどを簡潔に伝えて、電話を切った。

父の死を告げる電話は、とても短い電話だった。

二

街の南東の山間部から流れてくる森川と、北東の台地から流れてくる平川が流れ込む森川湾は、なだらかな山に囲まれた西向きの静かな内海で、千年以上も昔から天然の良港として漁業や交易で栄えていたらしい。周辺一帯を治める豪族や大名の居城も置かれ、この地方の政治や文化の中心でもあった。ふたつの川と森川湾に囲まれた概ね二キロ四方の狭い平地に街が作られ、平地の北寄りある小さな丘の上には、四百年ほど前に築城された三層の小さな城が今も残っている。

父の通夜と葬儀に参列するために、東京から飛行機に乗り、大浜空港からバスと電車を乗り継いで森川の駅に着いたのは、今にも雨が降りだしそうな梅雨空が広がる金曜日の午後だった。森川は、自分が生まれてから高校を卒業するまで暮らした街だが、改めて思い返してみると、最後に森川に来てからもう二十年以上が過ぎ去っている。森川駅の改札を抜けて駅舎の外に出ると、梅雨時の湿気に交じって、微かに潮の香りがした。大通りを二キロほど進むと森川港に出る。駅前広場を見渡すと、バスやタクシーの乗り場がきれいに整備されていて、広場の北側には見慣れない四、五階建てのショッピングセンターと、その奥に十五階建てくらいのマンションが見える。おそらく森川で一番高い建物だろう。見覚えのある建物に交じって、他にも見慣れない新しい建物がいくつ

か建っている。森川の街の中心は駅と港の真ん中のあたりで、駅前はどこらかというところ、街外れだったのだが、このあたりの再開発が進められているのかもしれない。

予約を入れてあった駅前のビジネスホテルのロビーは閑散としていて、フロントには誰もいなかった。ベルを鳴らして、奥の部屋から出てきた制服を着た若い女性に名前を告げた。

「大塚様、禁煙のシングルルームでご一泊ですね」

「はい」

「ご延泊のご予定は」

「いえ、明日東京に帰ります」

フロントの女性はカタカタとキーボードを叩いて部屋を確認してから、カードキーと翌朝の朝食券を用意して、エレベーターの場所を教えてくださいました。

「明日、チェックアウトしてから午後三時頃まで荷物を預かってもらえますか」

「ええ、お預かりします。チェックアウトのときに、お荷物をフロントにお持ちください」

控えめで清潔な笑顔だった。

ホテルの部屋はいたって平凡で簡素な造りだったが、セミダブルのベッドが置かれていて、北向きの窓から駅前広場を見下ろすことができた。ひと通り部屋を確認してから、キャリーバッグを開けて礼服とシャツを取り出し、皺が寄っていないことを確かめてからクロゼットのハンガーに掛けた。靴やベルト、黒のネクタイ、数珠と香典が揃っていることも確かめた。パソコンをホテルの無線LANに接続して仕事のメールをチェックしたが、急ぎの用件はなく、いくつかのメールに返事を返すと、もうすることがなかった。

通夜が始まる時間まで、まだ三時間近くある。

長年疎かにしてきた祖父母と母の墓参りには、明日、父の葬儀が終わってから行くつもりだった。通夜の前に継母に挨拶をしておいた方が良さのかもしれないが、二十年以上も会っていない継母や、一度も会ったことがないその子供達と顔を合わせても、気詰まりなだけのように思えた。それに、継母達もまだ斎場には来ていないだろう。ベッドに寝転んで持ってきた文庫本を読み始めてみたが、一向に集中できない。小一時間もそうやって寝転んでいた後で、気持ちを切り替えて、今にも雨が降りだしそうな森川の街に出てみることにした。

ホテルを出る時には、折角なので港まで歩いて海を見に行こうかと思ったものの、雨が降り始めると長時間の散歩は難儀なので、取り敢えず、今もあるかどうかは分からないけれど、静川沿いの喫茶店を目指すことにした。

静川は、ケヤキ並木の二、三百メートル南側を西に向かって流れる川幅が十メートルほどの水路で、繁華街の外れを過ぎるまではケヤキ並木とほぼ並行し、その先で南西方向に折れ曲がり、森川の河口近くに流れ込んでいる。季節を問わず水量が豊富で、河口

近くにしては流れが速かった。石積みの護岸の兩岸には、大きく育った桜と、数本おきに柳も植えられていて、気持ち良く散歩ができる。私が育った家は、もう取り壊されてしまったが、喫茶店から数分歩いた先の静川沿いにあった。

駅前の通りから静川沿いの道に入ると、静かな住宅街が続く。川の両側にブロックを敷いた遊歩道が整備されていて、駅の近くにくつか新しい低層のマンションが建っていた。小さな神社に立ち寄って近況報告と家族の健康を祈願してから、さらに数分歩くと、静川珈琲店が見えてきた。

静川珈琲店は、私が中学生だった頃に古い民家を改装して開店した喫茶店で、一階にカウンターが五、六席、二階にテーブルがいくつかと、静川を見下ろす大きな窓に面したカウンター席があった。高校生の頃、同級生に誘われて初めて来たときに、この店の二階のカウンター席が気に入って、それから何度か一人で読書や勉強をしに来たことがある。

引き戸を開けて店の中に入ると、コーヒーの香りがして、ピアノの音が聞こえた。カウンター奥で焦茶色のエプロンをして働いていた若い女性が、こちらを振り向いて「こんにちは」と挨拶をする。二階の席が空いているか聞いてみると、空いているとのことだったので、板張りの階段を上がると、客は二人だけで、静川に面したカウンターの席には誰もいない。古い時代の木造建築を活かした素朴で暖か味のある内装は、昔からほとんど変わっていないようだった。そういえば三十年前も、いつもクラシックの音楽が流れていて、三十歳ぐらいの焦茶色のエプロンをした女性が働いていたような気がする、そんなことを思い出しながら、カウンターの右端の席に腰を下ろして静川を眺めていると、先程の女性がオーダーを取りに来た。

「お決まりになりましたか」

カウンターに水を注いだグラスを置く手のネイルがきれいに磨かれている。亜麻色のシルクのような優しい光沢のあるシャツを着ていて、目鼻立ちの整った顔に薄いメイクをしている。香りは身につけていないようだった。

「ブレンドコーヒーをお願いします」

「ブレンドコーヒーですね。今から豆を挽いてお淹れしますから、しばらくお待ち下さい」女性はそう柔らかい声で言って、階下に戻っていった。

この店には、妻と一緒に来たことが二回ある。

一回目は、結婚する前に父に挨拶に来た時なので、もう二十五年も前のことになる。手紙を出しておけば十分だと言ったのに、妻の強い希望で父に会いに行くことになった。父は、私が二歳の時に私の母と死別し、その後は大塚家と縁を切っていたので、妻と結婚する頃には、自分には父の自宅の住所や電話番号すら分からず、和田書店の代表電話に電話をかけて父と会うアポイントを取った記憶がある。

和田書店は、自分が高校生だった頃から大浜で一番大きな書店で、当時は、大浜の昔からの繁華街にあった。大浜駅から大浜高校まで徒歩二十分ほどの道程の丁度真ん中あたりだったので、高校生の頃は毎日のように学校帰りに立ち寄っていた。戦前に建てられたエレベーターもない古いビルの、一階から三階までが売場で、四階が事務所になっ

ていた。妻と一緒に父に会いに来たときは、一階で忙しそうに働いていた店員さんが、四階の社長室まで幅の広い階段と一緒に上って案内してくれた。社長室には、大きな木製の机と革張りのソファセットがあつて、けれどもそれ以外には取り立てて何もない殺風景な部屋だった。妻は買ったばかりの藤色のワンピースを着ていて、そこだけが少し華やいでいると思つた記憶がある。その部屋で散々待たされて、結局、父が現れたのは約束の時間から一時間近くも経つてからだった。いかにもゴルフ場帰りという服装で社長室に入つてくると、遅れたことへのお詫びもそこそこに、「遠いのに、別にわざわざ挨拶に来てもらうこともなかった」「戸籍上は親子と言つても、二歳の時に別れてから、今日を含めて二回しか会つたことがない」「こっちも忙しいから、東京で結婚式をすると言われても出られない」などと大きな声で一方的に捲し立て、「親の財産はあてにせず、自分達の力で頑張ってくれ」と笑顔で言うのと、悪いが次の予定があるからと慌しく出て行つてしまつた。父が社長室にいたのは五分ほどだっただろう。婚姻届に証人として署名をしてもらおうと思つていた妻は、話を切り出すことすらできなかった。父が出て行くくと、女性の従業員が社長室に来て、遠方からご挨拶に来て頂いたのにすみませんと言つて大きな封筒を差し出した。ホテルに帰つてから封筒を開けてみると、手が切れるような新札で二十万円が入つていた。

その翌日、大浜にいる叔母の車で森川に来て、祖父母と母の墓参りをした。墓参りの後、妻と二人で私が育つた家を訪れたのだが、地主だった高祖父が小さいながらもそれなりに贅沢をして建てたという建物は、裏手の土蔵も一緒に跡形もなく取り壊され、カラフルなプレバブのレンタルビデオショップが建つていた。妻と一緒に静川珈琲店に来たのはその帰りで、二人並んでこのカウンターの席に腰掛けて、窓から静川を眺めながらお互いに黙り込んでしまつた記憶がある。

二度目に妻とこの店に来たのは、父が継母と再婚した時で、これももう二十年以上も前のことになる。和田書店の人から、父が再婚相手を紹介したいと言つているので大浜に来てもらいたいという連絡があり、飛行機のチケットが送られてきた。妻と、当時二歳か三歳だったあずさを連れて大浜空港に着くと、黒塗りのハイヤーの運転手が迎えに来ていて、料亭に案内された。六十歳の父が再婚相手として紹介した継母は、三十代半ばにしか見えないはつとするほどの美人で、口数が少ない人だった。父は、大きな声で日本経済や大浜の地域経済、和田書店の経営や人生訓のようなことについて話し続け、継母のことについては、芳子という名前で、中学生の子供が二人いるということくらいしか話さなかつた。食事が終わった時に、父は「これからは芳子や芳子の子供達と生きていくから、二人は自分達の努力で娘さんを育てていってくれ。今後は一切何の支援もできないが、遅ればせながら、結婚と出産のお祝いだ」と言つて、私に大きな紙袋を渡した。

その晩、妻は、父と継母があずさを抱きもせず、手すら握らなかつたと言つて泣いた。父から渡された紙袋には、地元の和菓子と一緒に分厚い熨斗袋が入つていて、中には帯封をびしりとまかれた百万円の束が二つ入つていた。妻と静川珈琲店に来たのは、その翌日に大塚家の墓参りをした後だった。

妻は、あのとき以来、父や継母と会おうとはしなかったし、私も会うつもりはなかった。継母から父の葬儀の連絡があったとき、妻は葬儀に出るように私に勧めたけれど、自分やあずさも葬儀に行くとは言わなかった。

三

通夜が終わり、通夜振る舞いの席に移ってから、ホテルに帰ることができなかった。通夜の受付から控室まで案内してくれた斎場の担当者から、通夜の後で継母が話したいと言っているので残っていてもいいと言われていた。この担当者は、継母からの伝言を伝えた後で、通夜と葬儀の時の私の席が、葬儀委員長を務める和田書店の社長の席のすぐ後ろの席になると四回も執拗く念を押していた。おそらく、父の周囲では殆どその存在が知られていない「息子」を、遺族の席に座らせるわけにもいかず、取り扱いに困ったのだろう。そういえば私が通された控室も、遺族用の控室ではなく、弔問客用の控室だった。

通夜には二百人ほどの弔問客が来ていて、会場には名前が知られた地元の企業や、知事、市長からも立派な花輪が届いていた。通夜が進行する間、私は決められた席に座って父の遺影を見上げていた。物心がついてから父に会ったのは三回だけで、そのいずれもがあまり思い出さくはない経験だった。父が自分を息子として扱ったとは思えないし、自分も父親として接したとは言えない。血は繋がっているのかもしれないが、親子とは言い難い関係で、妻に促されなければ、わざわざ森川まで来て通夜や葬儀に出ることもなかっただろう。

通夜振る舞いが始まってから三十分経っても、継母は挨拶に来る弔問客と話し続けていて、自分を気に掛けている様子は全く窺えなかった。周囲では数十人の弔問客が立食の振る舞い料理をつまみながらいくつかのグループに分かれて話していたが、どのグループにも見覚えのある顔は一つも見当たらなかった。

そろそろホテルに帰ろうかと考え始めたときに、部屋の反対側から歩いてきた男性に声を掛けられた。

「失礼ですが、大塚さんですか」

六十歳くらいだろうか、白髪交じりの短髪が日焼けした顔に似合っている。

「渡辺と申します。十二、三年前から和田書店の監査役を務めておりまして、その前から顧問弁護士としてお付き合いをさせて頂いています」

名刺を交換すると「渡辺法律事務所 弁護士 渡辺 健太郎」と書かれていた。大浜で法律事務所を開いているらしい。

「この度は突然のことです、お悔やみを申し上げます。和田会長には、つい先週もお会いして、とても元気なご様子だったのに残念です」と言って渡辺弁護士は頭を下げた。

「会長から大塚さんのことは何度かお聞きしていました。長いこと会っていないけれど、大浜高校から東大の法学部に行った息子がいるんだとご自慢の様子でした」

「そうでしたか」

父が自分のことを話題にしていたのは意外だった。

「私も大浜高校の出身なんですよ。高校では柔道ばかりしていて、東大には行けませんでしたがね」と言って渡辺弁護士は笑った。

「渡辺先生は、大浜高校は何回卒ですか」

「私は、七十六回卒です」

「私は八十六回卒なので、十年先輩ですね。先生が大浜高校にいらした頃も、柔道部の顧問は赤西先生でしたよね」

「そう、『あかちん』先生でしたね」

その名前を聞いて、赤西先生の姿が鮮やかに思い出された。赤西先生は、大浜高校の柔道の先生で、自分が高校生だった頃にはもう還暦が近かったはずだが、その歳になっても、柔道場に立つと周囲の重力が増すような迫力があつた。生徒から好かれていた先生で、何故か、道場の畳で擦ると真っ赤になって巨大化する陽根の持ち主だという伝説があつた。先生の小柄で筋肉質な身体とは不釣り合いな、身を持って余すほど大きく、それでいてどことなく滑稽で愛嬌のある放蕩息子の荒唐無稽な目撃談で盛り上がったことは一度や二度ではない。

そんなことを思い出しながら渡辺弁護士と二、三分話していたところで、継母がやって来た。

「ちよつとよろしいですか」と継母が言うと、渡辺弁護士は「では」と軽く頭を下げて去っていった。

「遠いところをお越し頂きました、有難うございます」

継母は、もう六十歳前後のはずだが、絹の喪服を着た立ち姿は相変わらず美しかった。

「今日、こちらにお着きになりましたか」

「ええ」

「お帰りのご予定は」

「明日の葬儀が終わったら、東京に戻る予定です」

「私共は、身内だけです、葬儀の後で火葬に立ち会いますが、大塚さんはどうされますか。火葬場までは、ここからちよつと距離がありますが」

「午後からは、大塚の家の墓参りに行きたいと思っておりますので、葬儀が終わったところで失礼させて頂きます」

「そうですね」と言っただけで継母は言葉を切り、部屋の隅の方へ目をやってから、再び私の方へ向き直り、部屋の隅へ移るように私を促した。

「ご連絡を差し上げていなかったようでも申し訳ないのですが」と継母は話しを続けた。

「主人が相続についてご相談していた弁護士の吉田先生から、主人の遺言の説明をしたというお話しを頂いています。主人から、なるべく早く相続人全員を集めて遺言の説明をするように、と頼まれていたそうで、明日の午後四時から、森川のロイヤルホテルで遺言の説明をお伺いすることになっています」

そこまで話すと、継母は俯いて間を取った。

「私も呼ばれているのでしようか」父の財産を相続するつもりはなかったが、相続人全

員ということであれば、私も含まれるのだろう。

「吉田先生からはそのように言付かっています」

弁護士から説明を聞きたいとは思わなかったが、改めて説明してもらおう場を設けてもらうのも憚られた。明日は取り敢えず夜八時の羽田行きの最終便を予約してあるので、森川から空港までタクシーを使うのであれば、多少お金はかかるものの、六時過ぎまでは森川にいられるはずだった。

「分かりました。明日午後四時に、森川ロイヤルホテルにお伺いします」

「急なご連絡になってしまつて、申し訳ありません。四時にロビーでお待ちしておりますので、よろしくお願い致します」そう言つて頭を下げたから、継母は再び弔問客の方へ戻つていった。

継母が弔問客と話し始めるのを目で追いかけてから、手近なテーブルに行つてコップにビールを注ぎ、そのまま一息に飲み干した。コップをテーブルに戻すと、濁つた溜息が出た。

その夜、街中で軽く食事をした後でホテルの部屋に戻つてから、妻に電話を架けた。葬儀の後で弁護士から父の遺言の説明を受けることになつたので、最終便で東京に帰ると伝えた。もしかすると自分にも判子代程度の遺産の相続があるかもしれないけれど、辞退しても良いかと聞くと、妻は私の好きにしてもらいたいと答えた。

四

葬儀の日も森川の街の上には梅雨空が広がつていて、ホテルを出る頃に細かい雨が降り始めた。

午前十時からの葬儀には二百人あまりの弔問客が集まつていた。和田書店の関係者や取引先など仕事関係の弔問客が多いようだったが、その中で、父が馴染みにしていたクラブの女性だろうか、髪を綺麗にセットして喪服に身を包んだ美しい女性達が十人ほどまとまつて弔問に来ていた様子が皆の目を引いた。

葬儀は、他には取り立てて変わったこともなく、二時間程度で恙なく終わった。僧侶が読経し、県議会議員が弔辞を読み、全国的な大手書店の社長の弔辞を取締役が代読し、和田書店の社長が葬儀委員長として弔辞を読んだ。どの弔辞も、父の経営者としての業績や、地域社会への貢献を称えるもので、私には空しく響いた。むしろ、あの美しい女性達に話ししてもらつた方が面白いだろうになどと思ひながら、焼香を終えた彼女達を眺めていると、その中の一人の女性に見覚えがあるような気がしてきた。森川や大浜の女性に見覚えはないはずなので、東京で会つた誰かに似ているのだろうかど記憶を探つているうちに、ふと、静川珈琲店の亜麻色のシャツの女性ではないかと思ひ当たつた。もう一度その顔を確かめてみたいと思ひ、出棺を見送るときに彼女がいなか探してみたいけれど、傘を差した多くの弔問客に紛れてしまい確かめることはできなかつた。

葬儀を終えて継母達がバスで火葬場に向つた後で、頼んであつたタクシーに乗つて

大塚家の墓参りに出かけた。

大塚家の墓は、街の南にある丸山の中腹にある。墓地の入口でタクシーを降り、しばらく待っていてもらった。入口から少し坂を上り、北西向きの斜面を整地した区画に入る。大塚家の墓があるこの区画からは、森川の街全体を見下ろすことができる。森川は、幕末まではここから二十キロほど北にある大浜と勢力を競い合っていたはずなのだが、明治以降、県庁所在地となった大浜と比べると、時代の波に乗れず徐々に後れを取ってきたように見える。今日は霧雨が降っていることもあってか、こうして街を見下ろしているとき、どこか運命を受け入れた寂しさや優しさのようなものが漂っているようにも思えてくる。

少しの間森川の街を眺めていた後で、大塚家の墓に向かった。お墓の場所を忘れていないか心配だったが、高校生の頃まで年に何回かは祖母と墓参りに来ていたので、お墓の場所は忘れていなかった。手ぶらで来てしまったが、大浜の叔母が墓参りに来たのだろうか、お墓はきれいに掃除されていた。

大塚家は森川の古い地主の家系だが、この墓には祖父母と母の三人しか入っていない。祖父は、自分が生まれた時にはもうこの墓に入っていた。親戚と仲違いして、古くからの大塚家の墓には入らなかったらしい。母は、私が二歳になる前に亡くなったので、私には母の記憶がない。祖母は、私が大学三年生の時に亡くなった。祖母には、育ててもらった恩はあるが、偏狭な人で辛い思い出が多い。

地面に傘を置いて、細かい雨に濡れながら、墓前で目を閉じて手を合わせた。長い間墓参りを怠ってきたことを詫び、家族が健康に暮らしていること、娘が大学を卒業して無事に就職したことを伝え、数日前に父が亡くなったことも報告した。

目を開いて傘を手に取り、もう一度墓石に向き合ってから、祖父母や母は父の死をどんな気持ちで受け止めるだろうと考えてみた。お墓を後にしてタクシーに戻るまでの道すがら、叔母から聞いた大塚家と父の過去の経緯に思いを巡らせながら考え続けてみたけれど、祖父母も母も、父と同じように自分からは遠く離れ過ぎていて、気持ちを推し量ることはできそうになかった。

五

海沿いにある森川ロイヤルホテルに四時少し前に着くと、冷房が効いた広いロビーで継母が待っていた。案内された二階の会議室に入ると、白いクロスを掛けたテーブルがコの字型に並べられていて、奥の席に継母達が座っていた。窓から海を眺めていた吉田弁護士は、六十台半ばだろうか、禿頭で銀縁の細めの眼鏡をかけ、仕立てが良さそうなグレーのスーツを着ていた。こちらに来て私に挨拶し、一緒に来ていた同じ法律事務所の若手の弁護士を紹介した。

弁護士が窓を背にした中央の席に座り、私が継母の正面の席に腰を下ろすと、「お忙しいところ、お集まり頂きました、ありがとうございます。皆様お揃いになりましたので、始めさせて頂きます」と吉田弁護士が話し始めた。挨拶をした時は物静かな学者のような印象を受けたが、話し始めた声は大きく張りがあった。

「大浜で弁護士をしております吉田と、同じ事務所の近藤です。亡くなられた和田勝さんから、生前、相続についてご相談を受けておりました。今日ご説明申し上げます勝さんの遺言については、私と近藤弁護士が証人になって、昨年四月に公正証書遺言を作成しております。勝さんから、勝さんが亡くなった後、できる限り早い時点でご相続人の皆様全員にお集まり頂いて、遺言の説明をするようにとの指示を受けておりましたので、本日、お集まり頂いた次第です」

カートを押し部屋に入ってきたホテルの従業員がコーヒーとお水をテーブルに配っていたが、吉田弁護士は話しを続けた。

「勝さんとは、最初に遺言を作成された平成十六年から、毎年春にお会いして、勝さんのご意思やご資産の状況を確認し、何度か遺言を作り直したこともありましたが、相続人の皆様とお会いするのは、どなたとも今日が初めてだと思います」

吉田弁護士は全員を見回したが、全員異存ないようだった。

「本日の進め方ですが、まず親族関係の確認をさせて頂き、その後で、遺言の内容についてご説明をさせて頂きたいと思っております。皆様からご質問がありましたら、その後でお答えさせて頂きます」

コーヒーを配り終えたホテルの従業員が神妙な顔をして部屋から出て行った後で、近藤弁護士が簡単な家系図のようなものが書かれています。奥様の芳子さんは、平成六年に勝さんと

「お配りしたのは、勝さんの相続関係図です。奥様の芳子さんは、平成六年に勝さんとご結婚されて、同時に、芳子さんと前のご主人との間に生まれたお子様である健一郎さんと優子さんのお二人が、勝さんと養子縁組をされていますね」

「はい」吉田弁護士に問いかけられた継母が答えた。

「勝さんは、平成十二年の秋まで、芳子さんやお子様と大浜のご自宅で生活をされて、その後はご家族と別居して、平成十八年からは森川のマンションで暮らしていたと勝さんから聞いていますが、間違いありませんでしょうか」

「それは相続と何か関係があるんですか」と健一郎が口を挟んだ。

「あまり関係はありませんが、勝さんから、この場で確認するようにと言われていたのです」

継母が「そのとおりです」と答えたので、吉田弁護士は話しを続けた。

「健一郎さんは独身で、お子様はいらっしゃいませんね」

「はい」健一郎が答えた。

「優子さんは、ご結婚されていて、お子様が二人いらっしゃる」

「はい」と優子が答えた。

「大塚朗さんですが」と言って吉田弁護士がこちらを見た。「朗さんの関係は多少複雑で、昔の戸籍を調べさせて頂きました。この場でご確認させて頂いても差し支えありませんでしょうか」

「構いません」を私は答えた。

「朗さんの母親である大塚ふみさんは、祖父大塚文蔵さんと祖母千代さんご夫婦の長女で、昭和三十八年に勝さんにご結婚され、同時に勝さんは文蔵さんご夫婦と養子縁組をして大塚の姓になっています。同じ年に文蔵さんが亡くなり、その後、勝さんとふみさ

んの長男として朗さんが昭和四十二年に生まれました。昭和四十四年にふみさんが亡くなり、同じ年に勝さんと千代さんの養子縁組が解消されました。この時に、勝さんは和田の姓に戻っています。昭和四十四年以降、勝さんは朗さんと一緒に暮らしたことはなく、朗さんは昭和六十一年に東京の大学に進学されるまで、祖母の千代さんと森川で生活されていたと勝さんから聞いています。千代さんは、平成元年に亡くなっています。朗さんはご結婚されていて、お子様がお一人いらっしゃる。長くなりましたが、間違いありませんでしょうか」

「間違いのないと思います」戸籍を調べているのであれば、間違いはないはずだった。「ご確認を頂きましたように、勝さんの親族関係はお手元の相続関係図のとおりです。法律が定める法定相続分は、芳子さんが二分の一、朗さん、健一郎さん、優子さんがそれぞれ六分の一ずつということになります。遺言では、この割合とは異なる相続の方法を定めることができますが、この割合の半分よりも少ない財産しか相続できない相続人の方は、遺留分という権利を主張することができます。この遺留分については、後で改めてご説明させて頂きます」

吉田弁護士はコーヒーを一口飲んでから、話しを続けた。雨雲が晴れてきたのか、窓の外が少し明るくなってきた。

「では、勝さんの遺言の内容をご説明させて頂きたいと思えます。公正証書遺言の写しを後ほどお渡ししますが、遺言をご覧いただくよりも、ご資産の一覧表を見ながら、どの資産をどなたが相続することとなっているかをご説明した方が分かりやすいと思いますので、そのようにご説明させて頂きます」

近藤弁護士が、今度は父の財産と評価額が記載されている一覧表を配布した。部屋の気圧がきゅつと上がったように感じられた。継母と長女は配られた一覧表に手を触れなかったが、健一郎は直ぐに一覧表のページを捲り始めた。吉田弁護士から、この一覧表は今年の四月に父に内容を確認しながら作成したもので、今年の三月末時点での父の財産が記載されており、評価額も概ね正確であるという説明があった。

三ページの一覧表には、一ページ目に不動産と自動車、二ページ目に株式などの金融商品、三ページ目に預貯金が記載されていて、全ての合計金額は六億円を超えていた。不動産と自動車で約二億円、株式と金融商品が合計で三億円近くあり、預貯金も一億五千万円近くあった。

吉田弁護士は、一ページ目から、財産の内容と、遺言で誰が相続することとされているかを説明していった。大浜の自宅と森川で父が暮らしていたマンションは、継母が相続することとされていた。父は森川の駅前にあったあのマンションの十五階で暮らしていたようだ。この他にも、大浜だけでなく東京や京都の投資用不動産があり、これらの不動産とレクサスやポルシェはそれぞれ継母やその子供たちが相続することとされていた。父は、私と祖母が暮らしていた森川の家土地を所有していたはずだが、既に売却したのでらう、一覧表には記載がなかった。

吉田弁護士が「次に株式ですが、二ページ目をご覧ください」と言うと、全員が一覧表のページを捲った。二ページ目には三十近い銘柄の株式や金融商品が並んでいた。どれもそれなりに高額だったが、末尾近くまで目を通してきたところで目が止まった。「株

株式会社開玄堂 一〇〇〇株 三八五三万円 大塚朗」と書かれている。

開玄堂は、私が生まれ育った家で営んでいた古本屋の屋号だが、祖母が亡くなった時に廃業しており、そもそも父とは何の関係もないはずだった。大浜の叔母の話では、父は祖父から相当の財産を相続したらしいので、この会社も父が祖父から相続した会社だろうか、などと考えていると、吉田弁護士が「株式会社開玄堂の株式ですが」と言ってから言葉を切って全員を見回した。

「株式会社開玄堂は、株式会社和田書店の株式の約八十六パーセントと、森川市中町の土地建物を所有していて、このほかに三百万円程度ですが銀行預金があります。負債はありません。所有不動産を賃貸していて月額六万円の賃料収入がありますが、この他に収入はありません。和田書店は、十年間以上配当をしていませんが、来年は配当ができるかもしれないと聞いています。株式会社開玄堂の株式については、大塚朗さんが相続人として指定されています」

吉田弁護士は私を見て言葉を続けた。

「遺言では、大塚さんが勝さんから一切の財産を相続しないという相続放棄をされる場合には、開玄堂の株式は、さくら書店に負担付で遺贈することとされています。さくら書店に五〇〇〇万円で開玄堂の株式を売却し、売却代金を大塚さん以外の相続人の方が相続するということです。さくら書店は、全国規模で事業を行っている大手の書店ですが、和田書店の株式の約一四パーセントを所有していますので、大塚さんが相続を放棄される場合には、和田書店はさくら書店の一〇〇パーセント子会社になります」

吉田弁護士はその後も淡々と説明を続けた。自分は、開玄堂の株式と現金二〇〇〇万円を相続することとされているが、相続税の金額が二〇〇〇万円を超えるので、相続税を支払うために一〇〇〇万円近い自己資金を用意する必要があるだろうといった説明があり、遺留分の説明もあったが、殆ど聞いていなかった。どうして自分が和田書店を相続することになっているのか、何故会社の名前が開玄堂なのか、分からないことが多過ぎた。

吉田弁護士は、説明を終えると、何か質問はないかと聞いた。継母たちからは特に質問はなかった。株式会社開玄堂が所有している森川の土地と建物の場所を聞いてみると、私が育った家があった場所の土地と、その土地の上に九年前に建てられた建物を所有しているとのことだった。「この建物は、和田書店を定年退職された山本さんという方が賃借されていて、開玄堂という喫茶店兼古書店を営業されています」と吉田弁護士は付け加えた。

最後に吉田弁護士は、父から相続人のそれぞれに宛てた手紙を預かっているのでは、この場でお渡ししたいと言って、私にも手紙を一通差し出した。吉田弁護士から手紙を受け取り、お礼を述べてから、継母たちに続いて部屋を出た。ざわついた気持ちを抱えたまま階段を下り、ロビーに出たところで目に付いたソファに腰を下ろし、指先で慎重に手紙の封を切る。父からの最初で最後の手紙には、癖のある手書きの文字でこう書か

れていた。

朗へ

突然のことで驚いたと思う。

書店業はどこも厳しい状況だが、伊藤社長と佐々木店長がいれば和田書店は大丈夫だろう。相続を放棄してもいいが、その前に二人と話してみてもらいたい。開玄堂の山本宙さんにも会ってくれ。

和田書店の株主になるときは、さくら書店の斉藤会長に挨拶に行ってもらいたい。斉藤社長にはお世話になった。

長年にわたり朗を拒んできたことは、申し訳ないと思っている。

人生、それなりに頑張って生きてみたつもりだったが、思うようにいかないこともある。

小さくなるな、大きくなれ。

健闘を祈る。

和田 勝

ホテルの玄関を出ると、雨は上がっていて、梅雨空の雲の切れ間から幾つも筋を描いて夕日が射していた。

予約してあったタクシーの運転手に、海を見て来たいのもう五、六分待ってほしいと頼むと、運転手は笑顔で頷いて私のキャリーバックをトランクに入れてくれた。歩いてホテルの車寄せを出て、海岸沿いの道路を横切り、コンクリートの堤防の階段を上すると、目の前に森川の海が広がっていて、沖の方が雲間から射す光を受けて柔らかく輝いているのが見えた。

開
玄
堂

その日は、夕方から降り始めた細かい雨が、日が暮れてからもずっと降り続いていました。空を覆う梅雨の分厚い雲から無数の雨滴がゆっくりと下りてきて、地上の明かりに僅かな時間だけ照らされてから、あるいは全く光を受けないこともなく、木々や建物、地面や水面に吸い込まれていきます。静川に沿って植えられた桜並木も、川沿いのタイルを敷いた遊歩道も、たつぷりと水分を蓄えて重たそうに見えます。

夜が少しだけ深まって、鎮まった街の空気が微かに濃さを増したころ、静川に面した開玄堂では、閉店後の片付けをする宙さんと、閉店後にやってきてバーボンを飲み始めた木村さんが寛いだ時間を過ごしていました。

「宙さん、ステイブ・マツカリーのアンコールの写真集があるね」店の奥の本棚で古本を眺めていた木村さんが、背の低い本棚の上に置いてあった写真集を取り上げました。「そう。木村さんがアンコールに行くって言うから、家から持って来てね。カウんターの奥に置いておいたんだけど、高橋くんが見ていた後で、誰かが棚に置いちゃったのかな。良かったら眺めてみてよ」

「ありがとう」木村さんは近くの大きなテーブルにグラスを置いて、立ったままで書棚の上の写真集を捲り始めました。「いい写真だね。こう、カンボジアの湿り気が感じられるっていうか、土地の空気が写り込んでいるっていうか」

「そうだね」

「それに、こう、同じ瞬間のいろんな時間が写っているんだよね。遺跡とか、樹木とか、人間とか、こう、サイクルが長かったり短かったり、スピードがゆっくりだったり速かったり、いろんな時間が一枚の写真の中に写り込んでいて、それが、なんていうのかな、調和していて自然なんだよね」

「木村さん、いいこと言うね。確かに、アンコールはそういう場所だよ」カウんターの中で片付けをしていた宙さんは、食洗機から取り出した食器を棚に収め始めました。

「壁に掛けている写真もアンコールの写真にしたんだけど、気が付いた」

「そうなんだ」

木村さんは写真集から目を上げて背の高い本棚の脇に掛けられた写真に視線を向けましたが、こちらはいつもと変わらない書店の前に四人が並んでいる小振りな古い白黒写真で、一番右側に若い頃の宙さんが写っています。木村さんは、他の人達が誰なのか知らないはずですが、特に気には掛けず、そのまま振り向いて東側の壁に掛けられた写真に向かいました。毎月のように入れ替わる五枚の写真は、アンコールの遺跡やカンボジアの田舎の風景を写した写真でした。

「これ、宙さんが撮った写真だよ」

「そう」

「いつ頃撮ったの」

「九十七年の正月。マツカリーの写真とちょうど同じ頃で、ポルポトの内戦は一応終わったけど、まだプノンペンやアンコールを外れると治安があまり良くなかったから、観

光客も少なくてね。写っていないでしょ」

飾られている写真には、カンボジアの人達が写っているものもありましたが、どの写真にも観光客らしき人影は写っていません。

「いいね、何て言うの、こう、時間の感覚がね」

「無理しなくていいよ」宙さんが笑いながら言いました。「でも、アンコールは良かったな。木村さんも、アンコールに行ったら、きつと来て良かったって思うよ」

木村さんは、テーブルに置いてあったグラスを手に取って、バーボンを飲みながら壁に掛けられた写真を一枚一枚丁寧に眺めていました。

「宙さん、この子、足首から下がね」木村さんが五枚目の最後の写真を見ながら言いました。バナナかココナッツの葉で編んだような家の壁の前で、父親に抱かれた四五歳の子供がまっすぐにこちらを見ている写真でした。

「そう。写真を撮った時にはそのことに気が付いていなくてね」宙さんは鍋を洗いながら目を上げずに話しています。「日本に帰ってきて現像してから気が付いて、自分は何にも見えてなかったんだって、ショックでね。だから、ちよつと忘れられない写真になっちゃって。その子、目に力があるでしょ。頭も良さそうだし、今頃どうしているのかなって、たまに思い出すんだよね。もう今度の正月で、その写真を撮ってから二十年経つから、その子も、元気に暮らしていたら、子供ができて父親になっていてもおかしくない歳なんだよね」

木村さんが宙さんを振り向いて、「結婚できたかな」と訊きました。

「どうかな」宙さんが答えます。

「まあ、宙さんも一生独身だからな」木村さんは軽くなったグラスを手にカウンターに戻ってきました。「宙さん、あのアンコールの写真集、貸してくれない」

「いいよ」

「あとさ」木村さんが続けました。「この間話していたウォン・カーワイの映画も借りられる」

「二階に持ってきてあるから、あとで持ってくるよ。その前に、ちよつと手伝ってくれ。テラス席はいいから、そのテーブルを拭いてくれないかな」宙さんが、固く絞った布巾を四枚持ってカウンターから出てきました。

「了解」と言って木村さんは三つ並んだ四人掛けのテーブルを拭き始めました。宙さんはカウンターのテーブルを拭いています。

「宙さんは、二階も使っているの」と木村さんが訊きました。

「いや、二階は借りていないんだけど、誰も使っていないし、和田さんから『たまには掃除しておいてくれないか』って頼まれて、鍵を預かっているから、ちよつと荷物を置かせてもらったりしていいね」

「二階は、普通に暮らせるような部屋なんですよ」

「うん。2LDKっていうのかな、店とほぼ同じ広さだから、部屋が広くて、子供がいる家族でも十分暮らせると思うよ」

「どうして貸しに出さないんだろうね。借りたい人はいると思うけど。いい場所だし、

開玄堂もあるし」

「まあ、和田さんが決めることだから」

二人でカウンターとテーブルを拭き終えたところで、宙さんはカウンターに戻って布巾を洗い、消毒液に浸してから、裏口を出て二階に上がって行きました。木村さんは、再び壁に掛けられた写真に向き合っていました。外では細かい雨がゆつくりと降り続いていました。

数分後に宙さんがDVDを持って戻ってきたとき、木村さんはカウンターの中でバーボンが入っていたグラスを洗っていました。

「いいよ、木村さん、グラスはそこに置いておいてよ」宙さんはそう言いながら、木村さんにDVDを渡しました。

「ありがとう。じゃあ、借りてくね」タオルで手を拭いた木村さんは、DVDを受け取り、ポケットから財布を出してバーボンの代金を払いました。

「もう店仕舞いでしょ。宙さんは、夕食は家で食べるの」

「いや、今日は食事の用意は要らないって言ってきたから」

「お母さんは元気」

「九十過ぎても本当に元気だね、うちの母親は」

「健康が何よりだよね。宙さん、どこかで食べるんだったら、飲みに行かない」

「いや、今夜はフルムーン・パーティーだから、ここでお見送りするよ」宙さんは冗談めかしてそう言いながら、木村さんのために入口の扉を開けました。

「フルムーン・パーティーって言ったって、雨だし、月なんか出てないよ」木村さんが空を見上げてから傘を開きます。

「まあ、そうなんだけどね」

夜が更けて、あと半時ほどで日付が変わろうとする頃、宙さんは明かりを落とした開玄堂のカウンター席に腰掛けて、小さな読書灯の光で本を読んでいます。その深夜の開玄堂に向かって、八十歳を過ぎた老人が、両腕に一杯の記憶を抱えて、静川沿いの遊歩道をゆつくりと、でもしつかりとした足取りで歩いて来ます。

街には相変わらず細かい雨が音もなく降っていて、川の底では魚たちが満月の気配にじつと耳を澄ませています。

食器を流しに運んで食卓を拭いていたら、お母さんがお風呂に入るといので、私も食器洗いを始める前に一息つこうと思って、ちよつとベランダに出てみた。家の中よりも少し涼しい。空を見上げても、曇っていて月は見えなかったけれど、そういえば月曜日の夜にきれいな満月が見えたから、この時間はまだ月は出ていないのかもしれない。

うちは五階なので、そんなに高さはないけれど、団地の前が広い公園なので見晴らしがいい。公園の向こうに、川沿いの桜並木も見える。南向きで日中は日当たりが良くて、洗濯物も乾くし、鉢植えの植物も元気に育つ。古い団地だけれど、このベランダはかなりいいと思う。うちの家族はみんなこのベランダが好き。お父さんもお母さんもこのベランダが気に入って、同じ団地の中でわざわざ引っ越したらしい。ふたりとも、わたしもだけど、ベランダから外を眺めてぼーっとしていることがある。団地ができた時からずっと隣の五号棟に四十年以上も住んでいたおばあちゃんも、うちのベランダが好きで、「団地の中で一番にいいベランダだね」とよく言っていた。そう言うってから、たいてい「幸せだね」と付け加えた。おばあちゃん。もう亡くなって三年になるけれど、どうしてるかな。どこかでお母さんの誕生日を祝ってくれているんだろうな。

今日はお母さんの四十八歳の誕生日。お父さんと三人でお祝いをした。お母さん、幸せそうだったな。わたしは、初めてのボーナスで買った益子焼のマグカップをプレゼントした。お母さんはコーヒが好きで、家で翻訳の仕事をしているから、毎日何杯もコーヒを淹れて飲む。近所のスーパーで買ったマグカップも、使い込まれて家族のように馴染んでいるけど、たまには気分を変えて新しいカップを使ってみるのもいいかな、と思った。お母さんとても喜んでくれた。

お父さんのプレゼントは、ティファニーのバロック・パールのピアスだった。ゴールデンウィークの銀婚旅行の時にベネチアで買ったバロック・パールのペンダントとセットになる。お母さんに似合っていて素敵だった。うちの両親は仲がいい。お互いにもわたしの歳くらいで結婚を決めたわけだから、ちよつとうらやましいと思う。

ベランダから家の中に戻ると、お父さんが食器を洗っていた。

「手伝おっか」というと

「じゃ、グラスを拭いてもらおっか」と返してきた。

コンロの上に布巾を敷いたお盆が乗っていて、洗ったワイングラスが伏せてある。

「お母さん、嬉しそうだったね。今日のパエリア、美味しかった」

「あずきの料理も美味しかったよ」

「そうでしょ。あの料理、おばあちゃんに教わったんだ」

食器棚から布巾を出してきてグラスを拭きながら、ちよつと迷ったけれど、訊いてみた。

「お葬式、どうだった」

今日はお母さんの誕生日だったし、昨日のお葬式の話はしていなかった。

「お通夜もお葬式も、弔問客が二百人くらいは来ていたかな」お父さんはサラダボウル

を洗いながら「県知事とか県議会議員とか、いろんな人からお花が来ていたし、お葬式に来ていたのも会社関係の人が多かったんじゃないかな。さくら書店の役員さんが来て、弔辞を読んだ。立派なお葬式だったよ」と言っていて、サラダボウルを水切りかごに入れた。

「森川のお祖父さんって、大きな本屋さんの社長さんだったんだよね」

「うん」

「どんな人だったの」

お父さんは、何年か前にわたしがプレゼントした大きめの平皿を丁寧に洗って洗剤を流してから、ちよつと迷った後で、いっぱいになりかけた水切りかごには入れずに、流し台の上にお皿を置いて、それからレバーを下げて水を止めた。

「自分も、殆ど会ったことがないから」そう言っていて、壁のフックに掛けてあった布巾を取って平皿を拭き始めた。「二歳になる前に母親が亡くなって、父親は家を出て行って、その後はお祖母さんと二人暮らしで、父親とは全く付き合いがなかったから、どんな人なのか全然知らないんだよね」

二歳の頃から二人暮らしっていうのは、お母さんと一緒だった。お母さんは母親と二人暮らしだったけど。

お父さんは平皿を食器棚にしまつて、サラダボウルに取りかかった。

「大浜のあや叔母さんから、父親は自分とは苗字が違って『和田』という人で、和田書店の社長さんだって聞いたのが高校三年の時で、それまでは自分の父親については本当に何も知らなかったし、物心ついてから父親に初めて会ったのは、お祖母さんが亡くなった時だから、もう大学三年だったんだよね」

ワイングラスを拭き終わったので、食器棚にしまつて、他の食器に取り掛かる。

「その後も、父親っていうか和田さんに会ったのは二回だけ。二回目のときは、あずさも一緒だったんだよ。覚えてないと思うけど」

「覚えてない」

私は二、三歳だったから、何も覚えていない。

お父さんは布巾をフックにかけて、今度はフライパンを洗い始めた。

「和田さんは、六十歳のときに四十歳くらいの人と再婚して、その人の家族と一緒に暮らしていたから、我が家とは年賀状の行き来くらいしか付き合いがなかったな」

そういつて、洗い終えたフライパンを私に渡す。

「戸籍の上では親子だけど、親子っていう感じじゃないんだよね」

何か言葉を返そうと思うけど、良い言葉が浮かばない。お父さんはパエリア用の鍋に取りかかった。鍋の底にこびりついて食べられなかったおこげを落としている。

「お母さんには話したんだけど」お父さんは手を止めずに話しを続けた。「お葬式の後で、弁護士さんから和田さんの遺言について説明があったんだ。遺産の大半は再婚した奥さんやその子供たちが相続することになるんだけど、和田書店の株式は、お父さんが相続することになっていてね」

「それって、お父さんが和田書店のオーナーになるっていうこと」

「いや、まだ決まった訳じゃなくてね。遺言には、お父さんが相続を放棄した場合は、

和田書店の株式をさくら書店に売却するように、とも書かれていてね」

話しが良く見えなくなってきた。お葬式の話しが、こんな話しになるとは思ってたなかった。

「相続すると、我が家の資産は増えるとは思うけど、それなりの金額の相続税を払わないといけないし、何より和田書店の将来にある程度責任を負うことになるからね。万一、何年後かに和田書店が倒産したら、我が家にとっても痛手になるし。和田書店の人たちと話してみても、さくら書店に株式を引き取ってもらった方が良さそうであれば、相続は放棄しようと思っているんだ。あずさに訊くことじゃないかもしれないけど、いいよね」

いきなり聞かれても、良く分からないし、どう答えていいか見当がつかない。

「お母さんは、何か言ってた」

「お父さんが決めてって。お祖父さんの遺産をあてにしていたわけじゃないし、あずさもちやんと育ったし、贅沢しなければ暮らしていくくらいは何とかなるだろうから、お父さんが決めてって」

お父さんはまだパエリア用の鍋を洗っている。お父さんは、ずっと生まれ故郷を避けてきたようだったし、相続とかはしたくないんだろうな。

「お父さんとお母さんで決めてくれたら、私はそれがいいと思う。児孫のために美田を買わずって言われて育ったし、私も、お祖父さんの遺産があるとかまったく思っていないから、どっちになっても全然気にしない」

「児孫のために美田を買えずつてね」苦笑いしたお父さんは「拭いて」といって洗い終えた鍋を私に渡した。これが結構重い。

夏休みに友達と旅行に行く予定の話しをしながらお父さんと二人で台所をきれいにしている、ドライヤーで髪を乾かし終えたお母さんが洗面所から出てきた。

「洗ってくれたんだ。ありがとう」とわたしたちに声をかけてから、寝室に行つてすぐに戻ってくると、紺色のTシャツの胸元に大きめなバロック・パールのペンダントが下がっている。

食卓の向こう側でプレゼントのピアスを耳に着けてからこちらを振り向いたお母さんが、「どう、似合うでしょ」と言つて、嬉しそうに笑った。

四時を過ぎたころに千代さんが商店街まで夕食の買い物に出掛けるというので、朗さんは千代さんの言いつけに従って開玄堂で店番をしながら、森川図書館で借りてきた文庫本を読んでいました。店番といってもお客が来ることは滅多にありませんから、店の掃除や片付けをするか、奥の机に向かつて本を読むことくらいしかすることはありません。朗さんは十歳になったころから、よく一人で店番をしながら本を読んでいた。最初の頃は小学校の図書館で借りてきた子供向けの本を読んでいたが、ちよつと背伸びをしたくなつたのか、五年生の夏休みからは、お城の近くにある森川図書館まで出掛けて行って大人向けの本を借りてくるようになりました。

朗さんが五年生になった年の秋から冬にかけて、森川小学校五年一組の男子の間では、日曜日の同じ時間帯に放送されていたNHKの大河ドラマ「黄金の日々」と、日本テレビの「西遊記」のどちらが面白いかという議論が盛り上がり、テレビといえば紅白歌合戦と大河ドラマしか見させてもらえなかった朗さんも、クラスの仲間に混じって「黄金の日々」の呂宋助左衛門や五右衛門、そして善住坊について熱く語っていました。しかし、年が明けて昭和五十四年となり、「黄金の日々」の放送が終了してしまうと、朗さんもテレビでは観られない西遊記が気になりだしたようで、開玄堂の棚にあった「秘本西遊記」を取り出して読み始めたのですが、これはちよつと違ふと思つたのでしよう、数日後に森川図書館から福音館書店の「西遊記」を借りて来て読んでいました。

「西遊記」を読み終えて返却しに行ったときに、顔見知りの図書館のおじさんから「中学生になつたら読んでみたら」と薦められた本が「三国志」でした。それから数週間して、朗さんは六年生になる春休みに入つてしばらくしてから「三国志」を借りてきて読み始め、一週間あまりで五巻目まで読み終えて、この日は店番をしながら六巻目を読んでいたのですが、ちよつと酔県令の節を読み終えたところで三軒先の山崎さんが開玄堂に入つてきました。

「朗くん、お留守番、偉いわね。千代さんはお出かけ」

「はい」

「どこか遠くまでじゃなくて。さつきお見かけしたら素敵な大島を着ていらしたから」

「いえ、商店街までだと思います」

「そう、じゃあ急がない」といって山崎さんは手提げ袋から五冊ばかり本を取り出しました。「これ、引き取って頂戴、お金はいいから。それから、」と山崎さんは別の手提げ袋から紺色のTシャツとジャージの上下を取り出しました。「これ、朗くん着られるかしら。うちの孫には大きすぎるから、着てもらえると嬉しいんだけど。千代さんが帰つてくるとまたいろいろ言うから、お蔵に持って行って」

急かされた朗さんは本と服を抱えて裏の蔵に持って行きました。裏の蔵は、明治の終わり頃に母屋と一緒に建てられた土蔵で、一階の床には古書が幾つも山になって積み上げられていました。一階から狭くて急な梯子を登って上がる二階が、朗さんが寝起きをしていた場所で、小さな窓に向けて机が置かれ、古びた木製の本棚と小さなタンス、布団があり、天井から裸電球が下がっていました。千代さんが蔵の中に入るとは殆どな

かったのですが、朗さんが掃除や片付けをしていたので、蔵の中はこざっぱりとできていました。

朗さんが蔵に本と服を置いて店に戻ると、山崎さんが待っていました。

「朗くんは、六年生になったのよね」

「はい」

「ちよつと痩せたんじゃない。御飯はきちんと食べてる」

「はい」

「学校はどう、お友達と仲良くしている」

「はい」

けれども朗さんは学校でも一人でいることが多い子供でした。勉強もスポーツもできましたから、いじめられるようなことはありませんでしたが、学校でも時間があるとよく本を読んでいましたから、どことなく近づき難かったのかもしれない。

「山崎のおばあちゃんも、朗くんのことを大事に思っているんだから、何かあったら相談して頂戴ね。じゃあね」と言って山崎さんは開玄堂を出て行きました。

桜がちよつと満開を過ぎた頃で、開け放たれた開玄堂の引戸越しに表を見ると、次第に暮れてゆく夕日を浴びながら、静川沿いの桜並木から沢山の花片が絶え間なく散り降っていて、その下を自転車に乗った中高生や買い物帰りの女性が通り過ぎていきます。朗さんはしばらく表を眺めていた後で、机に向かって腰を下ろし、「三国志」を読み始めようかと手に取りましたが、思い直して本を置くと、身体を反らせて本棚の上を力強く横切っている梁を見上げました。幹の形を残した太い黒松の梁には、思い切り良く鉋がかけられていて、赤っぽい木肌の所々に濃い樹液が染み出ていました。開玄堂の建物は、大きくはありませんでしたが、この辺りでは名前の知られた地主だった大塚家が、当時としても贅沢な素材と腕の立つ職人を使って建てたものです。朗さんの祖父にあたる文蔵さんが大塚家に婿入りした後で古書店に模様替えされ、その時に、本棚が並べられた北側の二階を取り払って吹き抜けにしたので、朗さんが暮らしていた頃は立派な梁がむき出しになっていました。千代さんは、ふみさんが亡くなり、勝さんが家を出て、大塚家の立派な家屋敷を手放すこととなり、朗さんと一人で開玄堂で暮らすことになった時、こんなことになるのならばせめて二階を残しておけば良かったと悔やんでいましたが、朗さんは、開玄堂の書棚の上に広がる吹き抜けや、巨人の筋肉を思わせる荒削りで大きな弧を描く太い梁がお気に入り、読書に倦むと良くこの梁を眺めていましたし、年末の大掃除のときには、毎年この梁を丁寧に磨いていました。

日が暮れるころになって千代さんが戻り、黙って店を通り抜けて台所に向かうのを見送りながら時計を見るともう六時を過ぎていましたので、朗さんは表に立て掛けてあった開玄堂の看板を店の中に入れて、引戸とカーテンを閉め、簡単な店じまいをしました。晩御飯は七時からで、この日の献立は、白米、味噌汁、柳葉魚、小松菜と油揚げのお浸しでした。普段着に着替えた千代さんと、座卓に並べられた料理を挟んで向かい合った朗さんは、いつものように黙って食事をしていましたが、しばらくして珍しく千代さん

に話しかけました。

「おばあちゃん、明日、学校のクラスの友達が三人で大浜に映画を見に行くんだけど、一緒に映画を見に行かせてくれませんか」

千代さんは黙っていました。

「映画の代金と電車賃をあわせて一〇〇〇円くらいあれば大丈夫だって。スターウォーズっていう映画なんだけど」

「私はもう十年以上、映画なんて見ていないね」千代さんは箸で柳葉魚の頭を取りながら言いました。

「お店のことも、家のことも、勉強もちゃんとするから、行かせてください」

千代さんはゆっくりと柳葉魚を食べ終えて、味噌汁を一口飲んでから、きつぱりとした声で言いました。「うちは、あなたが生まれてからどんどん貧乏になってしまって、いろいろ我慢をして暮らしているからね。だから、あなたを映画に行かせるようなお金はありません」

朗さんは食事をする手を止めてしばらく黙っていましたが、思い切ったように強い口調で千代さんに向かって言いました。

「明日から一週間、ご飯は半分でもいいから、柳葉魚はいらないから、友達と映画に行かせてください」

「文句を言わずに、食事をきちんと食べなさい。映画は許しません」千代さんも強い口調で応えます。

朗さんはもう泣き出しそうな表情でしたが、ぐっと堪えて言いました。

「映画が駄目なら、テレビはお金がかからないから、明日の夜八時から西遊記の総集編をやるから、観させてください」

「そんなの見なくていい」千代さんは間髪を入れずに叫ぶような大きな声で言い返しました。「食事が終わったら、片付けをして、蔵で、蔵で勉強しなさい。食事ができて、寝る場所があつて、学校に行けるだけでも、有り難いと思いなさい」

千代さんの箸を持つ手が震えていました。

お粗末様と言い置いて千代さんが二階へ上がったあと、朗さんは食器を洗い、座卓を拭き、明日の御飯を研ぎ、手鍋に水を張って頭を取った煮干しを入れ、台所で歯を磨いてから、電気を消して土蔵に向かいました。

土蔵に入る前に空を見上げると、ひんやりとした雲に包まれた朧月が光っているのが見えました。

和田会長の葬儀から数日後に大塚さんから電話があり、七月十六日に和田書店で会う約束をしてから、大塚さんについて何も知らないことに気付かされて、和田書店の社長として大いに反省させられることになった。和田会長と前の奥さんとの間に没交渉の息子さんがいることは知っていたし、確か大塚さんが大学生の頃に和田書店に来て和田会長に会ったことがあるという話しも聞いていた。しかし、和田書店の株式を大塚さんが相続することは、芳子さんたちが相続すること以上に全くの想定外だった。大塚さんから電話があつたその日のうちに、宙さんと佐々木にこのことを伝えて、大塚さんについて何か知らないか聞いてみたが、二人とも、大浜高校から東京大学の法学部に進学して東京で就職したらしいといった程度のことしか知らなかった。その後も、大浜高校や森川出身者の伝手を頼って大塚さんの情報を集めようとしたのだが、集まった情報は、小さい頃に母親を亡くして祖母と二人暮らしだったこと、高校時代は成績が良く読書家でスポーツもできたけれど、運動部にも文化部にも所属せず、あまり目立たない存在だったこと、電機メーカーに就職し、結婚したらしいが、同窓会には来たことがなく、最近の状況は分からないこと、そういった程度の断片的な情報で、大塚さんの人となりを知る手がかりは得られなかった。

大塚さんと会って何を話すかについても、考えがまとまらなかった。和田会長は、言葉を選ばずに言えば、身勝手なスタンドプレーをしたがる見栄っ張りなところがあって、だからこうして見ず知らずの大塚さんをいきなり株主に据えるような乱暴なことをするのだが、お金さえ渡しておけば和田書店の経営には口を差し挟まず自由にやらせてくれていたし、勘所は外さないセンスの良さもあつたと思う。しかし、大塚さんが和田書店のオーナーになって経営に口を出すようになる、どんな人か分からないけれど、厄介なことになるかもしれない。和田書店の良さと強さは、能力も個性も際立ったメンバーが、時間をかけて集まって培ってきたチームワークで、このチームのバランスや人間関係を壊したくはない。和田書店がさくら書店の子会社になっても、このチームワークを維持して育てていくことが課題と考えて、ここまで何年間もかけて準備を進めてきたのに、そんなことはお構いなしにいきなり大塚さんが和田書店のオーナーとして現れるというのは、正に青天の霹靂で、初めて聞いた日の夜は眠ることができなかつた。さくら書店も相当驚いているのではないだろうか。気を悪くしていないと良いのだが。

もつとも、心配もある一方で、大塚さんが和田書店を理解して尊重してくれる人であるならば、今すぐさくら書店の子会社になるよりも、大塚さんにオーナーになってもらった方が嬉しいという気持ちもある。やはり、独立経営を維持して和田書店のカルチャーを守りたいという思いがあるし、さくら書店の子会社となることに強い抵抗を感じている人間もいる。大塚さんがオーナーになつたとしても、和田書店は昔のような配当が出せる状況ではないし、いずれは株式を売却することになるはずで、さくら書店の傘下に入るのは時間の問題かもしれないが、そうだとにしても、もう少し時間をかけて事を進められる方が有難い。

私が大塚さんと会うことは、隠しても仕方がないことだから、加藤専務にも話して、

佐々木も一緒に三人で会うことにした。さくら書店から来た前任の林さんは気骨のある人だったが、後任の加藤さんはさくら書店の方ばかり向いているので、大塚さんと会うこともすぐにさくら書店に連絡するだろうと思っていたら、案の定、昨日になって「大塚さんは斉藤会長とも今月中に会うらしいですよ」と言ってきた。斉藤会長は、さくら書店を全国規模の大書店に育て上げた経営者だから、一廉の人物なのだろう。残念ながら私は会ったことがないが、斉藤会長が大塚さんと会ってくれるのは、和田書店にとっても良いことのように思える。

大塚さんは、約束した午後三時の少し前に和田書店のレジに現れた。上品な薄いグレーのスーツを着て、白いシャツに水色のネクタイを締めていた。やや背が高く、すつきりとした体格で、髪は短く、日に焼けていた。眼鏡の奥からこちらを見る大きめな目からは、聡明で率直な人柄が感じられた。長旅のせいか少し疲れているようにも見えたが、多少の緊張が表情を硬くしていただけかもしれない。レジの隣で簡単な挨拶を交わし、名刺をもらった。中島電機の法務部長という肩書だった。応接に案内してから上着を預かると、梅雨明け前の蒸し暑い日だったこともあり、大塚さんの白いシャツに少し汗が浮いていた。

それから二時間ほどの大塚さんとの会話は、私にとっては忘れられない貴重な時間になった。振り返ってみると、この時間が幸福な時間になった理由のいくつかが思い当たる。まず、大塚さんは正直だったと思う。和田会長とは生まれた時からずっと疎遠だったこと、遺言の内容に驚いていること、和田書店の株式を相続することが、大塚さん自身にとっても、和田書店にとっても、果たして望ましいことなのかどうかを考えたいと思っていることなどを率直に話してくれた。また、大塚さんは、和田会長が亡くなってから二週間あまりの短い間に、書店業の成り立ちや経営環境の厳しさ、大浜の地域経済についても、ポイントを押さえて勉強しているようだった。私から和田書店の概略を説明した際には、売上や利益の金額だけでなく、店舗の面積や賃料、人員構成や商品の回転率、取次との契約条件といった点にまで話しが及び、過去の歴史についても、いくつかの支店の出店と撤退、駅ビルへの本店移転、さくら書店との提携といった出来事について、当時の状況を踏まえた的確なコメントが返ってきて驚かされた。だがそういったことよりも、あるいはそういったことがあった上で、私が嬉しかったのは、大浜を離れてから何十年も経つ大塚さんが、高校生の頃に通った南風書店に今も愛着を感じてくれていることだった。

「家が本当に貧乏だったので、当時はあまり本は買えなかったんですが、南風書店には、高校の帰り道に週に何度も立ち寄りさせてもらってました。学校の図書室に来る南風通信も、中学生の頃から毎月楽しみに読んでいましたし、いくつか本屋さんを回った中で、南風書店が一番刺激をもらえるっていうか、好きだったので、本当にお世話になりました。今も、八月には戦争の特集をされるんですか」

「ええ、今年も開催しますよ」

「あの企画はとても印象深く、特に高校二年の夏の企画は、ちょうど和田書店に店名が変わった年ですけど、いろんな興味の種を頂いて勉強になりました。太平洋戦争の

本は、確かそんなに多くなくて、ベトナム戦争やフォークランド紛争の隣に、アヘン戦争やインカ帝国滅亡の本もあって、三国志とかヘロドトスの歴史まで置いてあって、バラエティ豊かでしたね。特集コーナーのところに本を紹介するチラシがいつも置いてありましたが、戦争特集のときは冊子になっていて」

「あれは、皆で年明けから企画して作っていて、けっこう大変だったんですよ」

「皆さんの個性とか、何より熱意が感じられて、素晴らしいかったです。申し訳ないなと思いつつ、冊子だけもらって、図書館から何冊も借りてきて読みましたね。今更ながら、すみません」

「いや、そう言って頂けると嬉しいです。和田会長の前の南風書店のオーナーは、中村さんという方だったんですが、戦争で南方に行かれた経験があつて、戦争をなくすためには、いろいろな角度から戦争を知って考えないといけない、そういう思いを強く持っていたんですね。それで戦争特集の企画が始まって、私が入社した一九八〇年にはもう始まっていましたから、五十年以上は続いているはずですよ」

「和田書店さんの情報発信力は本当に素晴らしいと思いますよ。頭が下がります。最近のブログで紹介されている本も、『くじら』とか、『高坂村盛衰記』とか、今日もお店で見かけましたけれど『マカロニほうれん荘の時代』とか、何年か前に読みましたけれど、こういった本も忘れ去られずに推してもらえるんだって嬉しかったですね。いい本屋が街にあるって、街にとって大事な財産だと思うんですよ。私が住んでいる街にはいい本屋がなくて、通勤の途中でたまに立ち寄るお気に入りの本屋があつたんですけど、今年の三月に閉店してしまつて。和田書店さんのような気骨のある本屋さんには、いつまでも元気で頑張って頂きたいですよ」

「大塚さんのような方にサポートして頂けると、我々も嬉しいです」加藤専務の牽制しようとする視線を感じたが、構わずに話し続けてしまった。「株式会社のご相続の件も、前向きにご検討頂けませんか。和田書店の状況については、過去のデータや今後の見通しを整理してご説明できるように準備しておきますので、いつでもご連絡ください」

二時間があつたという間だった。明日、大塚さんと会うことになっている宙さんから意見を聞くまでは、踏み込んだ話しは避けようと思っていたのに、相当前のめりな話しをしてしまった。そうなった理由は、大塚さんの学歴や経歴では勿論ない。大塚さんが読書家で勉強家だということでも、南風書店のファンだったことでもない。そうなった理由は、強いて言うならば、第六感とも言うしかない。何故かは説明できないけれど、この人とはやっていける、そういう確信に近いものがある。

風子さんから電話がかかってきたのは、千代さんのお葬式から三日後の午前中でした。お盆休みに入る前の良く晴れた暑い日で、忌中札が掛けられた開玄堂の入口に置かれた鉢植の朝顔が、降り注ぐ蝉時雨を浴びながら青色の花を幾つも咲かせていました。何年も朝顔を大事にしてきた千代さんが亡くなったのに、悲しい顔をするでもなく、無邪気に美しく咲いている朝顔は少し恨めしく見えたかもしれませぬ。

千代さんは、亡くなる十数年前から、毎年かならず朝顔を育てていました。最初の年の種は、千代さんが開玄堂の屋根裏で父親の文机の引き出しを偶々開けてみたときに見つけたものです。畳の部屋で使う背の低い文机で、大浜の職人が紫檀で作った大ぶりの机でした。両袖に三段の引き出しがあつて、朝顔の種は左袖の真ん中の引き出しに古い新聞紙にくるまれて仕舞ってありました。千代さんは思い出すことができませんでした。が、きつとそうに違いないと想像していたように、千代さんが小学生の頃に父親に贈った種です。あの頃も千代さんは毎年朝顔を育てていました。年号が大正から昭和に変わる頃のことです。当時、古くから地主だった大塚家は何の不自由もない豊かな暮らしを送っていました。森川の上町にあつた大きな家の門を入ると、左手に良く手入れされた庭があり、その庭に面した縁側の脇に植木鉢が五つほど並べられていて、父親が好きだった青色の朝顔が咲いていました。八月の朝、千代さんが朝顔に水をやっていて、父親が千代さんに声をかけて、きれいな朝顔だと褒めたことがありました。無口な父親に褒められたことが余程嬉しかったのか、千代さんはこのときのことを覚えていて、その年に採れた朝顔の種を父親への贈り物にしたのです。この朝顔の種が、六十年後に千代さんに見つけられて花を咲かせ、その子孫達も何世代かにわたって花を咲かせることのできたのですが、千代さんが亡くなった年が最後の年となってしまいました。

千代さんのお葬式は自宅の開玄堂で行われました。親戚は娘のあやさんの家族と孫の朗さんしか来ておらず、このほかには近所の人たちが五、六人来ていてだけの寂しいお葬式でした。大塚家が昔からの地主だったことや、戦前の裕福だった千代さんの暮らしぶりを知る人は誰も来ていません。千代さんは長いこと慎ましく暮らしてきましたし、周りからはむしろ生活が苦しかろうと思われていました。実際に、数年後には朗さんに仕送りを頼むか、人に貸していた家やアパートを売り払わないと生活が難しくなるような状況でしたし、あやさんが朗さんと一緒に亡くなった千代さんの財産を確認したときも、残された財産が少ないことに驚いていました。

お葬式を終えてあやさんが大浜に帰った翌日、風子さんから開玄堂に電話がかかってきました。開玄堂には朗さんしかいなかったもので、朗さんが二階から下りてきて、机の脇で鳴っていた黒電話を取りました。風子さんは、和田書店の従業員だと名乗ってからお悔やみの言葉と、突然電話をしたことのお詫びを述べて、和田書店の社長が朗さんに会いたいと言っていると伝えました。風子さんは朗さんと勝さんが会う日時を決めて、手短かに電話を切りました。朗さんは、千代さんからは父親について何も聞かされていませんでしたが、叔母のあやさんから、父親は和田書店の社長をしている和田という人だと聞いていましたし、千代さんが亡くなった後で、開玄堂の土地と建物が勝さんのもの

だということも知りませんでしたので、近いうちに勝さんと会うことになるだろうと想像はしていたでしょう。でも、物心がついてから一度も会ったことがない父親と初めて会う時の気持ちは、簡単に想像ができるものではありません。

朗さんが大浜の和田書店を訪れたのは、電話があった日の翌日のお昼過ぎでした。この日も良く晴れたとても暑い日でしたが、朗さんはお葬式でも着た濃紺のスーツを着て、白いシャツに大浜のデパートで買ったばかりの空色のネクタイを締めていました。約束の時間に和田書店の本店に着くと、風子さんが四階の社長室まで案内してくれました。

朗さんが部屋に入ると、勝さんは机から立ち上がって、「おう、よく来た、まあ座りなさい」と大きな声で言いながら、朗さんにソファに座るように促して、自分もソファに座りました。

「千代さんが亡くなったそうだね」

「はい、祖母は一週間前に亡くなりました。台所で倒れていたところを、回覧板を届けて来た近所の人が見つけてくれて、急いで救急車を呼んで下さったそうですが、もう亡くなっていたそうです」

「いくつだった」

「七十四歳です」

「そうか」といって勝さんは煙草に火を点けました。朗さんからは、煙草を口元に運ぶ勝さんの左腕にはめた金のロレックスが良く見えたと思います。

「吸うか」

「いいえ、煙草は吸いません」

「そうか。東大生は煙草を吸わないのか」

「そんなことはないです。吸う人は吸います」

「金がないか」そう言った勝さんの目は笑っていました。「千代さんは金に困っていただろうからな」

朗さんは答えませんでした。

「今日来てもらったのは、森川の不動産のことをはっきりさせておきたいからなんだが、千代さんから何か聞いていたか」

「いいえ、何も聞いていません」

「そうだろうな。そもそも私のことは千代さんから何か聞いていたのか」

「いいえ」

「そうか。まあ、あの人は私のことが嫌いだったからな」そういって勝さんは灰皿に煙草を押しつけて火を消しました。

「調べてもらえば分かるが、森川の開玄堂の土地と建物は、文蔵さんから自分が相続して、自分が所有者になっている。千代さんと離縁した時に、君が高校を卒業するまでは家賃を取らずに貸すということになったんで、長いこと家賃を取らずに貸してきた。君の養育費のようなものだな。二年前に、君も高校を卒業しただろうから、家賃をどうするか千代さんに手紙を出したんだが、返事がなかった。千代さんのことだから、金があったら払いたかったんだろうが、払う金がなかったんだろう。そう思って、放っておい

た。しかしだ、千代さんは亡くなって、君も東京で暮らしているんだから、あの家をそのまま家賃も取らずに貸している理由はないだろう。そこでだ。年末までにあの家を明け渡してもらいたい。まだ四か月はあるから、荷物を処分して明け渡すことはできるだろう」

朗さんは黙っていました。

「まあ、今すぐ返事はできないだろうが、家賃なしでずっと使ってこられたんだから、もう十分だろう。一か月くらいしたらまた連絡するから、それまでに明け渡す日を決めておいてくれ」

朗さんは強張った顔でずっと黙っていました。

「あるいは相場で購入取ってもらってもいいんだが、そんな余裕はないだろう。東大を出たところで、官僚になっても、サラリーマンになっても、大した給料は貰えないからな。千代さんが亡くなって、多少は遺産もあるんだろうが、卒業はできるのか。金が足りないなら貸してやるぞ」

「いいえ。結構です」朗さんの声は少し震えていました。「卒業までの学費や、生活費は、大丈夫ですから」

「そうか。まあ、自分のことは自分でするっていうのは良い心がけだ。これからもその調子で頑張ってくれ」そう言っただけで朗さんはソファから立ち上がりました。「暑い日に呼び出して悪かったな」

そう言っただけで朗さんがドアに近づいたとき、立ち上がった朗さんが勝さんに話しかけました。

「和田さんは」朗さんは一瞬躊躇った後で、先程よりも少し大きな声を出して続けました。「和田さんは、どうして大塚の家を出たんですか」

勝さんは朗さんを数秒見つめてから、「もう二十年近く前のことだからな」と答えました。「君のお母さんが亡くなった。私は千代さんと上手くいかなかった。千代さんが君を引き取った。そういうことだ」

勝さんはそれ以上は何も話さず、黙ってドアを開けました。

朗さんが勝さんの部屋を出て、がらんとした階段を下り、古いタイル張りの廊下を抜けて表通りに出ると、真夏の日差しが容赦なく降り注ぎました。朗さんはその場でふと立ち止まり、和田書店の入口を見ていましたが、思い直したようにビルの廊下に戻り、ネクタイを外しました。それから、きれいに丸めたネクタイを手に持って和田書店の店内に入ると、特集コーナーに平積みになっている本の上にその空色のネクタイを置き、足早に店を出ると、そのまま大浜駅の方に向かって歩いて行きました。

「おかあさん、今朝ね、和田さんの息子さんっていう人が来たんだよ」

「和田さんって」とおかあさんが訊く。おかあさんはランチのお客さんのお皿を洗い終えたところで、厨房の奥のタオルで手を拭いていた。歳月を経た肌のところどころに染みの浮き出た細い手が、曇りガラスから射し込む光に照らされて美しく見える。

「ほら、この間亡くなった和田書店の会長さんの息子さん。大塚朗さんっていうんだけど、昔の開玄堂で育ったんだって。中学生の頃にこのお店ができて、高校生の頃に何度かここに来たことがあるって言ってたけど、おかあさん知ってる、大塚朗さんって」

ちよつと待ってくれれば私がするのに、おかあさんは食洗器からカップを出して棚に仕舞い始めた。

「そうね」といつておかあさんは手を止めた。「開玄堂に男の子がいたことは憶えているけど、顔は思い出せないわね」

「一〇時過ぎに来たけど、午後から開玄堂に行くんだって。今頃開玄堂にいるんじゃないかな」私は、カウンターの片付けが終わったので、布巾を洗ってから椅子に腰かけてちよつとゆっくりした。お客さんはいなかった。

「おかあさんも、ちよつとゆっくりしたら」というと、おかあさんも厨房から出てきて、テーブルを挟んで向かいの席に腰かける。

「その大塚さんが、和田さんの葬儀に来てましたかって話しかけてきて。行きましたよって言ったら、和田さんはこのお店に来ていたのか、とか、自分は小さい頃から和田さんには殆ど会う機会がなかったから、和田さんのことを知りたくて、って言うから、どうしようかなって思ったんだけど、私が楓で働いていたこととか、渡辺先生の事務所で働いていることとか、けっこう話しちゃって」

「そう」

「真面目そうな人で、和田さんとは全然タイプが違う感じ。東京で奥さんと娘さんと暮らしているんだって。名刺ももらって。ほら。中島電機の法務部長さんって、エリートだよね」といつて、エプロンのポケットからもらった名刺を取り出してテーブルに置いた。横書きの名刺で、中島電機のマークが印刷されている。名刺から目を上げたところで、入口の引戸を開ける音がして、宅配便の岡田さんが「こんにちは」と声をかけながら入って来た。

今日も暑いですねと言う岡田さんの向こう側の桜並木には、梅雨が明けたような強い日が射していて、沢山の蝉が鳴いていた。自転車に乗った中学生の女の子たちが三人で話しながら静川の向こう側を通り過ぎていく。

陽子が岡田さんと話している間、陽子がテーブルに置いていった名刺を眺めている。大塚朗さん。森川からは何年かに一人しか合格しない東京大学に合格した秀才だったはず。和田さんのことは知らないけれど、お母さんはこの辺りでは評判の美人で頭の良い人だった。確か、ふみさんという名前だった。亡くなったときは、私は家を出て大浜に

いたから、当時のことはあとから噂で聞いただけ。いろいろあったんだろうと思うけれど、息子さんが立派に育って、ご家族も持たれて、良かったと思う。

「青木さん」、陽子と話していた岡田さんがこちらに向かって声を掛ける。「暑いですから、無理しないでくださいね。家の中でも熱中症になることがあるから、こまめに水分補給をしてくださいって、テレビで言っていましたよ」と言ってから岡田さんは笑顔で挨拶をすると、ドアを開けて出て行った。陽子は、段ボールを開けて、コーヒーフィルターやCDを取り出している。長い付き合いだった商店街の雑貨屋が店を閉めてしまつて、ここ何年かは陽子がインターネットでいろいろな品物を注文してくれる。優しい子だから、いいご縁があつたら、と思う。

「このCD、おかあさん、きつと好きだと思うから、聴いてみてね。お店でもかけられるようなCDだから」陽子はCDのフィルムを剥がすのに手間取っている。折角だから掛けてもらおうかと思つてそう言うと、古い録音のシューマンのピアノ曲だと言つて、CDをプレーヤーに入れてくれた。

ブックシェルフのスピーカーから控えめな大きさの音でピアノ曲が流れてくる。外では蝉が鳴いている。ミンミン蝉と油蝉、他の種類の蝉もいるのかもしれない。良く晴れた空に、ゆっくりと飛行機雲が描かれていく。

「ね、大塚さんつて開玄堂を相続するのかな。あのお店つて、山本さんがやっているけど、持ち主は和田さんでしょ」

「さあ、どうかしらね」おかあさんはこういう話しにはあんまり乗ってこない。

「開玄堂ができたときに、鎌田さんがいつてたじゃない。『和田さんは本当にひどい。入り婿なのに身包みはがすみたいに大塚家の財産を全部持つて行って、年寄りに子供を押しつけた上で散々苦勞させて、今度はその土地に愛人のための店まで作つて、絶対に罰が当たる』つて。京子さんがいなくなつちやつた後も、『それ見たことか、あの店は絶対に潰れるから』とかさんざん悪口言つて。でも、今はケロつとして開玄堂にも行つていないじゃない、鎌田さん。『オーナーは悪人だけど、山本さんはいい人だ』とか、ほんと調子いいんだからね」

陽子は口真似が上手で、気持ちちが和む。

「それで思つたんだけど、和田さんが大塚さんにとっては仇のような人だとしても、大塚さんは、和田さんから財産を相続したりするのかなつて。いろいろ複雑なんだろうなつて」

おかあさんは、ピアノを聴いているようで、私の話を聞いているのか聞いていないのか。でも、おかあさんは、いつものように、落ち着くところに落ち着くのよ、と思つているような気がする。本人の気持ちや、周りの迷惑や、状況やタイミングやいろいろなことが重なつて、結局、流れるところに流されていく。

CDが次の曲に移つてテンポがゆっくりになる。聴き馴染んだ曲だけれども、この古い録音の演奏には温かい手触りがあつて、素敵だと思う。

「でも、和田さんの奥さんたちよりも、大塚さんがオーナーになつてくれた方がいいな

って、今朝大塚さんと話したあとで思ったの。奥さんたちは大浜の人だし、たくさん財産もあるんだろうから、開玄堂は大塚さんがもらってもいいんじゃないって」

「そうね。でも大塚さんも、もう東京の人でしょう。オーナーになっても、山本さんも歳だし、いつまでお店を続けられるか分からないからね」この店もいつまで続けられるのか。陽子が後を継ぐと言うかもしれないけれど、大浜で働き続けて、良い人と一緒になってくれた方が幸せかもしれないと思う。この店がなくなるのは寂しいけれど、陽子には幸せになってもらいたい。

「山本さん、お元気そうだし、お店も順調みたいだし、続けてくれるんじゃないかな。山本さんは、奥さんたちとは付き合いたくないだろうから、大塚さんの方がいいって思いうそう。大塚さん、ちよつと知的な雰囲気で、山本さんと相性良さそうだったよ」

さて、と言っておかあさんが立ち上がり、奥の倉庫に向かう。昨日言っていたように、今日はコーヒー豆のハンドピックをするらしい。私も、厨房から二人分のトレイを持ってきて、おかあさんからコーヒー豆をもらって、隣のテーブルでハンドピックを始める。コーヒー豆を選び分けながら、音楽を聴いて、話しを続ける。

「おかあさん、明日お休みだから、森川城公園に行って太郎に会って来ない。象の太郎。大塚さんが、午後まで時間を潰すのにどうしようかって言うから、太郎に会いに行ったらって言ったの。もう歳だろうしって言ったたら、大塚さんよりも二十歳近く年上なんだって。私もずっと会ってないし、おかあさんもでしょう。ちよつと行って見ない」

「そうね。私は今年も桜の時期に一度会いに行っただけど、陽子と行くのは久しぶりね。行ってみましょうか。明日も朝から暑そうだけど」

太郎は強い日差しを浴びて、半分は今のこの時間を微睡みつつ、半分は近くて遠い昔の時間を反芻しながら、大きな体をゆっくりと揺すっている。連休の中日で、家族連れが何組か象舎を取り巻くお堀の向こうからこちらを見ている。気まぐれな好奇心を起こした長い鼻が、小さな子供の匂い、何人かの汗、午後の海の香り、漂う夏の光の粒子を軽く撫でる。

遠くで犬が鳴き、自転車がベルを鳴らしている。

いつかあったような、けれども真新しい夏。

幾つもの響き合う色を乗せて、心地よい風が吹いてきた。

オレンジ色のカーテン越しに射し込む朝日がベッドの上で背中を向けて寝転んでいる女の肩のあたりの産毛を柔らかく照らしていて、その産毛が光っているあたりの奥にある鉱脈を探るように彷徨っていた五本の指が柔らかい肉を押し潰すようにじわりと力を込めると、それに応じてこちら側にゆっくりと体を転がして仰向けになった女が喉を鳴らして「もう」と呟き、さらに半回転して右の乳房を勝の胸に押し付けると勝の頬と頤の境目のあたりに口づけをしてからベッドの上に左手をついて体を起こし、まだ眠りから覚め切っていないような声で「おはよう。もう行かないと。かつちゃんも仕事でしょ」と話し掛ける。その声を聞いた勝が背中に手をまわして引き寄せた女の湿った乳房の重さを感じながら右の手を肩甲骨から腰の方へなだらかに滑らせていくと、女は再び「もう」と言って起き上がり、思いがけず俊敏な動きで膝を立てて勝の身体に跨っている。

「もう、お預け。そんなに抱きたいなら、お家に帰って奥さん抱きなさい」

「牛だな」

「なに」

「朝からもう、もう、もうって、牛女だな」

「もう」と言って女は勝さんの胸を軽く小突きました。

「今夜は来ないから、森川に帰りなさいね。日曜日からもう三日も家に帰っていないでしょ。今日は帰らないと。お家に帰って、オリンピックの話しでもして、たまにはしっかり奥さんと汗かきなさいよ」

「あいつは心も体も冷めきってるよ。俺のことを軽蔑しているから。毛ほどの教養もない汚らわしい男だって思ってるよ」

「すぐに拗ねるんだから。そんなわけないでしょ」女は天井を眺めている勝さんの腹筋の筋を軽く指でなぞっていました。「結婚してまだ一年ちよつとの新婚さんじゃないの。これから末永くかつちゃん和暮らしていきたいって思っているんだから、帰って優しくしてあげなさい」

「入婿なんだから、ちゃんとしてないと放り出されちゃうよ、ってか。お前は心配なかもしれないけど、俺はそんなに阿呆じゃない。貰えるものは粗方貰ったから、もういつ別れたって大丈夫。向こうは財産を持って行かれて、今更別れたくはないだろうけどね」

「かつちゃん、そういうこと言っていると不幸になるよ」女は勝さんの胸に手をついて、目を覗き込みました。「いい男なのに」

「お前はいい女だ」勝さんは女の腕を掴んで抱き寄せてから言いました。「お前は温かいし、苦労しているし、金の価値が分かっている。あいつらは、金を持っているのに、金の力を知らない。いつか貧乏を味わわせて、あの高慢な女たちが人に頭を下げてるところ見てみたいと思うよ」勝さんは体を返して女の上になると、女の目を見ながら親し気な笑顔を作りました。

「まだいいだろ。抱かせるよ」

勝さんの部屋は、大浜銀行の本店がある街の中心から歩いて十分ほどのところにある三階建ての小さなビルの二階にありました。もともとは一階で個人病院を営んでいる医者が住むために作った部屋で、小ぶりな台所と風呂場やトイレもあり、夫婦が十分に暮らせる広さでしたが、医者が結婚して子供も生まれ、大浜の住宅地に家を建ててからは、三階の二部屋と同様に貸家に出されていました。勝さんがふみさんと結婚したときに、森川の家で文蔵さんや千代さんと一緒に暮らすことになったものの、大浜の銀行まで毎日通勤するのは負担だからということとで借りた家でした。家を借りる時には、ふみさんも勝さんと連れ立って何度かこの部屋を訪れましたが、勝さんの生活道具を揃えてからは、ふみさんは文蔵さんの看病に忙しく、文蔵さんが亡くなった後も毎日開玄堂に通っていましたから、結局この部屋を訪れたのは三回きり、三回目はこの部屋で女物のストッキングを目にしてからは、もうこの部屋に来ることはありませんでした。

その日の夜、千代さんは七時過ぎまで勝さんからの電話を待っていました。帰宅するとの連絡はなく、いつものように広々とした家の中でふみさんと二人きりでの夕食でした。ご飯と味噌汁、金目鯛の煮付け、南瓜と人参と椎茸の煮浸し、卵焼き、蕪の漬物。蛍光ランプに照らされた質素なちゃぶ台の上に並べられた二人分の食事を挟んで、静かな夕食でした。

茶の間の奥にある広間の真ん中に、買ったばかりのカラーテレビが置かれていました。この日はお昼ごはんの後で、ご近所の大人や子供たちが十人以上も集まって東京オリンピックの馬拉ソン中継を賑やかに楽しんだのですが、そんなことは全くの記憶違いだったかのように、広間もテレビも静まり返って無表情でした。

「小林さんは東京に行ったことがあったんだね」千代さんが袂を軽く押さえて金目鯛の煮付けを箸で上手に捌きながらふみさんに話しかけました。「いつ頃行ったんだらうね」
「お嬢様の結婚式に出席するために行かれたって言うことは、五年くらい前でしょうか」
ふみさんはお茶碗とお箸を持つ手を止めて答えました。

「何日かいただけだろうに、東京のことは何でも知っているような話しぶりだったじゃない。ああいう話し方をされるとねえ」という千代さんに、ふみさんは答えず、卵焼きを食べながら目を細めて笑っていました。

「勝さんは東京に行ったことがあるのかどうか、聞いたことがあるかい。開会式の時は、東京の話はしていなかったね」

「さあ。行ったことがないかもしれないですね」
「ふみは」と言って千代さんは目を上げました。「旦那さんとは上手くいってるの。新婚なのに、もうずっと週末にしか帰って来ないなんて。そんなに仕事が忙しいのかねえ」
千代さんはお茶碗を手にしたまま大げさなため息をつきました。

「とっても忙しい仕事を任されているって言うてらしたから」ふみさんはお茶碗を置いてお椀を手にしました。

「そんなに忙しい仕事なんかしなくても、十分食べていけるのに。お家賃だけでもお給料の何倍にもなるでしょうからね。そう、勝さんに、カラーテレビの代金を払うように頼んでおいてもらえる」

「お母さん、お支払いは未だだったの」

「ほら、お家賃はみんな勝さんが管理しているから、家にあんまりお金がないの。開玄堂にも、そんなにお金はないでしょう。勝さんに頼んでおいてもらえる」

「分かりました」ふみさんはお椀の中の味噌汁を覗き込みながら答えました。

「それから、もうちよつと森川にも帰ってくるようにって。私も早く孫の顔が見たいわ。お父様にもご報告したいし。あなたも、赤ちゃんが欲しいでしょう」

曖昧に頷くだけのふみさんを見て、千代さんは言葉を続けました。「仲人の後藤さんに相談してみましようか。あの人、大浜銀行の取締役で、勝さんの上司なんでしょう。あの方が勝さんを薦めてくださったのに、家にも帰らせないなんて、困りますって。あなたが相談できないなら、私が相談しに行きましようか」

本当に相談に行きそうな千代さんの見幕を見て、ふみさんは、勝さんと話してみるし、オリンピックが終わって十一月になれば、勝さんも時間に余裕ができて森川に帰って来られるようになると思うから、と宥めていました。

食事を終えて仏壇のご飯を下げるとき、ふみさんは座ったままで仏壇の隣の棚に飾られた文蔵さんの写真を長いこと見詰めていました。文蔵さんが亡くなる前にと急いだ結婚でしたし、それが親孝行と言われてふみさんも決心をした結婚でしたが、頻りに結婚を勧める千代さんとは対照的に、文蔵さんはふみさんの結婚について、殆ど何も言いませんでした。文蔵さんは自分の結婚を急がせたくないと思っっているのではないか、そうふみさんは感じていましたが、何も言わない文蔵さんの本当の気持ちは分かりません。いろいろな人を巻き込んで結婚の話しがどんどん進んでいく中で、病が進み痩せ衰えた文蔵さんに、「お父さんはどう思うの」と問いかけて相談することは、ふみさんにはできませんでした。

文蔵さんの写真を見詰めながら、今日のオリンピックのことを心の中で話し掛けていくと、「あのととき、結婚を止めてくれたら良かったのに」と甘えてみたくなる気持ちは沸いてきたりするので、写真の中の文蔵さんはいつも変わらずにどこか遠くを見詰めているばかりで、ふみさんの気持ちに応えてはくれませんでした。

休みの日なのにまた店に来てしまった。世の中が三連休だからとはいえ四日も続けて店を閉めるのは初めてのことなのに、結局四日のうち三日は店に来ている。一日目は溜まっていた古本関係の仕事と掃除をして、二日目はここで大塚さんと会った。昨日は来なかったが、今日も、こうして夜になってから店に来ている。店に居る時間が長いのは、居心地が良いからか。「居心地が良い場所に止まっていると、人間がだんだん小さくなる」と書いてあったのは何の本だったか。店にばかり居ないで外に出ないと、そう思っただけでも、つい店に来てしまう。

店に来なかった昨日は、朝四時前には車で家を出て、窪田の棚田に朝焼けの写真を撮りに行った。前の晩、なかなか眠ることができず、深夜にパソコンで天気図と雲の衛星画像を確認すると、東の海上に雲がなく、西から湿った雨雲がやって来る様子だったので、運が良ければきれいな日の出の写真が撮れるだろうと思いい立ち、殆ど睡眠を取らずに出かけることにした。窪田の棚田は、山に挟まれた東向きの長い緩斜面に作られた棚田で、棚田が終わって急斜面になる手前に大きなクスノキが立っている。その向こう側には、遠くの平地と海、幾つかの島、そしてどこまでも遮るもののない空が広がっている。季節や時刻を問わずに美しい景色が楽しめるのだが、日の出前のブルーモーメントや、明け方の逆光の中に浮かび上がるクスノキのシルエットがとりわけ素晴らしい。朝四時半には現地に着いて、ヘッドライトの明かりを頼りに三脚とデジタルカメラを据え付け、やがて日の出前の濃紺の空が徐々に明るくなり、水平線の近くが力強い橙色に変わっていく様子を無心に眺めながら、スローシャッターでいくつかの時間を切り取る。静かで、昨日の火照りを一晩かけてゆっくりと冷ました夏の朝の涼しい匂いにして、全身が浄化される心地がした。窪田の棚田には年に何回かは写真を撮りに来る。そういう意味ではここも馴染みがある「居心地が良い場所」で、遠出をしたつもりが、結局、自分にとって居心地が良い場所に止まっているだけのことなのかもしれない。

昨日撮った写真は、昨日の夜のうちに現像とプリントを仕上げ、店に持って来た。先月から飾ってあったアンコールの写真と並べ替えて、二枚を昨日の写真と差し替える。タ・プローム遺跡の壊れた石像の写真の左隣りに、昨日の帰り道に撮影した路傍のお地藏さんの写真を飾り、その左隣りに早朝の窪田の棚田の写真を飾る。離れて見ると、左端の窪田の棚田の写真と、右端の夕暮れ時のシエムリアップ郊外の水田の写真とが対になっているように見えて、窪田とシエムリアップの連なりに思いを馳せてみたくなる。

シエムリアップの街を出て、未舗装の赤土の道をバイクタクシーで飛ばしていく。道の両側には水田が広がっていて、その奥にはオレンジ色の花が遠くの森の方までずっと続いているのが見える。自分は何故か高校生で、夏の制服を着てズック鞆を肩から斜めに掛けている。まだ若いカンボジア人のドライバーの肩越しに前を見ると、同じような夏服を来た高校生がバイクタクシーに乗って走っている。朗だと分かって話し掛けようと思ったけれど、遠くて声が届きそうもない。しっかりとバイクのシートを手で掴んでから、運転手の耳元に向けて「追い越せ」と叫ぶ。バイクが勢いよく加速して身体が後

ろに持って行かれる。風を感じる。右手に赤く大きな夕日が沈もうとしている。

「このお店は、居心地がいい上に、本棚を見るとわくわくしますね」と大塚さんは言っていた。「棚を作られた山本さんと話してみたくありません」と。

約束した午後三時の少し前に店に来た大塚さんは、私がコーヒーを淹れている間に本棚の間を歩いて周り、写真を一通り眺めてからテーブルに戻ってきた。

「大浜高校に通っていたころ、本は大抵図書館で借りて読んでいたんですが、叔母から小遣いをもらうと、南風書店で欲しかった本を購入していました。あの頃に買って今も自宅の本棚にある本が何冊かこちらの本棚にもあって、懐かしいですし、嬉しいですね。柴山雄さんの「サダルモニア」とか、新聞の書評を読んで南風書店に来たら、南風通信の号外で絶賛していて、迷わずに買って夢中で読んだ記憶があります」

良く憶えている。当時はまだそこまでは売れていなかった柴山さんの三作目「サダルモニア」は、前作に増して素晴らしかった。店に来た最初の本を読んで、南風通信の号外を出した。高校生だった朗くんがこの本を買って行ったことも、翌年、四作目の「静かな夜が明けると」を買って行くのを見かけて嬉しかったことも、ついこの間のことのように鮮明に憶えている。朗くんの読書のセンスの良さがふみさんと重なって、何度も話し掛けようかと思っただけけれど、結局、話し掛けられなかった。

コーヒーを飲みながら簡単に開玄堂の紹介をした後で、大塚さんの近況に水を向けて話を聞いた。中島電機の法務部長として忙しく働いていること、海外関係の仕事が多いこと、入社して数年後に留学もしたこと、奥さんと娘さんが一人いること、奥さんは自宅で翻訳の仕事をしていて、娘さんはこの春に大学を卒業し、食品会社に就職したこと、三年前に同じ団地で暮らしていた義母を亡くして、身内は三人だけになったこと。仕事の話をする大塚さんは、口数が少なめで、仕事を楽しんでいる様子はあまり窺えない。名の通った上場企業の法務部長なのだから、話せないことも多いだろうし、ストレスも大きいのだろう。家族の話をする大塚さんは、和やかで、幸せそうに見えた。子供の頃は母親を亡くして家庭に恵まれなかった大塚さんが、大人になって家族と幸せに暮らしていることが本当に嬉しい。

大塚さんから聞いた相続についての話しは、伊藤さんから前の日に聞いた話しとあまり変わらなかった。さくら書店に和田書店を引き継いでもらうか、自分がオーナーになるか、どちらがより望ましいかを真剣に考えているようだった。伊藤さんは、大塚さんと一緒にやっていきたいと言っているし、私も、そうなることを願ったこともあった。大塚さんと会って見て、思っていた以上に和田書店と相性が良さそうでほっとしてもいい。けれども、それと同時に、ここ数週間ずっと心にあった不安が膨らんでくることも感じる。これからますます書店を巡る環境が厳しくなる中で、東京から遠く離れた地方の書店のオーナーという煩わしい立場を引き受けるよりも、さくら書店に株式を売却して現金に手にした方が、結局のところ大塚さんや大塚さんの家族にとって幸せなのではないか、そういった気持ちだろう。とはいえ、大塚さんが和田書店を手放すときは、この開玄堂もさくら書店に売却されてしまうだろう。それで果たして良いのか。和田会長

が亡くなってからずっと考えてきた。

明かりを落とした店内で時計の針が十一時半を回ったことを確認してから、コップに水を汲み、四人掛けのテーブルに持ってくる。一昨日、大塚さんが来る前に花屋に行つて買ってきた紅花がテーブルの上の花瓶に挿してある。大塚さんは憶えていないはずだが、五十年前の開玄堂は、梅雨が明ける頃、紅花を花瓶に挿して飾っていた。ふみさんが好んだ花だった。

そういえば、大塚さんと昔の開玄堂については殆ど話しをしなかった。あのお祖母さんと暮らした家だから、あまり良い思い出はないのだろう。文蔵さんやふみさんがいた昔の開玄堂に毎日のように通っていたのは、私が中学生から高校生の頃で、大塚さんが生まれる前のことだから、大塚さんは私と昔の開玄堂の縁を知らない。大塚さんにとつて、私は初対面の和田書店の元店長で、今の開玄堂の店主だ。

来月十八日に大塚さんがまた森川に来る。伊藤さんと渡辺先生も一緒に大浜の「善」で食事をした後で、この店の二階に泊まってもらうことにした。次の満月の夜に、大塚さんがここに来る。それが果たして善いことなのか、いろいろと考えて悩んだし、今も悩んでいる。この場所で思いがけない出会いに恵まれたり、懐かしい思い出に浸ることができるかもしれないし、時間をかけて忘れられたことや、忘れてしまいたいことに襲われるかもしれない。あるいは、全く何も起こらないこともあり得るだろう。大塚さんにとつての善し悪しを考える以前に、そもそも私もこの場所に居るべきなのかについてすら、未だに判断がついていない。この場所を感じることもどこまで確かなものなのかも分からないし、生々しい記憶を共有することが常に善いことだとは思えない。忘れ去られることでしか許されないこと、静かに忘れられていった方が善いこともあるだろう。でも、今夜もまた、抗い難い気持ちに駆られてこの場所に来てしまう。

正しい答えなのか確信は持てないけれど、やはり、大塚さんにもこの場所を経験してもらうべきなのだろうと思う。この場所に来てあの時間を経験してもらった上で、大塚さんが自分自身で進む道を選択する、それが最善なのだろう。大塚さんがここで何を感じてどう考えるのか、私には分からない。和田会長がここで何を感じてどう考えたのか、私には分からない。ただ、和田会長は、私とは全く違うことを感じていたようだった。

当て所なく思いを巡らせていると、テーブルの上に置いたグラスが細かく震え始めた。水面に細かい小波が立ち、微かな羽音のような空気を揺らす音が聞こえてきた。

「値段はそんなに高くないけど、ちゃんとしたワインを買っておいたんだから」と言いながら、風子さんは会議室のテーブルにワインを置きました。廊下に置いてあったワインは冷えていて、ボトルの表面がしっとりしていました。

「ルロイって有名なの」

「ルロワ。ブルゴーニュの有名な作り手だけど、これはローヌのワイン」

風子さんが東京のデパートでこのワインを買った時、一九七八年のローヌは二十一年に一度の当たり年ですから是非味わってみてください、と言われたそうです。

「みんな帰っちゃったけれど、一本だけだから、二人で丁度いいかもね。乾杯しようか」
風子さんはソムリエナイフを手に取ると、慣れた手つきでコルクを抜いて、家から持ってきてあったリーデルのグラスにワインを注ぎました。一九九三年も残り数時間となっていました。この年の十一月に大浜の駅ビルに本店を移転した和田書店は、大晦日も十九時まで営業して、やっと年を越す作業を終えたところでした。遅い時間だったこともあり、最後まで作業をしていた人達も家族との時間を過ごすために帰宅してしまい、店に残っていたのは宙さんと風子さんの二人でした。

「宙さんもお疲れ様でした。移転してから一日も休んでないんじゃない」

「家に居ても退屈するから、つい来ちゃうんだよね。でも、体力的にだんだんキツくなってきたな。中村も忙しかったんじゃない」

「私は、ほら、女性だから。引越し作業は遅しい男性達に任せて、仕事はいつもどおり」そう言いながらも、風子さんもこの二か月は休日返上で働いていました。「でも、移転して良かったんじゃない。お客さんの評判もいいし、売上も好調だし」

「今のところはね。でも、しばらく様子を見てみないと」

「バイトくんやパートさんにも好評みたいよ。駅ビルはいろいろ便利だし、地下のスーパーで帰りに買い物もできるって。宙さん、感謝されてるよ」

「自分が感謝されるより、中村だろう。移転を成功させた最大の功労者は、やっぱり中村だと思うよ。社長を説得した中村が一番偉い。感謝しているよ」

駅周辺の再開発計画が始まった頃から、大浜の街の中心が駅前に移っていくと見抜いて、繁華街の老朽化した本店に居続けるよりも、駅前に本店を移転すべきだと熱心に主張したのは宙さんでした。その後の大浜の移り変わりを見ると宙さんの主張は結果として正しかったのですが、勝さんは、文蔵さんから相続した本店の土地と建物がバブル景気でさらに値上がりすることを期待して、移転は早過ぎると全く相手にしませんでした。

「私はどうやって社長を説得したか、聞かないの」風子さんが微笑みながら言いました。

「いや、本当に感謝しているよ」宙さんは窓の方に目をやりながら感謝の言葉を繰り返しました。窓の外には静かな街と、所々電灯に照らされながら西に向かって伸びる線路が見えました。

「買手を探してきてくれたしね」宙さんは窓から目を離して風子さんと向き合ってから言いました。「あれだけの値段を出してくれたんだから、社長も喜んで納得したんじゃない」

「そうね、タイミングが本当に良かったのよね。バブルが弾ける直前だったから。今からあの値段で売りたいと思っても、絶対に売れないから」

風子さんは、宙さんが駅前への本店移転を提案するようになってから、宙さんにも勝さんにも内緒で、本店の土地と建物を売却する先を探し始めました。有力なエージェントとコンタクトを取り、買手の候補を検討し、買い取りのオファーが来ているといった偽の情報を流したりもしました。そうして二年近くが経った頃、駅ビルの開発が本格化したタイミングで、風子さんは狙いをつけていた買手から好条件を引き出して勝さんの説得を試みたのでした。

「フリーレントも、中村のアイデアなんだよね。移転が遅れて相当得したんじゃない。あのビルを無料で使わせてもらっていたんでしょ。本当は半年だったのに、社長がねじ込んで一年分くらい無料にさせたって聞いたけど」

「社長もね、勝てると思うと手加減しないじゃない。契約書を盾にして、っていうよりも刀にして、斬り殺しちゃったから、買手さんからは恨まれているでしょうね。担当だった前田さんも会社を辞めちゃったみたいだし。こんなこと言うのも何だけど、買手が東京の会社で良かったって思う。大浜の会社にあんなことしたら、もっと辛いことになってたはずだから」

勝さんと買手の間で調整役になっていた風子さんが、なかなか首を縦に振らない勝さんの説得に困り果てて、フリーレントのアイデアで勝さんを説得しようとしたのは、勝さんが運転する車の中でした。真っ黒なポルシェのタイトな助手席に座った風子さんが説明を終えて、最初の赤信号で車が止まったとき、勝さんは、「じゃあ、十二億で売った後、来年八月までは今の賃料で借り続けて、その後は駅ビルに移転するまで無料で使えるんだな」と念を押しました。それから二時間後、自宅のベッドの上で煙草を吸っていた勝さんは、ベッドを出て下着を身に着けようとしていた風子さんに向かって「お前、山本のことが好きか」と突然話しかけました。風子さんが黙ってテーブルの上に置いてあった勝さんのセブンスターを一本取って火を点けたところで、勝さんが言いました。「俺と別れる。そしたら、あの店を売り払って、駅ビルに移転してやる」

そうして風子さんは勝さんと別れ、勝さんは芳子さんと再婚し、和田書店は駅ビルに移転しました。

「そういえばここ一週間くらい社長を見かけないけど、旅行にでも行ってるの」風子さんがワインを飲みながら訊きました。

「うん、ハワイに行ってる。十二月は一日と八日と十六日が出勤日で、二十日からハワイで、正月三日に帰って来て、四日は出勤して挨拶回りの予定。一応、知っておかないとね」

風子さんが黙って宙さんのグラスにワインを注ぎ、自分のグラスにも注ぎ足しました。

「このワイン、ほんとに美味しいね。かなりの値段じゃないの」

「美味しいでしょ。十五歳だけど、年齢以上に上品で繊細な感じがしない」

「十五歳か。一九七八年って、おやじさんが亡くなった年だ」

「そう。離婚した私が大浜に戻って来て、お父さんを看取って、南風書店に拾ってもらった年」風子さんはテーブルの上でグラスを回してから、手を止めて言いました。「それよりも、お互い、二十代最後の数か月を過ごして、三十歳になった年って言った方がいいかな。何だか大昔のような気がしてくるけれど」

「そうだね。いろいろあったしね」宙さんはワインを一口飲んでからグラスをテーブルに置いて話しを続けました。「おやじさんが生きていたら、今の店についてどう思うかな」
「頑張ってるな、って思うんじゃないかな。移転してお店もきれいになったし、お客さんもたくさん来てくれてるし、昔の雰囲気もやっぱり残っているし、いい店だって気に入ってくれると思うよ」

そう言いながら、風子さんは、お父さんが生きていたら悲しむだろうな、と思っていました。息子になってももらいたかったのに未だに独身の宙さんと、南風書店を乗っ取った男と何年も付き合った後で捨てられた私が、大晦日の夜にお店の会議室で二人でワインを飲んでいるなんて、そんな未来は想像していなかっただろうな、と。

「移転の時も、移転してからも、おやじさんだったらどうするかなって、何度も考えたよ。バイトの頃から十年間、みっちり仕込まれたからね。おやじさんが喜んでくれたら嬉しいね」

「ねえ」風子さんが言いました。「ここもちょっと寒くなってきたし、どこかで飲み直さない。ワインの持ち込みができるお店もあるし」

「大晦日だし、開いてるかな」

「そうね」風子さんはワインボトルを見て残りを確認しました。まだ半分以上残っていました。

「いや、今日は帰るよ。終電までそんなに時間もないし」

「そう。お母さん、待っているんじゃない」

「いや、遅くなるって言うってあるから、いいんだけど」

「帰りましょう。もう十時過ぎじゃない。ね、このワイン持って帰らない。飲み残しで悪いけど、お母さんも楽しんでくれるかもしれないし」

宙さんが森川の家に着いたとき、お母さんはもう二階の部屋で寝ているようでした。宙さんが食卓の脇にあるテレビをつけて、ワインを飲みながら新しい年を迎えようとしていた頃、風子さんは立ち寄った行き付けのバーを出て、戸外の冷たい空気をゆっくりと吸い込んでいました。ツイードのコートの襟を固く重ね合わせて、夜空を見上げて、ブーツの踵で地面を二、三度踏んでから、家に向かって夜道を足早に歩いていきました。

ランチが長引いて部屋に戻るのが遅くなった。もう二時まで十五分しかない。おそらく二時前に大塚さんは来るだろう。急いで準備をしておかないと。デスクに腰を下ろして、和田書店のファイルを開く。和田書店に行っている加藤からのメールが一番上に綴じられていて、その上に確認事項と方針を簡単に整理したメモが乗っている。このメモを確認してから大塚さんに会えば良いと思っていたのだが、少し頼りない気持ちが拭えない。改めてファイルを捲ってみても、やはり情報が少ない。特に大塚さんについては殆ど情報がないし、相続の状況も正確には分からない。林がいてくれたら違っていただろうにと言いたくなり、つい煙草に手が伸びる。

そもそも和田書店への出資は、林が持ってきた話だった。「大浜の和田書店に山本という店長がいるんです。まだ四十代ですけど、面白い男で力があります。山本以外にも、ビジネス書からサブカルまでいろんな分野をカバーする強者の書店員がいます。和田社長は、店の経営には殆ど関与していませんが、六十歳を過ぎていて、子供を後継者にできる状況ではないので、近いうちに事業承継が必ず課題になります。さくら書店が大浜に自前で店を出す優先順位は低いので、和田書店への出資は良い布石になると思います」そんな話しをこの部屋で私に直接持ってきた。

あの時は、光陽銀行に相談してみたものの、和田社長が強烈な人物で出資や提携は難しいということだった。しかし、数年してから、和田社長の愛人が会社の金を使った投資で大きな損害を出したということで、出資の機会が巡ってきた。株で一四パーセント、それから転換社債。大きな金額ではないが、転換社債は去年で全て返済が終わって、経済的には十分に元を取っている。ただ、林を持って行かれてしまった。林が和田書店に移って行ったとき、この部屋で話したことも良く憶えている。

「社長、ダンバー数って知ってますか。バンパーじゃないですよ、ダンバーです。サルとかゴリラとかチンパンジーとか、霊長類が作る群れの大きさは大脳の大きさに比例しているそうなんです。それを人間の脳の大きさに当てはめると、一五〇人くらいが快適な集団を作れる限界になるらしいんですよ。この一五〇人っていう数を発見した人がダンバーさんで、ダンバー数。一五〇人って、ちよつと説得力があると思いませんか。さくら書店も、一五〇人くらいまでの時代と、その後とで、大分変わりましたよね」

仕方のないことだが、林は、大きくなったさくら書店を切り盛りする仕事よりも、全員の顔が見える小さな書店で過ごしたかったのだろう。出資と同時に自分からは非にと志願して和田書店に出向し、転籍してからも最後まで楽しくやっているようだった。月次や四半期の経営報告とは別に、和田書店の様子を手紙や写真で伝えてくれた。林は文章が上手い。おかげで、会ったこともないのに、和田社長の強烈さも良く分かったし、山本さんを始め和田書店の人達や、当時の常連のお客さんについてまで、何だか今も身近に感じる。あれを読ませてもらって、林がやりたかったことが良く分かった。確かに、鍛えられた小さな組織にはできても、大きな組織にとっては難しいことがある。ただ、この時代、特に書店業である規模の会社を将来も維持していくことはますます難しい。

林が和田書店を退職してからもう五年以上になる。加藤に代わってから、手紙や写真は来なくなったが、数字や報告を見る限り経営は安定している。立派なことだと思う。山本さんも退職されたが、伊藤社長以下の面々が頑張っているのだろう。和田会長が亡くなっても、和田書店に大きな影響はないと思うが、このご時世だから先行きが明るいわけではない。大塚さんは、和田書店のオーナーになるつもりがあるのか。加藤からは、相続にトラブルは生じていないらしいと聞いているが、いろいろと確認しておかないと。手元のメモには、確認事項と方針が簡単に書かれている。

相続の状況の確認（遺言の内容、トラブルの有無）

大塚氏の意向の確認

- ① 相続放棄・・・買い取る（五千万円？）
- ② 相続した株式を譲渡・・・比率や価格により検討（子会社化）
- ③ 相続した株式を継続保有・・・現状維持
- ④ 株式の買い増しを希望・・・意向を確認（転売目的は協力困難）

①は、加藤の話しによれば、大塚さんが相続を放棄した場合、和田書店の株を保有する持株会社を五〇〇〇万円で買えることになるらしい。どうしてそういう遺言になっているのか、持株会社の素性も気になるが、和田書店の株をこの価格で買えるなら、買って構わないだろう。大塚さんが相続を放棄せず、和田書店の株式を一旦相続した上でさくら書店に売却したいというならば、条件次第だが、これも買って良いだろう。①と②は問題ない。

もともと林は、和田書店を子会社化することには反対だった。出資して一年くらい経った頃に、この部屋にふらりとやって来て言っていた。

「和田書店は、誤解を恐れずに極端な言葉で言えば、一種のカルトですから。特定の思想信条を信奉しているとかではなくて、店の理念というか理想が大事で、まあ全員が同じ理想を共有しているかというかと、必ずしもそうではないんですが、でも全員が理想に対して献身的なんです。うちの会社とは肌合いが違いますから、子会社化してうちの会社の方針を押しつけようとすると、反発する書店員は元気をなくしたり辞めたりするはずです。無理をするとギクシヤクして、結局、和田書店の良さが失われて壊れてしまいます。和田書店は、確かに駅ビルのいい場所にありますけれど、和田書店の強さと魅力は人ですから」

林が言っていたことにも理があるのだろう。しかし、大塚さんは書店業とは全く縁が無い人のようなだし、和田書店の株を手放したいというのであれば、さくら書店が株を買って経営することが、和田書店を続けていく上で最善の選択だろうし、大浜の地域や社会のためにもなる。

③は、大塚さんが和田書店のオーナーになるといっているのであれば、加藤も勧めるように、今までの関係を維持することが良いのだろう。伊藤社長も、大塚さんをオーナーとして迎えたい意向のようだし、大塚さんも、中島電機の法務部長という仕事があるのだから、伊藤社長に経営を任せることになるだろう。そうであれば、取り敢えずは現状維持で様

子を見て、そのうちに時機が来たら子会社化を検討するということでも良いだろう。今急いで事を進めるよりも、時間をかける判断が穏当だ。

④は、大塚さんがさくら書店から和田書店の株を買い取りたいと言ってきたら、理由を確認する必要がある。他社への転売目的ならば、協力は難しいというニュアンスを伝えて、うちに売却してもらおう方向に話しを向けよう。

いつの間にか灰皿に置いた煙草が燃え尽きている。もう一本火を点けようかを思っ
て時計を見ると、二時まであと五分しかない。立ち上がって窓から外を見ると、曇っ
た空がいつの間にか晴れてきていて、日差しが強い。外は蒸し暑そうだ。大塚さんは
駅から歩いて来るかもしれない。秘書に言っ
て応接にはアイステイーでも出してもらおう。

加藤のメールでは、四日前の時点では、大塚さんは和田書店の株を相続するかどう
かをまだ決めていないということだった。和田会長が亡くなって、いきなり相続の話が
持ち上がったらしいから、無理もない。今日の訪問も、具体的な話しをするというより
も、おそらく顔を合わせて挨拶をする程度だろう。大塚さんは、さくら書店の意向を確
認したいはずだが、まずは世間話でもして、お互いを知ることだ。相続について大塚
さんから説明を受け、私から、さくら書店と和田書店の今までの関係について話しをす
れば、小一時間はすぐに過ぎる。短い時間だが、会って話すことで大塚さんの人となり
についても多少は分かるだろう。いずれにしても、こういう機会を早めに持つのは良い
ことだ。和田会長とは、結局一度も会う機会がなかった。

和田会長が亡くなり、林も退職し、光陽銀行の田中さんも退職されて、和田書店への
出資に深く関わった人間はもう誰もいない。出資してから十五年近くになるのだから、
無理もない。社長から会長になったとはいえ、私だけが今でも相変わらず同じような立
場で残っているのだから、そういう意味では、この件について一番良く分かっているの
は私だと言えなくもない。そんな案件は最近では珍しいし、林の引継案件だと思うと気
合いも入る。面白くなってきた。

開けてある扉を秘書がノックして部屋に入って来た。大塚さんが応接に来たか。さて、
どんな男か、会うのが楽しみだ。

三回目の時には、勝さんも何かがおかしいと思いました。あの森川の土地には何か曰くがあるのだろうかと疑って、神主さんにお祓いをしてもらったり、大塚家の祟りではないかと心配になって、業者を雇ってお墓の掃除に行かせたりもしました。けれども、結局森川の土地を売却することはできませんでした。

当時、二〇〇一年から二〇〇二年にかけて、勝さんは投資していた株式が暴落したことで大きな損失を蒙り、借金の返済に追われていました。

一九八〇年代の半ばから風子さんと二人三脚で株式投資に熱を上げた勝さんは、和田書店や個人の資産を注ぎ込んで相当な金額の利益を得た上に、和田書店が駅ビルに移転するタイミングで一旦取引を手仕舞いしていたので、一九九〇年代初めにバブルが崩壊した時も運よく大怪我を免れていました。和田書店が駅ビルに移転した後、勝さんは芳子さんと再婚し、株式投資は暫く中断していましたが、再婚の二年後には風子さんと縫子を戻し、再び積極的な投資運用で利益を稼ぎ始めました。しかし運が良かったのはここまでで、二〇〇〇年にITバブルが崩壊したときは、借入金の運用や信用取引で投資の規模が大きくなっていく上に、幾つかのIT銘柄に投資が偏っていたこともあり、損失が大きく膨れ上がりました。

勝さんは、筋の悪いところも含めて八方からお金を掻き集めて何とか急場を凌ぎつつ、不動産を担保に入れて金融機関からお金を借りようとしたが、芳子さんの協力が得られません。自宅やいくつかの賃貸用の不動産は芳子さんや子供達との共有名義になっていて、既に勝さんと別居していた芳子さんは、勝さんが風子さんと一緒になって作った借金の返済への協力を頑なに拒んでいました。

しかし、借りたお金は返さなければなりません。

勝さんは、まず、共有名義になっていない大浜の賃貸アパート二棟を不動産会社に売却しました。興味を示した不動産会社の社長を大浜の料亭やクラブで接待して、最後は筋の悪い男達が入りする店にまで連れて行き、半分脅すような交渉をして、一か月もかからずに相場以上の金額で売却しました。それでも急いで返さなければならぬ借金を返す目処がつかないので、オーナーをしていた大浜のクラブと二軒のラーメン屋を同業者に売却しました。この時も、勝さんは料亭やクラブを梯子して、最後はヤクザまがいの交渉をして取引をまとめていました。

こういった物件に比べれば、開玄堂があった森川の土地は、静川沿いで立地も良く、住宅にも店舗にもなる一〇〇坪余りの手頃な土地なので、すぐに良い買手が見付かるだろうと思っていたのです。

一回目の時は、大浜で会社勤めをしていた人と売買契約を締結するところまで進みました。自分の家族四人と森川で一人暮らしをしている母親とが同居するために、できれば静川沿いの土地を見付けたいと長いこと物件を探していた人で、売りに出してから直ぐに契約に至ったのですが、その直後に母親が突然亡くなってしまいました。「申し訳な

いのですが、状況が変わってしまい自宅の新築は見送りたいので、売買契約は解約できないでしょうか」という申し出を受けた勝さんは、このときはすぐに別の買手が見付かると思っていましたから、もらった手付金は返さないという条件ですんなりと解約に応じました。

二回目の時は、大浜と森川でカジュアルなレストランを何軒か経営している人に売却しようとなりました。この人も購入には大いに乗り気で、話しはトントン拍子に進み、一回目の取引が流れてから一か月もしないうちに契約を締結する段取りにまで進みました。しかし、買主が信頼しているという風水師に森川の物件を見せたところ、この風水師が売主に会わせろと言い始め、契約を締結する日に仲介業者の事務所にまでやって来ました。山伏のような奇抜な格好をして現れた風水師は、勝さんに会うなり「喝」と奇声をあげ、訳の分からない呪文をぶつぶつとひと頻り唱えた後で、「この売主からあの土地を買うことは、末代にまで禍根を残す。絶対に何があっても買ってはならない」と言い張り、契約の説明を何度も妨げた上に、最後は用意してあった契約書を取り上げて破いてしまったので、結局、契約には至りませんでした。

三回目の時は、大浜の不動産業者に売ろうとしたのですが、話しがまとまりかけたところで、この不動産業者の社長夫婦がホテルの部屋で覚醒剤を使っていたところを警察に踏み込まれて逮捕され、売却の話は立ち消えになってしまいました。

「どうかしてるぞ」勝さんは言っていました。「風子、金が要るんだ。これっぽちの金のことで、いろんなところからさんざんプレッシャーを掛けられて、ほんとうに頭にくる。和田書店に金はないのか。銀行は貸さないのか。業績はいいじゃないか。多少の金は何とかならないのか」

風子さんも、毎日のように繰り返されるお金の話しに疲れて苛立っていました。「銀行は、大浜も光陽も無理だから。社長が自宅に担保も付けさせないのに、賭けごとまがいの投資で作った借金の穴埋めなんかできないって。慇懃無礼な言い方をするけど、要はそういうことだから、絶対に無理」風子さんの言葉も日に日に刺々しくなっていました。「奥さんに頼み込んで、ご自宅に担保を付けさせて頂くか、そうでなければ、税務署には見せられないご自宅の金庫の金貨を売り捌くか、私を責める前にそっちを何とかしてよ」

「それができるなら、お前に頼んでない。こうなってる原因の半分はお前にもあるんだからな。何とかならないのか」

「光陽が言うように、さくら書店の出資を受け入れたらいいじゃない。そうすれば、銀行との関係も良くなるでしょ」

「いいのか。山本や伊藤は大反対じゃないか」

「仕方がないじゃない。こうなっちゃたんだから。あなたが決めることなんだから、あなたが決めたらいいでしょう」

「山本や伊藤に辞められたら困る。お前に説得できるか」

「知らないわよ、そんなこと」

勝さんと風子さんの間では借金の返済を巡る言い争いが絶えませんでした。風子さんは、和田書店の借金だけでなく、勝さんの借金を減らすためにもいろいろと努力を尽くしましたが、短期間でまとまったお金を作ることは簡単ではありません。

三回目の売却に失敗した後で、風子さんは、森川の土地を更地にしてから売却しようとして試みました。森川の土地には、昔の開玄堂が取り壊された後でプレハブ造りの店舗が建てられ、十年間ほどレンタルビデオ店として使われていたのですが、この頃は空き家になっていました。簡単な造りの小ぶりな平屋の建物なので、短期間で取り壊して更地にできるし、更地の方が売りやすいだろうと思ったのです。しかし、解体作業の見積もりに来た業者は、建物の中に入ることができませんでした。

「中村さん、困りますよ。そんなふうに出て籠もられちゃっても」表の自動扉を叩きながら話しかける解体業者に、風子さんは「すぐ開けますから」と答えたのですが、声が出ません。風子さんは建物の中にいて、中から懸命に自動扉を開けようとしたのですが、電気を入れても、電気を切って手で開けようとしても、二十分かかってもしも開けることができません。入るときには普通に開いた裏口の扉も、押しても引いても頑なに微動もしません。解体業者はしばらく建物の前で待っていました。何の説明もせず、扉の前まで出て来たり、奥に引っ込んで行ったり、うろろと無言で歩き回るだけの風子さんに呆れ果てて、最後は怒って帰って行きました。解体業者が車で立ち去ってから三分もすると、風子さんは普通に話せるようになり、扉も開くようになったのですが。

どうしてこんなことが起きたのか、誰にも分かりません。ただ、時として、こういったことは起こるものです。そうしている間に、さくら書店から出資を受け入れる話が始まり、勝さんも和田書店も落ち着きを取り戻しました。

風子さんは、出資と同時にさくら書店から出向してきた林さんに経理や総務の仕事を引き継ぐと、二〇〇二年の夏が終わる頃に和田書店を退職し、自己破産の手続を取りました。風子さん自身も、株式投資で大きな損失を被っていました。自己破産の手続が終わって年が変わる頃に、風子さんは一人で大浜の街を出て行きました。行き先は、勝さんにも宙さんにも誰にも告げませんでした。

昭和四十二年の未年生まれ。私よりも二つ年上。勝さんの息子さん。だけど本当の息子さんかどうかは分からない。あのとき、勝さんが言っていたから。

「子供ができないんだよ。俺には血のつながった子供はいないから」

本当だと思った。芳子ママは、勝さんには東大を出た息子さんがいると言っていた。お店では勝さんもそう言っていた。けれど、あのときの勝さんは嘘をついていないと思う。でも、みんな、大塚さんは勝さんの子供だと思っている。渡辺先生も。たぶん芳子ママも。血がつながっていなくても、相続ってできるのかな。分からない。でも、勝さんの遺言なら、遺言どおりにしてあげたい。渡辺先生も、和田書店の人達も、大塚さんに和田書店を継いでもらいたいのなら、協力してあげないと。大事なお客さんだし。大丈夫。大塚さんと、ちゃんと話せると思う。

大塚さんは六時少し前に楓に来た。開店前で、まだ私しかいない。奥のテーブルに案内して、上着をお預かりして、アイステイーを用意する。名刺を頂いて、大塚さんのお仕事や夏休みの話しをする。大塚さんは、私の名刺を見て、ファーストネームが重なっているみたいだと言う。最初に働いた芳子ママの店でもらった源氏名と、自分の名前です。「楓ひろこ」。楓と呼ばれても、ひろこと呼ばれてもいい。どちらの名前で呼ぶか、大塚さんに選んでもらう。「では、ひろこさんでいいですか」って、大塚さんは礼儀正しい。着ている服も、身につけた物も、きちんと礼儀正しい。日焼けしたきれいな手に、プラチナの細めの結婚指輪をしている。

どこから話そうかと思うけれど、渡辺先生から頼まれたことを最初に話そう。

「お父様について知りたいって、森川の静川珈琲に行かれたんでしょう。そう。静川珈琲の陽子ちゃんは、昔、学生時代にこのお店で働いていて、大浜大を卒業してから、今は渡辺先生の法律事務所に勤めているの。それで、渡辺先生から、大塚さんと会って、和田会長の話をしてくれないかって頼まれて。でも、私の話しでいいのかしら。お父様は、よくお店に良く来て下さったし、奥さんの芳子さんは、ご存じですよ、お父様と結婚される前は『パピヨン』っていうお店のママをしていて、私は芳子ママのお店で働いていたから、お二人にはとってもお世話になったの」

大塚さんは、芳子ママのお店のことは知っていた。陽子ちゃんが話してくれたのかも。渡辺先生とは、和田会長のお葬式で話したことがあって、あと一時間ほどで楓に来る予定だという。渡辺先生も、来るなら言ってくれればいいのに。

「私がお話しできるのは、和田会長の女性関係のこと。ご相続されるなら、和田会長の女性関係も知っておいた方がいいでしょうし、それなら私が適任だろうって、渡辺先生が思われたんでしょうね」

大塚さんは、物心ついてから勝さんとは三回しか会っていない、だから、勝さんについて知りたいという。この人も、勝さんは血のつながった父親だと思っているみたい。

顔立ちは似ていないけれど、本当に勝さんの息子さんなのかもしれない。一瞬そう思っ
て、大塚さんをじっと見ている。

「芳子ママと結婚する前、お父様は中村風子さんっていう方とお付き合いしていたの。
和田書店は、以前は南風書店っていう名前で、中村清さんという方が経営されていて、
風子さんは、この中村清さんのお嬢さん。大浜大を卒業してから東京に出て、一度ご結
婚されたんだけど、離婚して大浜に戻って来て、それで南風書店に入ったの。その後
で、南風書店の経営が厳しくなつて、お父様が南風書店を買い取って、和田書店とい
う名前になって、お父様と風子さんのお付き合いが始まって。よく芳子ママのお店に一
緒に遊びに来てた。私が芳子ママのお店で働き始めた頃だから、昭和の終わりから平成の
初め頃。風子さんにはバッグを頂いたり、お食事に行ったり、とっても良くして頂いた」
風子さんはいい人だった。再婚した勝さんと縊りを戻したり、株で大損したり、風子
さんを悪く言う人も多いけれど、心のきれいな素敵な人だった。追い出されるように大
浜を出て行って、六十歳の若さで亡くなって。大塚さんに話しながら、風子さんのこと
を思い出すと、悲しくなる。

「だから、風子さんのお墓には、年に一度はお参りに行くの。開玄堂の山本さんも、風
子さんと同じ歳で親しかつたし、風子さんのお父様に南風書店でお世話になったから、
年に何回かお参りに行かれるみたい。伊藤社長も、毎年お参りに行くって言ってた」
大塚さんから、お墓の場所を訊かれたので、お寺の場所を教えた。勝さんの息子さん
が来たら、風子さん、喜ぶかな。

「お父様は、芳子ママとはうまくいなくて、結婚してから四、五年でご家族と別居す
ることになって、私が二〇〇四年にこのお店を開いたときは、良くお店に来て頂いたけ
れど、大浜のマンションで一人暮らしをされていたの。お店を開いて二年後くらいに、
このお店で働いていた京子ちゃんっていう子と仲良くなって、森川の駅前に大きなマン
ションがあるのはご存じ、そう、あのマンションの一番上の階の眺めのいい部屋を買っ
て、二人で暮らすようになって。当時お父様は七十歳を過ぎていて、京子さんはまだ三
十代だったから、お父様もお元気よね」大塚さんが、にっこり笑った。「マンションを買
った翌年、二〇〇七年にお父様が今の開玄堂のお店を建てて、京子さんにカフェをやら
せてあげようとしたのね。お店の二階に京子さんがひとりになつても暮らしていけるよ
うなお部屋も作ってあげて。京子さんは、国立大学を出て美術の先生の資格も持って
いて、センスが良かったから、開玄堂の建物も素敵でしょ。あれ、京子さんがデザインし
たらしいの。でも、建物が出来上がって、お店を開店する準備をしている間に、京子さ
ん、いなくなっちゃったの」

そう、誰も、何処に行つたのか知らなかった。あの頃、京子さんは幸せそうだったし、
事件に巻き込まれたんじゃないかって心配して、でも、また海外旅行じゃないかって渡
辺先生が調べてくれたら、バンコクに行っていた。そして、帰って来なかった。音信不
通で、どこで何をしているのか、生きていのかどうかも分からない。勝さんはショッ
クだったと思う。急に老けたっていう人が多かった。たまにお店に来てくれたときは元
気そうだったけれど。

「お父様は、いろんな方とお付き合いされていたけれど、大塚さん以外には、実のお子さんはいないはず。でもね、お父様を父親のように慕っている人がいるの。若いベトナム人の男の子でね、いきなりこのお店に来て、『くるまとらじろうさんはいますか』って聞くの。酒井さんっていうお客さんが毎年タイとかベトナムに遊びに行くから、酒井さんかなって思って電話して、『酒井さんに会いに来た人がいるから、お店に来てね』って呼んだら、酒井さんもびっくりしていたけど、アンさんと会えて喜んでね。三年ぶりだつて。でもね、酒井さんは寅さんじゃなかったの。お父様が、再婚される少し前に酒井さんと一緒にベトナムに旅行に行かれて、そのときに、アンさんのお母さんと仲良くなつて、アンさんの自宅までタクシーで行ったら、古い平屋建ての長屋みたいなアパートで、玄関の横の壁に大きく『FUCK』ってペンキで書かれていたんだつて。一部屋だけの家で、床に敷いたマットレスに、まだ五歳ぐらいのアンさんが寝ていて。悲しいでしょう。それで、翌日、勝さん、ペンキ屋さんを連れてアンさんの家に行つて、家の壁を全部きれいに塗り替えちゃつたらしいの。そのあとも、お父様は、酒井さんがベトナムに行くたびに酒井さんにお金を渡して、アンさんの家に届けてもらっていたんだつて。アンさんのお母さんから、いつかお礼がしたいから名前を教えてくださいって聞かれて、酒井さんが、このお店の住所と、車寅次郎っていう名前を教えたわけ。アンさん、サイゴンで一番いい大学を卒業して、就職も決まつて、車寅次郎にお礼が言いたいつてこの店に来たのよ。いい話しだと思わない」

大塚さんが、アンさんは勝さんに会えたのかと聞いた。

「お父様は、アンさんには会わなかった。アンさんは、お父様に会えなくて残念だったかもしれないけど、酒井さんがいろいろ案内してくれて、うちの女の子も一緒にお寿司や焼肉を食べに行つたりしていたから、いい思い出になったんじゃないかしら」

七時近くなつて、お店の女の子が出勤してきた。七時過ぎに渡辺先生が来て、大塚さんと話し始めたので、席を立った。大塚さんに、きちんと話せたかな。大塚さんは、勝さんのことを「和田さん」と呼んで、一度も、「父」とか、「父親」とか言わなかった。勝さんのことを悪く言う人もいる。でも、あなたは知らないかもしれないけれど、勝さんはいい男だった。今は、あなたにも言わないし、これからは誰にも言わないと思うけど、私は、あの人のことが好きだった。一時期、とつても親しい関係だったし、そのあとも、お互いに心を許せる間柄だった。

渡辺先生と大塚さんが立ち上がった。これから晩ごはんを食べに行くという。もう一度大塚さんの顔を見つめる。ほんとうに勝さんの息子さんかな。息子さんなら、また会えるような気がする。会えたらいいなと思う。

切り出した花崗岩を置いただけのベンチに腰掛けた風子さんは、光沢があるダークグレーのウールのコートを着た背中に西日を受けながら、黒く塗られた低い鉄柵と、コンクリートの深い堀で隔てられた象舎を眺めていました。象舎の前の広場にはところどころに落ち葉が吹き寄せられているだけで、象の姿は見当たりません。もうしばらく前からこうして象のいない広場を一人で眺めています。奥の部屋から太郎が出て来る様子はありません。

この日、六年ぶりに大浜に戻った風子さんは、市内の正徳寺で両親のお墓参りをしたあとで、翌日には取りに来ると言って住職に小ぶりなポストンバッグを預け、そのまま森川城公園の太郎のところに行って来ました。和田書店にも、半年ほど前に開店したばかりの開玄堂にも立ち寄りませんでした。

風子さんが太郎に会いに来た回数多くはありません。六年前に大浜を離れたときは、勝さんや宙さんにも会わなかったように、太郎のところにも会いに来ませんでした。最後に風子さんがこの場所に来たのは十二年前のことで、太郎に会ったのはこのときが四回目でした。三回目に会ったのはその十二年前で、二回目はさらにその十六年前、そしてさらにその十二年前、風子さんは八歳の時に初めて太郎と出会いました。

初めて太郎に会った日のことを、風子さんははっきりと憶えています。高熱を出して小学校の写生会に参加できず、象を見られなかったことが残念で、父親の清さんに頼んで森川城公園に連れて来てもらいました。清さんは、文蔵さんから南風書店のビルを借りたばかりの頃でしたから、森川に着くと、まず開玄堂を訪ねて文蔵さんに会い、文蔵さんも一緒に三人で太郎を見に行きました。八月下旬の暑い日でした。三人で汗ばみながら象舎の前まで来ると、太郎は象舎の奥の部屋にいて、何分待っても広場に出て来ません。蟬が元気良く鳴いていて、象舎の上に白い雲が勢いよく湧き上がっていました。気落ちして退屈した様子の風子さんを見て、文蔵さんが「そのうち出てくるよ。あつちでアイスクリームを売っているから、アイスクリームを食べに行こうか」と声を掛けました。しばらく歩いたところにあった古いヤカーの屋台で、日焼けが染み込んだ顔のお爺さんからアイスクリームを三つ買って、三人でアイスクリームを舐めながら象舎に戻ってくると、ちょうど太郎が広場に出てきたところでした。広場の柵の周りに子供達が集まってきました。風子さんも急いで駆け寄って、柵をつかみ、太郎の方に視線を上げた瞬間、風子さんの視線と太郎の視線が重なり合いました。この日のいくつかの記憶はやがて薄れて消えていきましたが、この瞬間の記憶は風子さんの中に長く鮮明な印象を残しました。

「太郎の目に吸い込まれて、時間が引き延ばされたような感覚がしたのよね。そんな不思議な感覚がして、ちよつと怖かったのかも。それなのに、『太郎はアイスが欲しいのかな。ここから投げても届かないな』って思っていたの。おかしくない。こんなことを今でもはっきり憶えているなんて」

太郎と初めて会ってから十二年目の夏に、風子さんは宙さんと連れ立って太郎に会いに来ました。大学は夏休みで、南風書店も定休日だったこの日は、梅雨が明けたばかりの暑い日で、二人の真上から真夏の強い太陽が射していました。数日前に髪を短く切った風子さんは、白いリネンの半袖の開襟シャツと、薄黄色のフレアスカートを着ていて、宙さんは濃紺のピースマークがプリントされた白いTシャツにブルージーンズという普段着でした。ベンチに並んで腰掛けてアイスクリームを食べていた二人の間には、宙さんがアルバイト代を貯めて買った中古のニコンと、古い白黒写真が一枚置かれていました。写真には、ワンピースを着て象舎の前に立っている八歳の風子さんと、その後ろに太郎が小さく写っています。写真の中の風子さんは心から楽しそうで、風子さんに言わせると、「小さい頃の写真で一番の笑顔」をしています。文蔵さんも、この写真を撮ったとき、首から下げた二眼レフのファインダーを覗き込みながら「かわいいなあ」と言っていました。この写真は、二人が太郎に会いに来る一週間ほど前に、清さんが風子さんに渡したものです。風子さんと宙さんが南風書店のレジで動物園の善し悪しについて盛んに議論しているのを聞いた清さんが、「森川城公園の象は、やまちゃんや風子と同じ歳だったはずだから、二人で見に行ってきたらどうだ」と言っただけでこの写真を出してきてくれました。清さんは、亡くなった文蔵さんが撮った写真だから大事にしなさい、と付け加えました。

「象ってアイス食べるのかな」宙さんが風子さんに訊きました。

「たくさん食べそうじゃない」

「お酒も飲めるのかな」

「もう二十歳だしね」

「かなりいけそうだよ。酔ったら騒ぐかな。アイ・シャル・ビー・リリーストとか」

「そうね。そうかもね」
とても暑い日でしたが、二人は長いこと陽の当たるベンチに座って太郎を眺めていました。太郎も、夏の日差しを全身に浴びながら、広場の中をゆっくりと歩き回っていました。

あの日から十六年後に風子さんが一人でこの場所を訪れたときも、風子さんは同じベンチに座って、長いこと黙って太郎を見詰めていました。十月の良く晴れた日曜日の午後で、何組かの親子連れが太郎を見に来ていました。勝さんから「俺と付き合ってみないか」と言われたのが三日前のことで、その場は笑ってやり過ぎたものの、心臓が高鳴り、この三日間、気付かないうちに何度も上の空になっている自分に驚いていました。中村家が南風書店を手放し、勝さんが和田書店の社長に就任してから半年が過ぎた頃のことです。

それからさらに十二年が過ぎて、風子さんが再びこの場所にやって来たときも、勝さんから縊りを戻したいと言われたことがきっかけでした。勝さんは二年前に芳子さんと再婚していて、風子さんは四十八歳になっていました。銀杏の葉が黄色く色づく頃で、風子さんは、栗色のコートを着て、同じ色合いのショートブーツを履いていました。ま

た同じベンチに腰掛けて、太郎を眺めながら夕暮れの時間を過ごして、それから来た時と同じように一人で帰っていきました。

「太郎、この場所でずっと生きていくのかな」風子さんが隣の宙さんに訊きます。「どうかな。でも、生まれ故郷に帰ったり、親兄弟に会うのは難しそうだよね。この場所ですと長生きするんじゃない。哺乳類は、基本的に体が大きいほど長生きらしいよ。俺より長生きしそうだし、風子よりも長生きするかもね」宙さんが答えます。

「そっか」と言つて風子さんは立ち上がり、象舎を囲む堀の鉄柵を掴みました。「ね、太郎と一緒に写真撮つてよ。その後で、私も宙と太郎の写真撮るから」

二人は宙さんのニコンでお互いの写真を撮りました。宙さんが風子さんを撮つて、風子さんが宙さんを撮つて。風子さんが宙さんにカメラを返そうとしたときに、風子さんの手が宙さんの手に重なりました。

宙さんが撮った写真には、こちらを振り向いた瞬間の風子さんのバストショットと、その後に軟らかくぼやけた太郎が写っています。風子さんが撮った写真には、柵に寄りかかって腕を組んでいる宙さんと、その向こう側の広場に立っている太郎が写っています。風子さんはこの二枚の写真を大事にしてきました。普子さんが正徳寺の住職に預けたポストンバッグには、文蔵さんが八歳の風子さんと太郎を撮った写真と一緒に、この二枚の写真も入っていました。

六年前に大浜を去った後、風子さんは遠い街のスーパーマーケットでパートタイムの仕事を見つけて、五年間休まずに働きました。近くに知り合いもなく、生活も楽ではなかったはずですが、心穏やかに暮らしていたようです。その後、この年の夏に思いついたように仕事を辞めて、四十歳の誕生日に購入してから二十年間もお守りのように大事にしてきた金のインゴットを売って、アパートを引き払い、身の回りを整理して、旅行に出掛けました。ニューヨーク、ロンドン、パリ、プラハ、イスタンブール、デリー、コルカタ、バンコク、マニラ、タイペイ、四か月後に日本に帰国して、森川がこの旅行の最後の目的地になりました。

西の海に日が沈み、薄暗くなってきた公園に十一月の冷たい風が吹き始めました。太郎はまだ広場に現れず、風子さんはベンチに腰掛けたままでした。

お酒が回ってきたのか、渡辺先生は昨日の落ち着いた話しぶりに比べると格段に饒舌になってきた。山本さんも伊藤社長もお酒が好きなようで、四人で飲み始めてまだ一時間ほどしか経っていないのに三本目の四合瓶がなくなりかけている。一本目は、この小料理「善」の店主である久保田さんに因んで久保田の千寿、二本目は店名に因んで浦霞の禅、三本目も店名に因んで上善水如。お酒も美味しいが、料理が素晴らしい。最初の一皿から、思わずはっとさせられて、暫く会話から置いていかれてしまうほどの存在感がある。突き出しとして出された塩を振っただけのトマト、焼茄子、枝豆、ざる豆腐、素揚げにした里芋と蓮根、どの料理も素材に力が漲っていて驚くほど美味しい。続いて出された刺身の盛り合わせも、味の輪郭が鮮やかな近海の鯛や縞鯨、少し寝かせて甘くなった鰯や鱸、彩り豊かな磯の香りを幾重も身に纏った地元の貝、溢れ出す海の恵みが味覚、嗅覚、触覚を通して口の中から身体全体にじんわりと染みってくる。その後の太刀魚の塩焼き、シラスと甘唐辛子の和え物も、思わず目を閉じて何かに感謝したくなるような味わいだ。

「渡辺さんは、筋金入りだから。大塚さん、森川トラストってご存知ですか」

「いえ、すみません、勉強不足で知りませんでした」

「十五年くらい前に森川の上流でダム建設の調査が始まったときに、渡辺さんは反対運動の中心メンバーだったんですよ。和田書店は、なるべくニュートラルに、多面的に取り上げようっていうことで、長野県の「脱ダム宣言」もあたりしましたから、ダム問題の特集を何度か組んで、色んな本や意見も紹介したりしたんですけれど、渡辺さんの主張は急進的なんです。私の理解では、間違っていたら訂正してくださいね、近現代の人間は人権を認める範囲を身分や性別や人種を超えて広げて来たんだから、森川の上流の生態系にも『人権』を認めていくべきだ、人間が生態系を一方的に支配できると考えるのはおかしい、生態系にも異議申し立てができる権利を認めるべきだっていうんですよ。ダム計画は二、三年で中止になったんですが、その後も渡辺さんは、この運動に『森川トラスト』って名前を付けて、細く長くっていいですかね、地道に続けて来られていて、和田書店のブログでも、今でもたまに紹介しているんですよ」

「面白いですね。自分も、学生の頃だったか、卒業した頃だったか、『木は法廷に立てるか』っていう雑誌の特集を読んで、刺激を受けましたね。今でも家の本棚にありますよ」

「いや、大塚さんも読みましたか。自分も、あれを読んでいたことが一つのきっかけでしたね」

みゆきさんがゴーヤチャンプルーを持ってきた。いつもの読谷焼の大皿に盛り付けられて、天辺で鯉節が踊っている。取り皿も読谷焼の小皿に取り替えられて、この後で豚の角煮と冬瓜の煮物が来るといふ。大塚さんがみゆきさんに向かって料理がとてもおいしいと褒めていて、渡辺さんは、みゆきさんは舌とコメントは鋭いけど料理はだめだから旦那を褒めないよ、と言って笑っている。伊藤さんは、焼酎もいければ今日は日本酒で通しましょうか、などと言いながら酒を選んでいる。大塚さんは良く食べるし、酒も相当強そうだ。残りの三人も、いつも以上に酒も食も良く進む。

「渡辺さん、今日は持株会の話しをしたっていうことだったんですよ。あんまり酔っ払い過ぎないうちに話しておかないと、大塚さんは明日東京に帰られるんだから」みゆきさんに福島純米酒をぬる燗にしてくれと頼んでから、渡辺さんに声をかける。

「そう、昨日、楓で大塚さんに持株会のことをお話しして、基本的には、前向きに検討して頂けるといってお返事を頂きました。ということ、いいですよ」

「ええ」大塚さんは最後の上善水如を片口から全員の杯に注いでいる。

「先月、大塚さんが大浜に来られた時に、相続を放棄することも選択肢に含めて考えているとお聞きして、我々としては、是非大塚さんに和田書店のオーナーになって頂きたいと、そう思って、何か和田書店にもできることはないか、ということでご提案させて頂いたのが、持株会のアイデアだったわけです」渡辺さんが杯を口に運びながら話し続けている間に、豚の角煮と冬瓜がやって来た。

「昨日お話ししたように、持株会のアイデアは、和田書店の株式の一部を持株会に売却して頂くことで、大塚さんの相続税のご負担を多少は軽くできないか、という気持ちや、和田書店の役員や従業員も持株会を通じて出資をして、和田書店の将来へのコミットメントを示せば、大塚さんにより安心してもらえるのではないかと、といった気持ちでご提案させて頂きました。ただ、持株会を提案した理由は、それだけではなくて、持株会は和田書店をより良くするために役に立つと昔から思っていたんですね。和田書店の良さは働いている『人』の魅力や努力だと私は思っていますが、その魅力や努力が十分に報われてきたかという点、私から見ると、そうでもない。以前は、和田書店もかなり稼いだ時期がありました。稼いだ利益は専らオーナーの和田会長にお納めしてきた歴史があるわけです。そもそも、書店員の皆さんは、和田書店がどれだけ儲かっているかも知らなかったはずで、こういう在り方はあまり健全とは言えないんじゃないか、やはり、一生懸命働いている従業員にも株を持ってもらって、損益も開示して、配当もできるようなになったら、こう、より一体感が増して頑張れるだろうと思うわけです」渡辺さんは大分酔いが回ってきているようだった。

「持株会の件は、二〇〇二年にさくら書店に出資してもらった時にも、山本さんから和田会長に提案したんですが、実現しなかった経緯があつて」伊藤さんが渡辺さんの後を引き継いで話している間に、みゆきさんがちろりで温めたぬる燗を持って来てくれたので、新しい大きめの平たい杯に注いでいく。自分も、持株会は良いアイデアだと思ってきた。和田会長対現場の力学がなくなつた後で、和田書店の活力をどこに求めていくのか、さくら書店がどう思うかは分からないけれど、全員参加型の『民主的』な経営を考えるなら、持株会が役に立つかもしれない。伊藤さんは、十年以上も前の持株会の検討の経緯を良く覚えていて、詳しく説明している。「当時からメンバーの出入りはありませんが、持株会ができたなら、基本的に社員は全員参加するはずですよ」と長い話しを終えた時には、いつの間にか全員の杯が空いていた。目の前のちろりを取って、もう人肌になったぬる燗を皆の杯に順番に注ぐ。

「もう少し、食べられますよね」と渡辺さんが言って、みゆきさんを呼ぶ。お奨めをいろいろと聞いてから、サラダとコロツケを頼み、浅漬けも持って来てもらう。さらに食べられそうならば角切りのローストビーフもお願いすると言っている。

「持株会は、作っても、作らなくても、どちらでもいいんですよ。作ったら必ず和田書店が良くなるかといったら、そんな保証はありませんから」山本さんがこちらを見て口を挟んだ。「そもそも持株会のアイディアは、渡辺さんが発案者ですから、発案者の宣伝文句は、多少は割り引いて聞かないと」

「宙さんは厳しいなあ」と笑いながら渡辺さんが杯を空け、山本さんがぬる燗を注ぐ。自分も杯を空けて、酒を注いでもらおう。この酒も旨い。ぬる燗にして引き立てられた酸と糖のバランスがグツとくる。

「渡辺さんは、お酒が入るとラディカルな本音が出しますから、安易に頷いていると、気が付くととんでもなく遠くまで流されていることになりますよ」山本さんも杯を空けて、渡辺さんから酒を注いでもらっている。「この人は、まあ大なり小なり伊藤さんも私も同じですが、権力だったり、支配・被支配といったものが基本的に嫌いなんです。なので、渡辺さんは、法律家なのに、会社は株主のもので、株主が会社を支配するっていうコンセプトが嫌いなんですよ。本当は法律を変えたいんだけど、そうもいかないので、従業員やお客さん、取引先や地域社会まで株主にして、支配関係を引っ繰り返したがつたりする。渡辺さんにこの話しをさせると長くなりますし、面白い話ではあるんですが、物事にはどうにもならないこともありますし、時間をかけないといけないことも多いですからね。持株会は、大塚さん次第で、今作っても、作らなくても、どちらでもいいんですよ」

「いや、私も法務部暮らしが長い会社員ですが、中島電機のような会社においても、会社は株主のものだっていう考え方は一面的じゃないかと思うことは多いですね」大塚さんも、どうやらこちら側の住人のようだ。宙さんが酒を飲む手を休めて大塚さんの話しを聞いている。「東インド会社みたいに資本が大きくなりリスクを取った時代や、装置産業で設備投資が利潤を生んだ時代と、今のように知力や情報が価値を生む時代はやっぱり違って、価値の源泉は資本だけではなくて、従業員だったり、顧客や取引先、地域社会との繋がりがだという考え方は、とても真つ当だと思えますね」

「そうでしょう、会社は株主のものだなんていうのは、奴隷制度じゃないんだし、支配する側の投資家が都合良く作り上げた神話ですよ」

我が意を得た顔の渡辺さんを中心に談論風発、結局この日はローストビーフまで平らげて、最後はカラスミとブルーチーズを摘まみに燗をつけた北陸の山麩を楽しみ、四合瓶を七本空にしてお開きとなった。

久保田さんとみゆきさんに、こんなに飲み食いした客は初めてだと驚かれ、今日は食べられなかったから次回は鼈が食べたいなどと賑やかに騒ぎながら表に出る。心から満たされた気分だ。静かな通りにタクシーが二台待っていて、森川に帰る宙さんと開玄堂の二階に泊まる大塚さんが一台のタクシーに乗り込んで去って行く。渡辺さんもタクシーで帰っていった。私は、タクシーを見送り、久保田さんとみゆきさんに挨拶をして、家までの道をぶらぶらと歩き始める。曲がり角で振り返って手を挙げて、ふたりにもう一度挨拶をしてから夜空を見上げると、大きな満月が静かに輝いているのが見えた。

創業当初は一階だけを使っていた南風書店も、この頃は一階に雑誌、新刊書、文庫、新書と特集コーナー、二階に文芸書と専門書、三階に実用書、児童書、学習参考書とコミックなどの売場があり、最上階の少し狭い四階を事務所や会議室、倉庫兼作業スペースとして使っていました。戦前に建てられてから既に半世紀を過ぎたビルは、廊下や階段の幅が広く、入口の目を引く石張りの円柱や、床や腰壁の落ち着いたタイル装飾など、ところどころに瀟洒な意匠が見られましたが、老朽化していましたし、エレベーターもなく、階段で重たい本の上げ下ろしをするのはかなりの重労働でした。

清さんが亡くなってから形の上では社長となっていた奥さんの弘子さんが久しぶりに南風書店を訪れ、四階の事務所に全員を集めて、南風書店の株式を勝さんに売却することになったと伝えたのは昭和五八年の秋のことでした。肌寒い北風が吹く良く晴れた朝で、弘子さんは紬の着物の上にシヨールを羽織っていました。開店前の店舗を一階から順番に回り、いつもどおりの毎日の準備をしているひとりひとりと二言三言話しをしてから四階に上がった弘子さんは、準備を終えて一人また一人と集まって来た書店員を前にして、今までお世話になったお礼を述べ、南風書店の歴史を振り返り、和田さんの下で頑張ってもらいたいと話しを結びました。背筋をしゃんと伸ばして、しっかりと話をしぶりでした。オーナーが交代するらしいという噂は流れていましたが、風子さんを除けば書店員たちはこの日初めて聞いた「和田さん」と会ったことがなく、この場に「和田さん」がいないことに違和感を覚える人もいました。けれども、その違和感が話題にされることもなく、宙さんが弘子さんにお礼の言葉を述べ、皆に職場に戻るよう声を掛けて、この場は静かにお開きになりました。

この年の春に、長年にわたり番頭格として清さんを支え、清さんが亡くなってからは南風書店の舵取りを担っていた池田さんが南風書店を去りました。明るくバイタリティに溢れ、皆から信頼され好かれていた池田さんは、清さんが亡くなったあと、弘子さんを説得して県内に五つの支店を次々と開き、大浜の本店は宙さんに任せて、自分は支店を飛び回っていました。しかし支店の経営はコンサルタントが言っていたような軌道には乗らず、どの支店も赤字が積み上がるばかりで、三年後に風子さんが監査をすると、表向きの赤字以上の多額の赤字と不良在庫が積み上がっていました。加えて、親戚が持ち込んだ儲け話のために池田さんが無断で用立てた会社の資金の焦げ付きや連帯保証の負担まで押し掛かり、気が付くと南風書店はいつ倒産してもおかしくない状況になっていました。池田さんは不祥事の責任を取って退職しましたが、池田さんだけに責任があったわけではありません。風子さんが離婚して大浜に戻り、南風書店で働くようになるのと、風子さんと宙さんが結婚して南風書店を継ぐだろうと思われるようになり、さらに清さんが入退院を繰り返すようになって、池田さんは将来の居場所のなさを感じていました。そんな中で支店に活路を見出そうとした池田さんを、弘子さんも風子さんも止められなかったし、南風書店の全員が池田さんに遠慮していたことが傷を深めたとも言えます。池田さんの退職の前後に起きた諸々の出来事は、南風書店に経済的に大きな打撃を与えただけでなく、皆に後味の悪い後悔と重い疲れを残すことになりました。弘子さ

んが南風書店を手放した三年後に亡くなったことも、この時の心労と無縁ではありませ
ん。

弘子さんが風子さんと一緒に勝さんを訪ねて、南風書店の家賃の支払いを待ってもら
えないかと頼んだのは、池田さんが退職した直後のことでした。南風書店は給与の支払
いも難しい状況で、頼れる伝手もなく、南風書店の支援者だった文蔵さんを相続した勝
さんに窮状を伝えて協力してもらおうと思ったのです。話しを聞いた勝さんは、勤務先
の大浜銀行は融資できないが、個人的に融資できるかもしれないので、南風書店の帳簿
を見せてもらいたいと言いました。帳簿を持って行ってから三日後に弘子さんと風子さ
んを自宅に呼んだ勝さんは、このままでは南風書店は資金繰りに行き詰って二か月以内
に確実に倒産すること、南風書店の株式を勝さんに譲ってくれたら融資をして立て直す
用意があること、そのためには支店を閉鎖して従業員を解雇する必要があることなどを
伝えて、一週間以内に返事をしてもらいたいと迫りました。他にどうすることもできな
かった弘子さんと風子さんは、南風書店の株式を僅かな金額で勝さんに譲り渡すことを
約束し、業績が悪い三つの支店を閉鎖し、辞めてもらう従業員には中村家の私財からも
幾許かのお金を渡して辞めてもらいました。この間、勝さんは南風書店のために相当の
金額を用立てて、風子さんにいろいろと指示も出していました。南風書店を訪れて新
オーナーとして初めて皆に挨拶をしたのは、年が変わって三月になってからでした。

「今月末で銀行を辞めて、四月一日付でこの社長に就任するから、よろしく」

新オーナーとしての手短な挨拶をした後で、勝さんは四階の倉庫兼作業スペースを潰
して作った何もないガランとした部屋に宙さんと呼んで、自分が社長になると伝えまし
た。

「自分が社長になることは、山本から皆に伝えてもらいたい。それから、この部屋は社
長室にする。来週あたり内装屋が来てきれいにする予定だから、そのつもりでいてほし
い。まあ、社長といっても書店業については何も知らないから、いろいろ教えてくれ」
そう言って勝さんは宙さんに握手を求めました。

「伝票を見かけて気になったんですが、店の名前を変えるんですか」宙さんは手を下ろ
したままで勝さんにゆっくりと問いかけました。「看板を和田書店に架け替える発注書を
見かけたので」

「ああ、そのことも、中村さんは了解していることだから、山本から皆に伝えてくれ。
できるだけ早いタイミングでこの店は和田書店になる。心機一転だな」勝さんは差し出
した手を下ろして後ろ手を組みました。

「南風書店という名前の由来を、中村さんから聞かれましたか」
「いや」

「大塚文蔵さんと、南風書店を創業した中村清さんが戦友だったことはご存知でしょう
か」

「いや」

「お二人は、フィリピンで多くの戦友を亡くされたそうです。九死に一生を得て復員し
て、戦後の混乱期を過ごした後で、二度と戦争を起こさないために何ができるかを考え

て、書店を立ち上げた時に、戦地で亡くなった戦友たちの声に耳を傾けて、初心を忘れずに店を続けていきたいという思いを込めて『南風書店』という名前を付けたそうです。ですから、南風書店は、『反戦』や『非戦』を大事なテーマとして考えてきました。もうひとつ、一つの意見に偏らずに、いろいろな見方や考え方を世の中に伝えること、特に、正論のように聞こえる意見に偏らないことを大事にしてきました。この店で働いている人たちは、私も含めて、南風書店の姿勢に共感してこの店で働いていますし、この書店をととても大切にしています。『南風書店』という名前にも愛着があります。名前を変えることには賛成できませんし、皆も同じ意見だろうと思います。生きていたら、中村さんも反対しますし、大塚さんもきつと反対するはずですよ」

「言いたいことは分かったが、中村さんのことはともかく、大塚さんのことは知っているのか」勝さんは宙さんの目を見て問いかけました。

「森川の出身ですから」宙さんも勝さんの目を見て答えました。「中学生の頃に開玄堂でお話したことがあります」

勝さんは後ろ手のままでゆっくりと部屋の中を五、六歩歩いてから、宙さんに向き直りました。

「社名は和田書店に変える。これは株主になる時に決めたことで、今から変えたりはしない。ただ、和田書店の経営は、今まで通りに進めてもらっていい。利益を出し続ける限り、余計な口は出さない。大事な理念は大事にしてもらっていい。ただし、利益が出せなくなったら、その時は口を出させてもらおう。どうだ」

「分かりました」

「残っている従業員は全員優秀だ。これ以上は辞めさせず、一生懸命働いて利益を出せるようにできそうか」

「頑張ります」

「あともう一つ、中村風子のことだ。あの女と付き合っているのか」

「いいえ」

「じゃあ、俺が付き合っても文句はないな」そう言って勝さんは目で笑いました。

宙さんは黙って勝さんを見詰めていました。

「今日はもう帰るよ。後のことはよろしく頼む。じゃあ」と言って勝さんは手を上げると、扉を開けて廊下に出て、階段を下りて行きました。

宙さんがもう一つの扉を開けて事務所に戻ると、いつの間にか事務所に来ていた風子さんが一人で机に向かっていました。後年、風子さんは、この時に宙さんに声を掛けていたら違う未来になっていたのだろうかと何度も思い返しました。けれども、二人は何も言葉を交わさず、宙さんもまた静かに扉を開けて階段を下りて行きました。

開玄堂の二階は、我が家と同じくらいの広さがある2LDKで、夫婦がゆったり暮らせそうな間取りです。寝室にはツインベッドがあり、食卓もソファもテレビも揃っています。ここで誰も暮らしたことがないというのが不思議なくらいです。北側の広いベランダから静川と桜並木が見えます。

この部屋の食卓で、手紙を書いています。手紙を書くなんて、本当に久しぶりです。仕事用のメモパッドに百円のボールペンで書く手紙なんて、色気がないですね。でも、これしか紙もペンもないので、仕方ありません。紙にペンで文章を書くのも久しぶりです。きちんと書けると良いのですが。

手紙だと書きましたが、正直なところ、これを手紙と言って良いのか分かりません。恵さんに向けて書いているつもりなのですが、自分に向かって、というよりも自分のために書いているように思えます。おそらく、半分以上は自分のためでしょう。言葉にして、自分自身を鎮めたいのだと思います。

今、午前一時を回ったところです。かなりお酒も入っているのですが、目が冴えて、今夜はまだしばらく眠れそうにありません。

山本さんと一緒にタクシーで開玄堂に着いたのは夜の十一時半過ぎで、まだあれから二時間も経っていません。大浜の「善」という小料理屋で（このお店は野菜と魚が飛び切り美味しいので、今度一緒に行きましょう）、山本さんと、和田書店の伊藤社長、弁護士渡辺先生と四人で食事をしてから、山本さんと二人でタクシーに乗って森川に戻って来ました。

開玄堂に着くと、山本さんが「店で一杯だけ飲みませんか」と声を掛けてくれたので、開玄堂で少し飲むことにしました。

山本さんは、店のカギを開けながら、「ちよつと驚くことがあるかもしれませんけれど、安心してください。心配は要りませんから」と言いました。

その時は、何かサプライズでもあるのかな、実は伊藤社長も渡辺先生も先に来ていて、これから二次会が始まるのかな、などと酔った頭で考えていました。

けれども、店に入ると中はとても静かで、特に変わったことは何もありませんでした。「一杯用意しますから、どこか座っていてください」と言われて、四人掛けのテーブル席に腰を下ろしました。山本さんは「月明りがきれいですから、そっちの電気は消しておいていいですかね」と言って、カウンターの電気だけを点けて手を洗っていました。窓の外に月明かりと街灯に照らされた桜並木が見えました。ずっと閉めきっていたはずなのに、店の中は暑くはなくて、窓を開けようかと思ったのですが、開けずに外を眺めていました。

今、この手紙を書いている二階の部屋は、やはり普通に暑いので、窓を開けて風通しを良くしています。二階の部屋に入ったときは、暑いと思って、すぐに窓を開けました。そう考えると、一階のお店に入ったときには、もうあの場所は特別な場所になっていたのかもしれない。

外を眺めながら座っていると、山本さんがお水を入れたグラスを二つ持って来てくれました。お酒を飲んでいてお水が欲しかったので、お礼を言ってから早速口をつけて、間もなく飲み干してしまいました。

「何か手伝いましょうか」と聞くと、「いいですよ。ウイスキーでいいですか」と聞かれたので、「いいですね」と答えました。白い開襟シャツを着た山本さんが、カウターの中でお酒や乾きものの用意をしてくれているのが見えました。

最初に変化に気が付いたのは、山本さんのお水のコップに細かい小波が立っていたことでした。地震かと思って天井からぶら下がっているライトを見たのですが、揺れていません。山本さんを見ても、特に変わった様子はなさそうです。小波が立ち続けていて、耳を澄ますと羽音のような空気が細かく振動する音が聞こえるような気がします。テーブルを触ってみましたが、震えているようには感じられません。グラスを触ってみようかと思いましたが、山本さんが来るまで待つことにしました。

山本さんが来るまで一分もかからなかったと思いますが、長い時間に感じられました。ウイスキーと氷が入ったグラスを二つ、それからナッツを盛り付けたガラスのお皿を一つ、トレーに乗せて持って来てくれました。山本さんはカウターからこちらに向かつて歩きながら「来ましたね。気付きましたか」と訊きました。私が頷くと、「安心してください。何も心配することはありません」そう言ってテーブルにグラスとお皿を置きました。「これが初めてのことでないんです。満月の夜にいつも起きることですから。耳を澄ませてみてください」

それから日付が変わるまでの十分か二十分程度の短い時間のことは、やはりこの手紙に書くことはできなさそうです。この手紙を書き始めたときから、この時間についてどう書こうかと考えつつも、肝心なところを避けて言葉を連ねることになるだろうと思っていました。あの時間を過ごしてから一時間が経ちましたが、目を閉じるとすぐにまたあの時間に戻れるような気がします。同時に、あの時間はとても遠いことのようにも感じられます。あの時間に感じたことは、この土地、森川だけでなく大浜辺りまでを含んだこの辺りの空間と時間のことで、そこで生きてきた人間や動物や植物のことで、現在のことであり、百年、二百年、あるいは千年以上も昔のことです。言葉でなく、音でなく、映像でもなく、全身でもっと直接的に感じます。

あの時間が過ぎた後で、氷が解けたウイスキーを飲みながら、山本さんと少しだけ話をしました。山本さんは、開玄堂を開いて一年が過ぎた頃に、偶然この時間と出会ったそうです。それから数ヶ月の間は、ほぼ毎日遅くまで店にいて、満月の夜にこの時間が訪れると分かってからは、満月の夜は必ず開玄堂で過ごすようになったそうです。亡くなった和田会長も、二回、満月の夜のこの時間に開玄堂に来たことがあると言っていました。一回目は、亡くなる一年半ほど前の十二月のことで、何の前触れもなく、突然この時間に開玄堂に来たそうです。二回目は、亡くなる前の晩のことで、この時も突然

だったと聞きました。

開玄堂でこの時間を過ごしたのは、山本さんと、和田会長と、私の三人だけだそうです。この時間のことは他の誰にも話していません。私が相続をしたらこの場所も私のものになるので、相続するかどうかを決める前に、恵さんやあずさにもあの時間を経験してもらった方が良いのかもしれない、山本さんはそう言いつつも、ふたりを連れて来ることについては、ちよつと考えさせてもらいたいと話していました。山本さんから、昔の開玄堂にもこんな時間があったのかと尋ねられましたが、私は経験したことがなかったし、少なくとも私が暮らしていた頃には、おそらく今夜のようなことはなかったのではないかと答えました。

いろいろ考えましたが、今は、和田書店と、それからこの開玄堂を相続しようかと思っっています。あの人から何かを相続することには抵抗がありますし、税金も負担になります。けれども、和田書店にも、開玄堂にも、今はとても愛着を感じていて、あの人からの相続という形ではあっても、こうして得られた縁を大事にしたいという気持ちになってきています。疎遠にしてきた森川や大浜とも、この歳になってから新しい関係を築いていけそうな気がします。今日のあの時間は、未だ十分に理解できていませんし、これからも理解できないだろうと思います。自分にとってはとても大切な時間になりました。

できれば、次の満月の夜に、恵さんとあずさにも開玄堂に来てもらいたいと思っています。山本さんや、和田書店の人たちにも会ってもらいたい。その上で、二人の意見も聞いて、納得した上で決断ができれば嬉しそうです。

ここまで書いてきて、大分気持ちが悪くなってきました。この「手紙」を恵さんやあずさに読んでもらうかどうか、夜が明けてから改めて考えてみようと思います。

深夜に書いた文章は、筆が滑りがちですから。

少し眠ります。おやすみなさい。

静川に面した開玄堂の入口から店に入ると、正面の壁に絵が掛けられています。L字型のカウンターの中にあつて、お店を出るときに会計をしようとすると、ちょうど目の高さのあたりで正面に見えます。小さくはありませんが、それほど大きな絵ではありません。新聞紙二ページ分くらいの大きさの横長のパステル画です。いろいろな空や海、植物や土を思わせる様々な色が勢いをもって複雑に重なり合いながら輪郭を結ばずに微妙なグラデーションを描いていて、ところどころに鱗粉のように煌めく金や銀、白にも見える淡い桜色が印象的に置かれています。桜をイメージした絵かもしれないという印象も受けるのですが、じつと見ていると桜色は浮かび上がり、色の流れの中に溶け込んでいってしまいます。朧な光と影、色の響き合いに打たれて、美しい絵ですねという人もいますし、静けさや寂しさを感じるという人もいます。

誰が描いた絵なのかと聞かれると、宙さんは、随分以前に人から頂いた絵で、誰の絵かなのかは分からないと答えます。譲ってくれないかと訊かれたこともありますが、宙さんは断りました。

京子さんがこの絵を描いたのは、十二月の寒い夜でした。

絵を描き始める前の晩、京子さんは出来上がったばかりの開玄堂をかなり遅い時間にふらりと訪れました。開玄堂と呼ぶのは適切ではないかもしれませんが、京子さんはこの店に「間」という名前を付けていました。お茶の間、客間の「ま」、人と人、時間と時間の「ま」や「はざま」、何かの「あいだ(愛だ)」、好きなように読んでもらえたらと話していました。お店の名前の話題は、前の年の春に京子さんが勝さんと付き合い始めた頃から、二人の間で何度も話されてきました。「間」という名前が候補に上がったのは、この年の夏、二人で東京に旅行して、秋から一緒に暮らす森川のマンションの家具を選んだり、翌年には開店する予定だった店の椅子やテーブル、食器や調理器具などの備品を選んだりしていた時のことです。「間」という名前がいいと思う、という京子さんに、勝さんは最初は「読み方が分からない」と乗り気でない様子でしたが、東京のインテリア業者やコンサルタントも良い名前だと褒めるので、最後は「まあ、少なくとも『間』抜けではないか」と折れたような具合でした。

十一月の半ばには、京子さんが京都の建築家と時間をかけてデザインした建物が出来上がりました。静川沿いの桜並木に面したテラス席を左に見ながら、その脇の緩いスロープを上がったところに店の入口があり、大きめのガラスの扉を開けると、L字型のカウンターと、その奥にシンプルな厨房があります。入って左手のテーブル席とテラスの間は大きなガラスの折り畳める掃き出し窓で仕切られていて、窓から奥に向かって緩やかに下がっていく天井には床と同じオーク材が貼られています。壁には白い漆喰が塗られ、北向きですが明るい雰囲気のお店です。二階にはゆくゆくは京子さんが暮らしていくようにと独立した住宅も作られました。勝さんの発案で親しい人たち五、六人を呼んでささやかなお披露目のパーティーが催されたとき、集まった人たちは完成予想のインテリアパースを見ながら、「家具や照明が来たら、もっと素敵になるね」、「桜の季節が待

ち遠しい」と口々にお店を褒めていました。

建物が出来上がるまでの間も、建物が出来上がってから、京子さんは何度も店に足を運んでいましたが、あれほど夜遅い時間に来たのはあの日の晩が初めてでした。勝さんは大浜の社長仲間と一緒に一週間のドバイ旅行に出かけたばかりで不在でしたし、寒さを押してマンションのベランダに出てみたところ、満月の冴えた光に誘われて、店まで散歩に出掛けてみたくなつたのかもしれない。ジーンズにざっくりとしたグレーのタートルネック・セーターを着て、ダウンのコートを羽織り、栓をした飲みかけのワインボトルとSTEMのないワイングラスを大き目のトートバッグに入れて、京子さんは静川沿いの道を速足で歩いてきました。店にはまだ椅子やテーブルが届いておらず、ガラシとした室内にはお披露目パーティーの時に使ったキャンプ用の簡単なスチールのテーブルとスツールが四、五脚あるだけでした。十一時を過ぎた頃に店に着いた京子さんは、窓の方を向いてスツールに腰かけると、明かりも空調もつけずに、コートを着たままで家から持ってきたワインを飲み始めました。店の中から外を見ると、すっかり葉を落とした桜並木の枝ぶりが街灯と月明りに照らされていました。ゆっくりと一杯目のワインを開けて、二杯目のワインをグラスに注いだ時に、液面に細かい小波が立ち始めました。

結局、京子さんはその夜一睡もせず、周囲が明るくなるまで店を出ませんでした。二杯目のワインには手を付けず、たまに店の中を少し歩き回って暖を取り、床に腰を下ろし、立ち上がり、窓から外を眺め、スツールに戻って座り、そうしているうちに静かに夜が明けて、朝の光の中でヒヨドリが鳴き始めた頃、京子さんは昂った神経に疲れた様子で静川沿いの道を歩いて帰っていききました。

その日の夕方、夕闇が濃くなるころに、京子さんは紺色のアウディに油絵の道具を積み込んで店にやって来ました。車から画材を下ろして店に運び込み、裸電球の明かりを点けてイーゼルを立て、三枚のキャンバスに順番に下塗りを施しました。そうしている間も、その後もずっと夜が明けてくるまで、京子さんはキャンバスに何を描くか考えている様子でしたが、結局この晩は一つのキャンバスに赤と黒を混ぜ合わせた幾つかの色を乗せただけで、殆ど絵筆を握ることもなく、辺りがすっかり明るくなってから帰って行きました。

その翌日も日が暮れてから店にやって来た京子さんは、昨日のキャンバスに今度は暗い色調の青やグレーを分厚く重ねて塗り始めました。残りの二枚にも、濁った黒や、鉄、鋼、鉛といった重たく冷たい色をとどころに置いていききましたが、午前二時を過ぎたころに突然絵筆を置いて、放心したように立ち尽くし、それから長いこと静かに泣いていました。

絵を描き始めて三日目の夜、京子さんは家からパステルと大判の色画用紙を持って来て、一心不乱にパステル画を描き始めました。画面の左下から描き始め、細部が段々と広がっていくような描き方でした。しばらく描いて、しばらく眺めて、描き足して描き

拵げて、神経を張り詰めたままで朝まで休みなく描き続けて、表が明るくなってきた頃に一枚の絵を仕上げました。窓から入る外の光で出来上がりを確認していた京子さんは、さすがに疲れた様子でしたが、さっぱりとした表情をしていました。

京子さんは、仕上げた絵をテーブルの上に置くと、室内を片付け、裏の駐車場のアウディに描きかけのキャンバスと画材を積み込み、最後に店の入り口に掛けてあった「間」と浮き彫りにした小さくて控え目な木の看板を外すと、これもアウディに積み込んで、森川の郊外にあるごみ処理センターに向かつて行きました。

京子さんが森川を離れたのは、絵を描き上げた日の夕方です。この日は良く晴れた寒い日で、京子さんは、勝さんと一年余り一緒に暮らした家を一日かけて丁寧に掃除しました。京子さんのものは粗方処分してしまい、旅行鞆一つに荷物をまとめて、ちょうど森川湾に沈む夕日が水平線近くの空と海をきれいな茜色に染め上げる時刻に、その美しい景色をもう一度ベランダに出て眺めてから、静かに家を出て行きました。何の書き置きも残さず、誰にも何も告げず、森川駅から一人で列車に乗り込み、二度とこの街に戻ることはありませんでした。

開玄堂を開店したとき、宙さんは、置き去りにされていた京子さんの絵を額に入れて、店に来る誰もが目にする場所に飾りました。

宙さんは、京子さんとは数えるほどしか会ったことがなく、この絵以外には京子さんが描いた絵を見たこともありませんでしたが、この絵が傑作と言って良い絵であることは分かりましたし、開店してから一年半が過ぎる頃には、京子さんがこの絵を描いた理由や、この場所に絵を残していった理由についても、いろいろと思いを巡らせることになりました。

宙さんは、お客さんがいない手の空いた時間や、店を閉めた後に、京子さんの絵を眺めていることがあります。記憶の中から美しい色と光を取り出して、微かな露光を何層も重ね合わせたようにも見えるその絵を、正面から向き合っつと見詰めていたり、カウンター椅子の腰かけて斜め下からぼんやりと見上げていたり。そんなときの宙さんは、いつもと同じように穏やかな表情で寛いでいるようにも見えますが、ふっとり疎遠になってしまった昔の友人を思い出しているような、そんな少し寂しそうな様子にも見えます。

ペンギンやアザラシはお気楽だよなあ

寝て、起きて、食べて、泳いで、また食べて

煩惱も、見栄も虚栄も、懊悩も、エゴも、不安も、焦燥もない

何にも考えないで、毎日平穩に暮らしているんだろなあ

本屋になる、と、言わなければと思いつつ、何度も言えたはずなのに、半日こうして
過ごしても、結局未だ言い出せず、か

水族館を出た時は、開玄堂が見えるまでには絶対に話そうと思っていたのに、あと二、
三〇〇メートルも歩けば開玄堂に着いてしまう

本当は、ランチの時に話していたはずだった。

「その大塚さんっていう人と、先週の説明会が終わってから飲み会に行っているいろいろ話
したんだけど、中島電機の法務部長なんだって。肩書がちよっとエリートっぽいし、実
際そうなんだろうけど、全然偉そうじゃなくて、しかもかなりの読書家なんだよね。和
田書店の人と話していても、全然負けてない感じで、何か打ち解けててね。昔からいる
人みたいなんだよね。その大塚さんが、和田会長から相続した和田書店の株の一部を持
株会に売って、和田書店で利益が出たら、持株会を通じて従業員にも還元したいってい
う話しだったんだけど、すごく真つ当な話だと思わない。さくら書店の手前、従業員の
給料を高くすることは難しいけれど、利益が出たら配当できるから、だんだん持株会の
比率を高くして、会社が儲かったら社員も潤うようにしたいって。世の中の格差問題と
か、資本と労働の利益配分とか、ピケティみたいな大きな話もありたりして、青臭い
話しなんだけど、和田書店が目指したい方向とか、いろんな人の本気が見えて、久しぶ
りにちよつと感動した」

そんなふうに話し始めて、その後の展開もぼつちり考えてあったし、途中で邪魔が入
らないように、鯛飯定食が出て来たタイミングで話しを切り出すこともできた。なんだ
けれど、優子は「ふうん」とか言いながら、黙ってお碗を啜って、鯛飯を食べていて、
全然関心ない素振りだから気持ちが挫ける。

それでも頑張って、「自分は、ほら、高一の頃からバイトしてきたから、三年以上の勤
務歴があるっていうことで、持株会に出資できるよって言われてて。店長の佐々木さん
とか、『健ちゃんも、ここはドドンと十万くらい出資しなよ。何ならお金貸すよ』とか言
ってくれて」と気持ち奮い立たせて話しを続けても、「面白そうじゃない」とか「健
はどうするの」とか、話しを進める気配が一ミリもない。全くの、完全な、黙殺。
そして、「ねえ、太郎がいるところって、図書館から近いの」、といきなりの話題転換に
遭遇して完全に気持ちが挫けてしまった。

本屋は給料安いからなあ。出世する見込みもないし。

自分だって、高一でバイトを始めた頃は、本屋になるつもりは全くなかった。本が好
きで、本屋でバイトしてみたいとは思ったけど、成績だって、家が貧乏でなければ東京
の大学に行けるくらい良かったし、サッカー部で二年からレギュラーだったし、ルック

スもまあまあで人気もあったし、もっとこうキラキラした未来があると思ってた。大浜大に行くことになった後も、地元で就職するなら銀行とか県庁とか固いところに就職するんだろうって思った。親は今でも固くそう信じているだろうし、優子も、親も公務員だし、県庁か市役所に勤めるつもりで勉強しているから、自分も公務員になったら安心なんだろうなあと思う。なろうと思うって本気になれば、県庁だって何とかなるだろうし、普通に考えたらそっちだろうと思う。

でも、やっぱりいいんだよなあ、和田書店。この人たちとこの仕事がしてみたいって思える。先行き大変で、見通しが厳しいことも分かっているんだけど、自分だからできることがありそうだし、実現させたいアイデアもいくつかある。伊藤社長も、一緒にやっついてこうって言うってくれるし、なんか、意気に感じるんだよなあ、今度の持株会の話しも。

だから、優子にも、本屋になるって言おうと思うんだけど、将来結婚するとしても、稼ぎは少ないし、公務員より忙しくて休みも少ないだろうし、これで優子と別れることになるかもしれないと思ったりもして、そんなこんなで話しを切り出すハードルが高い。だから、十分にプランを練って、今日こそは話す、って思っていたんだけどなあ。

結局ランチの時には言い出せず、森川図書館で映画を観てから、森川城公園で太郎に会って、水族館を見て回った間も、切り出そうと思えば切り出せたのかもしれないけど、話すタイミングを引き寄せられなかった。やっぱり、ランチの時に最後まで話しを続けられなかったのが敗因だよなあ。一度躓くと、もう一度始めるのは最初るときよりも絶対に難しい。

開玄堂の前まで来てしまった。

水族館を出てからお互いに口数が少なくなっていて、開玄堂に立ち寄るような雰囲気じゃない。ガラスの窓越しに店の中を見ると、宙さんがカウンターのお客さんと何か話している。日が暮れてきていて、店の中の方が明るいから、カウンターの奥で領いている宙さんの顔が良く見える。何を話しているのか、楽しそうな様子だ。

今朝、優子と話していた時も、宙さんはあんな感じだった。店に入って、宙さんに優子を紹介して、優子が挨拶すると、宙さんは「山本です。よろしく」といつもの低めの声で言っ、いつもの笑顔だった。優子が座ったのは、あのお客さんが座っている席の左隣の席で、自分はその左隣り。

優子は、どちらかという口数が少ない方だけど、今日は宙さんと長いこと話していた。大浜で生まれ育ったこと、自分と同じ大浜大学の三年生で、半世紀近く前に宙さんが部長だった写真部に入っていること、自分とは大浜高校の同級生で、大学に入ってから付き合うようになったこと、そういった良くある話から始まって、今日はお昼を食べてから、森川図書館の上映会で「ローラ」を見る予定だと言うと、ジャック・ドウミの映画の話しや、アニエス・ヴァルダの話しをしていた。自分は、ジャック・ドウミの映画は好きだけど、アニエス・ヴァルダのことは良く知らないし、優子が宙さんと話しているのが嬉しかったから、途中で席を立てて奥の古本を眺めに行った。あの調子だから、きつと映画や写真の話しを続けていたんだろうと思う。

開玄堂の本棚は面白くて、多分二十分近く本棚にいたと思うけど、席に戻って来たとき、優子はまだ宙さんと話していた。今日はバイトの高橋さんが来ていたから、宙さんもそんなに忙しくないみたいだった。席に戻ったところで、宙さんが「健ちゃん、今度は二人で飲みに来なよ」って誘ってくれた。「二人とも二十歳で、お酒は苦手じゃないって聞いたから。遅れ馳せながら成人祝いということ、とっておきの初々しくてチャームングな赤ワインがあるから、ご馳走するよ」って言ってくれた。

優子が「宙さんは、二十歳の頃はどんな大学生だったんですか」と聞くと、「そうねえ」と言って少し考えてから、二十歳の頃、付き合っていたわけではないけれど、同じ歳の女の子と太郎に会いに行ったことがあるという話をしてくれた。素敵な女性で、もしかしたら宙さんに好意を持ってくれていたのかもしれないけれど、宙さんは鈍感で、付き合い合うことにはならなかったし、その後も女性とは縁がなくて、結局独身のままで過ごすことになった、そういう話だった。

「またそのうち機会が巡って来るだろうって思っているうちに、この歳になっちゃってね。でも、人生振り返ってみると、何にせよ、本当のチャンスに出会えたのは十年に一度くらいだったような気がするよ。だから、チャンスが来たら、しっかり掴まないと。私だって、この歳になったって、まだチャンスが来たら諦めないからね」そう言って笑っていた。

「和田書店に就職しようと思って」

開玄堂を通り過ぎたところで、独り言のように口に出してしまってから、初めて隣りにいる優子が聞いていることに気が付いて、息が止まった。突然動悸を感じて、脈拍が速い。どう話しを続けようか、地面に視線を落として歩きながら慌てて考えても、ホワイトアウトで何も思い付かない。

「いいと思う。応援するから、頑張ろうね」

思わず優子の顔を見た。優子がこつちを見て笑った。何だか分からないくらい嬉しくて、胸がきょうと締め付けられる。涙まで出てきそうになって、ちよつと恥ずかしくて、訳も分からず優子をしっかり抱き寄せる。優子の身体が柔らかい。夏の夕暮れの匂いに交じって、微かにシャンプーの匂いがする。目を閉じて、ゆっくり息を吸い込んで、今の幸せを全身で味わう。ちよつと気持ちが悪くなり落ちてきて、ゆっくり目を開けると、静川の川面に夕暮れの光がぼんやりと滲んでいて、二、三度瞬きをしてから目を上げると、オレンジ色の空がだんだん暗くなっていくあたりに半透明の半月が浮かんでいて、その月が、笑っているように見えた。

瞼を閉じたままふつと目を覚ました時、ふみさんは暗い川の中を川下へと流されていきました。息ができずに身悶えした記憶がぼんやりとありましたが、苦しくはありません。二月の川の氷で氷のように冷たくなった身体は、川底の岩や護岸に当たりながら流されてゆくばかりで、動かすこともできず、痛みも感じません。どうして水の中にいるのか、思い出せませんが、夜遅くに開玄堂を訪ねてきた男がいきなり襲い掛かってきたこと、逃げようとして倒されて、どこかに強く頭を打ちつけたことを思い出します。あのときに自分は死んだのか、あるいはまだ私は生きていて、これから死んでいくのか、いずれにしても、もう元の暮らしに戻ることはできないだろう、そう分かったとき、朗の顔が、小さな手が、身体の重さ、匂い、泣き声、全身で喜びを表す姿が一気に思い出されて、胸が締め付けられます。朗と生きて、私が朗を育てていくはずだったのに、ごめんささい、朗を独りぼっちで残していくことになってしまった。神様がいるなら、あの子に叶う限りの愛情と幸運を与えてあげてほしい。そのためなら、どんな犠牲や苦労も厭わなから。お願いします。お願いします。お願いします。再び遠ざかっていく意識の中で、ふみさんは一心に祈り続け、やがてその意識や祈りは大きな流れの中に溶けて消えていきました。

ふみさんの遺体は静川と森川が交わるところで翌朝地元漁師に発見されました。漁師の手で戸板に乗せられて大塚家の屋敷に運び込まれた遺体は、近所の女性の手できれいに汚れを拭き取られて、布団に寝かされました。ふみさんは亡くなくても美しく、穏やかな顔立ちでした。取り乱してふみさんに縋りつく千代さんを周りの人たちが何とか落ち着かせて、お医者さん呼び、職場にいた勝さんに連絡を取り、そうして大人達が慌ただしく動き回っている間、まだ二歳にもならない朗さんは何も分からずに屋敷の庭で遊んでいました。良く晴れた寒い日で、高い空のところどころに薄く綿を梳いたような雲が浮かんでいました。

勝さんが屋敷に着いたのはお昼を過ぎた頃でした。お医者さんよりも大分遅れてやってきた警察官は、簡単にふみさんの遺体を見分けたあとは、中庭の片隅に固まって所在なさげに煙草を吸ったりしていました。戻ってきた勝さんを相手にひと通りの質問をすると、それ以上は何をするでもなく、早々に帰って行ってしまいました。ふみさんは誰かに恨まれるような人ではなく、着衣の乱れも、物を盗られた様子もなく、敢えて自殺と判断する根拠もないということで、数日後には、この件は誤って川に落ちて溺れた水難事故として処理されることになりました。誰も、特に勝さんは、警察に調べられることを望んでいませんでしたし、警察も、水難事故として処理できる案件を殊更に調べたいとは思っていませんでした。

ふみさんの遺体と向き合ったとき、勝さんは自分でも薄情だと思っただけで、涙も流れませんでした。周囲から冷たい人間だと詰られるだろうと多少の後ろめたさは感じましたが、仕方がない、今更取り繕ったところで名ばかりの夫婦だったことを隠せるわけでもないし、自分が殺したわけではないのだから、疚しさを感じる必要はない、そん

なことを気に掛けるよりも、この機会を逃さずに、この家の財産をできる限り自分の手に入れる方法を見付けないと、そんなことを淡々と考えていました。

通夜や葬儀の準備で慌ただしく過ぎたその日の夜、勝さんは朗さんと同じ部屋で寝ることになりました。近所の人が朗さんを別棟の奥の部屋に寝かしつけ、隣に大人用の布団を敷いていました。普段はふみさんが朗さんの隣で寝て、大浜で暮らしている勝さんは、偶に森川に帰ってきてても別の部屋で寝ていましたから、勝さんが朗さんと同じ部屋で寝ることはありませんでした。けれども、千代さんは先に自分の部屋で休んでしまい、まだ幼い朗さんを一人で寝かすこともできず、結局この夜は勝さんが朗さんの隣で寝て面倒を見ざるを得なかったのです。

朗さんを起こさないように隣の部屋の明かりを豆電球にしてから襖を開けると、朗さんは分厚い掛け布団の下でぐっすりと眠っていました。布団に入る前に膝を付いて朗さんの寝顔を覗き込んだとき、ふみさんの面影が感じられて、勝さんは初めてふみさんのことを不憫に感じました。「好いた男や可愛い子供がいたのにな」声には出さずに心の中でそう呟くと、思いがけず息が詰まり、涙が涌いてきました。

前の年の秋、朗さんは屋敷の母屋の屋根裏に上がる階段から転がり落ちて、頭の骨を折る大怪我をしました。母屋は明治の中頃に建てられた立派な建物でしたが、屋根裏に上がる階段は細くて急な造りで、子供が上らないように気を付けていたのですが、活発な朗さんは大人が目を離れた隙に階段を一番上まで登り、その先の扉を開けられずに立ち往生したところで転がり落ちてしまったようでした。その日は日曜日で、珍しく勝さんも森川の家にいましたので、ふみさんと二人で頭から血を流した朗さんを車で市立病院に連れて行き、診察をしてもらいました。医者は、手術が必要になるかもしれないと話していたのですが、朗さんは二日ほど入院した後で、手術はせずに自宅に戻れることになりました。

朗さんの怪我は幸い大事には至らなかったのですが、次の土曜日の午後、数日前に医者から連絡を受けていた勝さんは再び市立病院を訪れました。

「大塚さん、お忙しいところご足労頂きまして、すみません」四十過ぎの医師は、診察室の椅子を回して勝さんの方に向き直りながら、やや早口で話し始めました。日差しが強い暑い日で、開け放たれた診察室の窓から吹き込む風でカーテンが揺れていました。

「朗の怪我は、どこか悪いところがあるんですか」勝さんも、やや早口で尋ねました。

「いえ、朗君は大丈夫です。昨日もお母さんとお見えになられて診察しましたが、ご心配はいらないと思います」

「そうですか」

「ただ、お伝えし難いことなのですが、朗君の血液型を調べたところO型でした。輸血の可能性もあったので、大塚さんと奥さんの血液型も調べたんですが、大塚さんはAB型、奥さんはA型でした。お二人のお子さんはA型かB型かAB型になるはずなのですが、朗君がO型ということは、朗君の父親は大塚さんではないということになります。お伝えするべきか迷ったんですが、いずれは分かることでしょうし、大塚さんにお伝え

しておくべきだろうと思ひまして、ご連絡しました」

「そうですか」勝さんは揺れるカーテンの方を一瞬見てから、医者の方を向き直って言葉が続けました。「有難うございます。お話しを聞くことができて、良かったと思ひます。まあ、血は繋がっていなくても、朗は息子ですから、怪我のことは、よろしくお願ひ致します」

その日、勝さんは市立病院を出てから中央町のパチンコ屋に立ち寄り、二時間余りで千円を使い切ってから、森川の家まで遠回りをして三〇分ほどの道程を歩いて帰りました。家に帰ってから風呂に入り、ビールを飲んでから夕食を取り、ふみさんが朗さんを小さな布団に寝かしつけ、千代さんが自室に下がったところで、勝さんはふみさんにこの日のことを話しました。病院から職場に連絡があったので医者に会いに行ったこと、血液型について話しを聞いたこと、朗さんの父親は勝さんではないと言われたこと。

勝さんにとって、ふみさんが他の男の子供を産んだことは、意外ではあっても、ショックを受けるようなことではありませんでした。勝さんは、ふみさんと結婚する前も、結婚してからも、大浜の女性との付き合いを続けていましたし、ふみさんも、結婚してから半年が過ぎる頃には他の女性の存在に気が付いていました。勝さんにとって、ふみさんは美しい地主の娘で、結婚相手としては好都合でしたが、知的で取り澄ました女性よりも、熟して崩れ落ちる一步手前の女の方が余程魅力があると思ひていましたし、周りにもそう話して憚りませんでした。ふみさんが朗さんを身籠った頃には、二人の間は冷え切っていて、勝さんがふみさんと寢床を共にすることは殆どなくなっていました。ですから、朗さんが自分の子ではないと知った時、勝さんが最初に感じたことは、痛みでも怒りでもなく、あの女にもそんな情熱があつたのか、という軽い驚きでした。それから、これで自分は今まで以上に自由にできるし、弱みを握られたふみさんが卑屈さすら見せるのではないかと想像していたのです。

けれども勝さんの期待は裏切られました。朗さんが勝さんの子ではないと聞いたふみさんの目に最初に現れたのは、驚きでも、疚しさでも、後悔でもなく、微かな、しかし率直で力強い喜びの光でした。次第に潤んでくる目と上気したふみさんの顔を見て、勝さんはとても美しいと思ひ、激しい嫉妬と怒りを感じたのです。

ふみさんの葬儀の日、勝さんは参列者の中に朗さんの父親がいるのではないかと目を探しましたが、それらしい男の姿を見付けることはできませんでした。勝さんが千代さんに、朗さんが自分の子ではないことを話し、慰謝料兼口止料としてふみさん名義の全ての財産を相続した上で大塚家と離縁したのは、ふみさんが亡くなってから半年後のことでした。

宙さんを見送りに朗さんやあずさと一緒に開玄堂から表に出ると、静かに光る大きな満月が暗い夜空に浮かんでいた。川沿いの遊歩道から、橋を渡って家に帰っていく宙さんを見えなくなるまで見送ってから、しばらく一人になりたくて、二人が開玄堂に戻ってから川縁の手すりに凭れて月を見上げている。

開玄堂に着いたのは十一時半頃だったから、あれからまだ一時間しか経っていない。タクシーを下りて開玄堂に入ると、宙さんが電気を点けて、私たちを奥のテーブルに案内してくれた。あずさがお手洗いの場所を訊いて、使わせてもらっていた。今夜は開玄堂の二階に泊まると聞いていたので、もう時間も遅いし、そのまま二階に上がるのかと思っただけで、宙さんが、水を注いだコップを四つ、トレイに乗せてテーブルに持ってきた。

「今夜は満月だから、もう少しすると、ちよつと変わったことが起きるはずなんです。だから、ちよつと座りませんか。心配はいりませんから。ご主人も、先月経験されていますし、奥さんやあずささんもどうですか」宙さんがそう言うので朗さんを見ただけで、朗さんは何も言わなかった。

「変わったことって、どんなことですか」というあずさの質問に、宙さんは「なかなか説明が難しいので、経験して頂くしかないと思っっているんです。人によって感じ方も感じることと違うでしょうし」と答えていた。

そんな話をしている間に、それが始まった。コップの水が細かく震えだして、しばらくすると、部屋の中を風が通り過ぎていった。その風が、私の身体の中も通り過ぎていく。風というよりも、水。いつの間にか、音も立てずに、静かに部屋を満たしていた透明でゆつたりとした水の中に私がいて、その水が、静かにゆつくりと流れている。どこから流れて来て、どこかへと流れていく水。その水が、偶々出会った私の身体の中を通り過ぎて、私の細胞をざわつかせる。その感覚は、とても言葉にできない。ざわざわと揺れ動く細胞の壁を越えて、たくさんの粒子が飛び出して行って、その粒子が、流れていく水と触れ合って、入り混じって、ぶつかり合って、その反響が私のひとつひとつの細胞に帰ってくる。私の全身の細胞が感じているのは、敢えて言葉にするなら、裸の記憶のようなもの。何十年も、何百年も、もしかすると何千、何万、何億年も降り積もった生きものの記憶が、透明でゆつたりとした水の中に溶けていて、その水に浸ると、私に反応した数えきれないほどの記憶が、一瞬のうちに眩い速さで瞬いて、聴き取れないものを私に伝えながら次々と通り過ぎていく。

最初は怖かった。自分が何を感じているのか分からなくて、スイッチを切って、身体の中に閉じ籠って、嵐が通り過ぎるのを待ちたいと思った。でも、少しすると、色彩や匂い、音色や手触り、微かな喜びや哀しみといった感情、いくつかの短い記憶を鮮明にだったり、曖昧にだったり、感じられるようになってきた。全てが分かるわけではない。夥しいものが流れていく中で、いくらかでも感じ取ることができるのは、ほんの僅かな

一部だけ。どれも淡々とした記憶だった。見たことのない風景や、誰かの話し声、雨の音や匂い、お祭りの雑踏、虫の鳴き声、川の水の冷たさ。気がつくと最初の怖さは消えていて、流れの中に自分が馴染んでいく感覚が心地良かった。

そのうちに、テーブルの上に置いた自分の左手が、この部屋の中で環を描いている流れに包まれて、朗さんが育った昔の開玄堂が現れた。古い本の匂い。太い木の柱と梁。本棚の向こう側の扉の外に桜並木があつて、昔の自転車に乗った男の人が通り過ぎていく。幼い子に乳をあげている。何通かの手紙。儂い希望。宙さんの、高校生だった頃の宙さんの顔。手を握られる感触、蝉の声、聞き取れない呟き、蔵の扉、夕暮れの光と影、眠れない夜。哀しさと諦め。現実のように鮮やかな煌めく記憶が次々と私の中に入ってきては消えていく。何を確かめる必要もなく、その全てが、この場所で時を過ごして、半世紀近くも前に亡くなった朗さんのお母さんの記憶だと分かる。

川縁の手すりに凭れて、丸くて大きな満月を見上げながら、あの時、朗さんは私の隣で何を感じていたんだろうと思う。

お母さんの記憶に出会ってから、朗さんのことが気になって、いつの間にか閉じていた目を開けて朗さんを見た。朗さんは目を閉じて座っていた。同じテーブルを囲んでいる宙さんもあずさも、目を閉じて座っていた。宙さんは、テーブルの上に重ねた両手を置いて、穏やかに微笑んでいた。そこには高校生だった頃の宙さんの面影や表情が確かにあつて、お母さんに恋をしていた頃と変わらない純粋な気持ちが出ているように、嬉しかった。宙さんも、お母さんの記憶の環に触れて、お母さんに会えることを心から飲んでいて、その歓びが環を通じて私にも伝わってくるのが感じられた。でも、朗さんはあの環に触れていたのか、分からなかった。あの時間が過ぎ去って、全てが元に戻ったとき、朗さんはお母さんに会えなかったんだ、何となくそう感じた。先月、朗さんが開玄堂に来た時も、お母さんには会えなかったんだろうと思う。

朗さんも、あの時間に何か特別なことを感じていたはず。先月、大浜から帰った後で、相続をすることに前向きになったのも、あの時間を経験したことが大きな理由だったのだろうと思う。でも、朗さんは、この場所にお母さんがいることを知らない。

そんなことを考えながら静川に映る満月や街灯の明かりを眺めていると、ふっとあずさが隣に来て手すりに凭れかかった。

「きれいな月だね」と言うあずさと並んで夜空を見上げる。

「お祖母ちゃんに会えた」とあずさが訊いてきた。

「うん。あずさも会えたんだ」

「会えた。とっても素敵な人だった」

「そうね」

「お祖父ちゃんも、素敵な人だね」

「あずさもそう思う」と訊くと、あずさは夜空を見上げたまま、「そう思う」と答えた。

宙さん。たぶん朗さんの本当のお父さん。

今日、初めて顔をあわせたとき、宙さんは「初めまして。山本です」と挨拶した。それまでに聞いていた朗さんの話しから、学者か芸術家のような、少し尖った人をイメージしていたのに、実際の宙さんはがっしりした体格で、素朴な笑顔が似合っていて、何となく樵夫のようなイメージの人だった。白髪交じりの短く刈り込んだ髪、細いフレームの眼鏡、ポロシャツにジーンズ。「下の名前は、宇宙の『宙』と書いて『ひろし』と読むのですが、皆さん『ちゅうさん』と呼んで下さるので、よろしければ『ちゅうさん』と呼んでください」、それだけの簡単な自己紹介だった。

あれからまだ数時間しか経っていないのに、昔から知っている人のような気がする。夕食の時に、伊藤さんや佐々木さん、それにあの気さくな小料理屋の女将さんも、宙さんのことをいろいろ話してくれた。それに、今晚、開玄堂である時間を一緒に過ごすことができた。

宙さんの人生は、どんな人生だったんだろうと思う。

宙さんが独身で暮らしてきた理由は分からないけれど、お母さんのことは、ずっと大切に想い続けてきたはず。それなのに、お母さんにとっても、大塚の家にとっても許し難い人だったはずの和田さんの会社で何十年も働き続けて、他の仕事もあつたはずなのに、どうして和田書店で、それも、人生を捧げるような情熱を込めて働き続けたんだろう。

「お母さん、そろそろ戻らない」隣のあずさから声を掛けられる。「もう十二時半だし、お父さんも二階に上がって寝たいかもしれない」

「そうね」と言っつて、もう一度満月を見上げる。

あの時間が去っていったとき、お母さんの記憶もだんだんと薄れていった。でも、また次の満月の夜になると、あの流れが開玄堂を満たして、お母さんの環が現れるはず。そうして、宙さんは、お母さんに会いに来る。

朗さんも、お母さんに会えるかな。

そう、いつかきつと、お母さんに会ってもらいたい。必ず会えるはず。そうして、お母さんの記憶に包まれて、物心がついてからずっと触れることができなかった母親の愛情を、全身の細胞で思いっきり感じてもらいたい。お母さんのお腹の中や、生まれたての赤ん坊の頃を感じていたかもしれない、そんな幸せな喜びを、私とも、あずさとも、家族で分かち合うことができたなら、本当に素敵なことだと思う。

勝さんが朝起きてからいつものようにパソコンを開くと、一通の見慣れないアドレスからメールが来ていました。

Dear Masaru

It has been seven years since Kyoko left your place.

When I met her seven years ago, she asked me to send this email to you today. She also asked me to convey her apologies to you.

I do not know where she is, but I believe she is doing well somewhere in the world.

Here is her message.

Could you come to the cafe at 23:30 today, December 7, 2014?

Someone would be waiting for you.

I hope you would understand her message.

Best wishes,

A friend of Kyoko

勝さんは、少し考えてから日本語で返信を書いて送りましたが、直ぐに宛先のメールアドレスが存在しないというメッセージが戻ってきました。

その夜、勝さんが開玄堂に着いたとき、開玄堂の電気は消えていて、宙さんがテーブルに一人で座っていました。勝さんがガラスのドアを叩くと、宙さんが驚いた様子で迎えに出てきました。

「どうしたんですか。こんな遅くに」と問いかける宙さんに、「山本が俺を呼んだんじゃないのか」と話しかけながら、勝さんは店の中に入り、コートも脱がずに宙さんが座っていたテーブルに腰を下ろしました。

「今朝、こんなメールが来たんだ」と言って、勝さんはテーブルの上にメールが印刷された紙を置きました。「遅い時間に押しかけて悪いな」

宙さんは勝さんの隣の席に座ってしばらくメールを眺めていてから聞きました。「これ、京子さんが送ったメールですかね」

「そうだろう。京子以外には、思い当たらない」
「そうですか」そう言うってから宙さんは立ち上がって「ウイスキーでも持ってきてますね」とカウンターに向かいました。宙さんがウイスキーを用意している間、勝さんは手持ち無沙汰な様子で店の中を眺めていました。

しばらくして、宙さんがウイスキーのオンザロックとお水のグラスを二つずつトレイに乗せて運んできたとき、勝さんは壁に掛けてある写真を眺めていました。森川湾の夕

焼けの空にきれいな羊雲が並んでいる写真でした。

「会長は覚えていないかもしれませんが、京子さんがいなくなった後、この店に残されていた絵を頂いて、今でも入口のところの壁に飾ってあるんです。京子さんが描いた絵だと思えます。あの絵を見ると、京子さんは満月の夜にこの場所にいたのかもしれないって思うんです。店を開いて一年以上経ってから知ったんですが、この場所では、満月の夜に、ちよつと変わったことが起きます」

「何が起きるんだ」

「それは、ちよつと説明が難しいですし、会長が私と同じように感じるかどうか分かりません。ただ、今日は満月の夜で、もう少しするとそれが始まります。京子さんは、会長にも経験してもらいたいと思っただけでしょう」宙さんはウイスキーを一口飲んでから、話しを続けました。「正直なところ、私は、会長をお呼びしたいとは思っていませんでした。ですから、このことは今まで会長に話しませんでしたし、会長以外の誰にも話していません。京子さんがいなくなってから七年経ちましたが、その間、ここで満月の夜を過ごしたのは私だけです。私は、会長はこの場所に来ない方が良いだろうと思っていましたし、今もそう思っています。あと十分もすれば始まってしましますが」

「でも、京子は私を呼んだんだろう」

「それは、そうなのかもしれませんが、分かりません」

それが始まるまでに十分もかかりませんでした。グラスの液面に細波がたち、部屋の空気が入れ替わり、勝さんはその時、途轍もなく強烈なドラッグか何かかウイスキーに入っていたのではないかと、全身が冷たくなる恐怖を感じました。その後で最初に勝さんが感じたのは京子さんの気持ちでした。京子さん自身の気持ちというよりも、誰かが京子さんの気持ちを感じ取った記憶。愛情と怒り、疲れと悲しみ、怖れと躊躇い。何がそういう気持ちをもたらしたのか、何の説明もなく、音も、映像も、言葉もなく、ただ京子さんの気持ちが強いつまらぬ痛みを伴って感じられます。

それから、無数の鮮明な記憶の断片が一気に血管に注入されて、全身を駆け回る感覚が目眩がします。その中にいる勝さんの身近にいた人達、親兄弟、学生時代の友人、銀行の同僚や先輩、書店で働いていた人達。楽しさや嬉しさと、苦しみや憎しみ。思い出すことと、今初めて思い至ること。勝さんが投げ付けた鋭い言葉と風子さんが受けた心の傷、千代さんの勝さんへの激しい恨みと朗さんへの抑えられない嫌悪、ふみさんの希望、そして諦め。

膨大な量と鮮やかな細部に圧倒されながら、勝さんは、それでも冷静さを保とうとしていました。これはもうこの世にいない死者たちの記憶だ、自分と関わった人間だけではない、あらゆる死者たちの記憶の大きな流れが、この部屋に流れ込んできている、そう感じていました。

日付が変わる頃、それは潮が引くように去って行きました。

「歳をとってから、物事を知るのは辛い」しばらくしてから勝さんが口を開いたときには、オンザロックの氷が溶けて、テーブルの上に小さな水溜まりができていました。勝

さんはグラスを手を取って、ウイスキーを一口飲んでから続けました。「自分の悪人ぶりを見せつけられるのは、こう見えても応える」

宙さんは勝さんの隣で黙って勝さんを見詰めていました。

勝さんは、この場所に居た僅かな時間で、自分が随分と歳を取ったように感じていました。「少々疲れた」自分があの大きな流れに加わるのも、そう遠くないことだと分かりました。「自分にはもう時間もないし、気力も体力もない。どうにかしたくても、昔のこととはどうにもならない」

世間からそれなりに認められ、人から羨まれる成功を勝ち取ったと思っていたけれども、こうやって振り返ると、他所の道理を踏み躪って掠奪を重ねてきた人生ということになるか、そんなことを勝さんはぼんやりと考えていました。

自分が勝ったわけではない、自分は野蛮だったのだ。

朗さんがグラスを片付け、テーブルを拭こうと戻ってきたところで、勝さんが立ち上がりました。

「いろいろありがとう」勝さんは出口に向かってゆっくり歩いて行きました。

「ひとつ聞いていいか」勝さんが宙さんに尋ねました。

「ええ」

勝さんは、扉を開けて店を出たところで後ろを振り向いて、宙さんと向き合いました。勝さんからは、宙さんの後ろに京子さんの絵が見えたはずです。

「朗が自分の子供だっていうことは、いつ知った」

宙さんは、勝さんから目を逸らして桜並木の方に目をやりましたが、一瞬で向き直り、勝さんの目を真直ぐに見て話し始めました。

「ふみさんとは、高校三年の秋に、一度きりのことでした。でもその後しばらくして、ふみさんは、自分とはもう会わない方がいい、会いに来ないでもらいたいと言い始めて、自分も、大浜の大学の寮で暮らすことになって、ふみさんのことは忘れようと決めて、森川には帰らないようにしていました。だから、ふみさんが子供を生んだことも長いこと知りませんでしたし、大塚さんが自分の子供だとは全く思っていませんでした。大塚さんが高校生になって、よく店に来るようになった頃も、大塚さんは会長の息子さんだと周りから聞いていましたし、自分もそう思っていました。大塚さんが自分の子供かもしれないと思ったのは、この開玄堂を開いた年の翌年、二〇〇九年の秋で、初めて今日のような時間を過ごした時です」

「分かった。ありがとう」小さな声でそう言うと、勝さんは宙さんに背を向けて、店の前のスロープを下りて行きました。スロープが終わるところで立ち止まり、葉を落とした桜の木の梢越しに少しの間満月を見上げていてから、思い出したようにコートのポケットに両手を入れて、そのまま静川沿いの遊歩道をゆっくりとした足取りで歩いて行きました。

急がなくちゃいけないのに、上海飯店の樋口さんと話し込んでしまった。樋口さんは話しが長い。いい人だし、良く本を買いに来てくれるし、料理は安くて美味しいし、今日も飲み放題で一人三千五百円にしてくれているのでなかなか話しを切り上げられなかったけれど、もう一次会が終わってから二十分近く経っているし、九時を過ぎてしまった。急がないと。「今、上海飯店を出たところ。先に始めていてね」とラインする。一瞬タクシーを拾おうかと思ったものの、歩いても十五分、大した距離ではないから、駅の地下通路を抜けて「善」まで急いで歩くことにする。

連休の中日だけど、大塚駅の周りは結構人が多い。南口は街の裏側なのに、七、八年前に新しいビルが建って大型の家電量販店が入ってから、人の流れが随分変わった。そのビルの前で屯している若い人達の横を通り過ぎながら、今日の会を振り返る。良い会になったと思う。パートさんやバイトくんを含めて四十人も集まったのは、和田書店始まって以来のことじゃないか。どのテーブルも盛り上がっていたし、みんな楽しんでくれただろう。二次会も、店を閉めてから遅れて来る面子をあわせると社員は十六人全員が集まる。会長の葬儀のときよりも出席率が良い。

駅の方に渡る信号が赤に変わって、暫らく待たされる。通り過ぎていく車を眺めながら、あとで大塚さんにお礼を言わないとな、と思う。普通に考えれば、三歳年上の東大出のエリートがいきなり会社のオーナーになったら、世の中の不平等をぼやきたくもなるはずだけど、そういう気持ちにはならない。大塚さんはいいい人だと思う。ここ一か月、週末は必ず東京からやって来て、全てのお店を回って、パートさんやバイトくんまでほぼ全員と会って挨拶して、持株会の話もしてくれて。時間的にも、経済的にも、かなりの負担だったはずだけど、いつも和やかで親しみやすい。今日の会を最初に提案してくれたのも大塚さんだったし、大塚さんのお陰で確実に出席率が上がったと思う。

大塚さんは、和田書店の株主になることは全くの想定外で、今でも全てが手の込んだ冗談じゃないかと思ったりする、とか言っていたけど、それはある意味こちらと同じで、大塚さんがオーナーになるシナリオは全く考えていなかった。やっと信号が青に変わって、急いで交差点を渡り、地下通路への階段を下りる。三か月前までは、そのうちいつかはさくら書店の傘下に入ることになるだろうと皆が思っていたはずで、社長だって、会長の奥さんがオーナーになるよりは遥かにましだとか言っていて、さくら書店の傘下に入る準備を着々と進めていた。それなのに、突然、大塚さんというノーマーケットのダークホースがいきなり現れて、オーナーになってしまった上に、持株会まで作ることになるのは。この三か月間の激動をきちんと消化できているのか、冷静に考えてみようとする不安が湧いてくる。これから先、和田書店が赤字になって株の価値が下がったら、大塚さんにも社員にも迷惑がかかるし、人間関係までギクシャクするんじゃないか。心配事はもっとたくさんあるはずなのに、ノリと勢いで見えなくなっているんじゃないか。

「佐々木さん」いきなり声をかけられて、びっくりした。松本さんと奥さんだ。考えごとをしていて全く気が付かなかった。

「さっきまでお店にいたんですよ。今日はみんなで飲み会だって聞いたけど」
松本さんはお店のスタッフと仲が良い。本店は今日も営業しているので、残って働いている面子から聞いたのだろう。

「松本さん」と話しかける。「今日は、本店と、あと二店舗は夜まで営業しているんですが、残りの三つのお店は夕方からお休みを頂いていて、和田書店全体での懇親会だったんです。こんな会は初めてですけど、四十人も集まって、お陰様で良い会になりました」

「聞いたけど、会長が亡くなって、息子さんが株主になるんだって」

「ええ。会長と前の奥さんとの息子さんで、今は東京にいる方なんですけれど、ここ数か月は毎週のように大浜に来られていて、今日の懇親会にも来ています」

「店長もいろいろ大変だね。これから『善』で二次会でしょ。急いでいるのに、引き止めちゃってごめんね」松本さんはこっと笑い、さっと手を上げて挨拶してから、奥さんと一緒に南口の方へ歩いて行った。樋口さんと違って話しが短い。でも、話さないけど、持株会のことも、店で聞いて知っているだろう。さくら書店の子会社になるかもしれないっていうことも、耳ざとく聞いて知っていたし。松本さんは、三年前にリタイアして大浜に戻って来るまで、東京のコンサルティング会社で働いていたらしい。機会を見付けて和田書店の将来について相談してみたいと思う。勉強になりそうな気がする。

地下通路から階段を上がって大浜駅の北口に出ると、やはり南口よりもずっと人が多い。ロータリー脇の広場に設けられた大きな秋祭りの看板の前に、二、三十人ほどの人ばかりができていている。何をしているのか気になって少し近づいてみると、大学生くらいの二人組がギターを抱えて歌っている。あまり知られていない清志郎の名曲のカバーだった。投げ銭を受けるギターケースを広げて、秋祭りの企画でもないのに、看板の正面に陣取って歌っている。なかなか聴かせる。こういう若者がこの曲を歌ってくれるんだ、とちよつと嬉しくなって、しばらく聴いていたくなつたけれど、足を速めて「善」に向かう。

駅前の広場を抜けてビジネス街を歩いて行くと、何か月もシャッターが下ろされたままのビルも幾つかあって、また不安が頭を擡げてくる。そもそも本や雑誌が売れない上に、ネット販売にどんどん圧されて、ビッグデータやらAIやら規模と資金力が物を言う時代に、地方の書店が独立路線でやっていけるのか。和田会長は、いい加減で、身勝手、汚いところも多かったけれど、肝心なところではリアリストで勘が鋭い人だったから、これからの時代、和田書店が単独でやっていくのは難しいと見越してさくら書店の傘下に入る道を用意したんだろうと思っていた。確かに、投資で大失敗してさくら書店に支援してもらったわけだけれど、失敗を動物的な勘で利用するあたりも会長らしい。そんな会長がどうして大塚さんをオーナーにしたのか。これも野性の勘なのか。良く分からない。

確かに大塚さんは優秀そうだし、誠実で、信頼できる人だろうと思う。今日の挨拶も、高校生の頃に南風書店から多くのことを学んだ話しか、東京でも南風を感じると南風

書店を思い出すなんていう話しは、嬉しかったし、元気も出た。持株会の話しも、一体感が高まって、モチベーションが上がったと思う。自分も、和田書店が好きだし、持株会を作って独立路線でやっていけるのならそうしたい。でも、本当にそれで生き残っていけるのか。大塚さんはいい人だし、リーダーシップもあると思うけど、書店の現実が分かっていない初心なロマンチストなんじゃないか。

伊藤さんの本音はどうなんだろう。大塚さんが最初に挨拶に来たとき、伊藤さんは嬉しそうだっただ。同志を得たような、昂ぶった感じだった。やはり、さくら書店の傘下に入るより、独立路線を維持したいんだな、と思った。でも、伊藤さんはさくら書店との関係にも相当気を遣っている。持株会の話しが出た時も、渡辺先生が盛り上がっている横で、和田書店の経営や将来を考えると、さくら書店との関係を維持することが大事だと何度も言っていた。持株会を作ったとしても、いつかはさくら書店の傘下になることになるかもしれないし、その道は残しておきたいと思っっているんだろう。大塚さんも、斉藤会長やさくら書店の人達と何度か会っているようだし、さくら書店を大事にしている。

結局、社長も大塚さんも、この厳しい時代、和田書店がいつまで独立路線を続けられるのか分からないけれど、やれる間は頑張ってみよう、そういうことなのかもしれない。まあ、そうだろう。そう思うと、気持ちが少し楽になって、身体も軽くなったような気がする。

和田書店を維持できるのはあと三年かもしれないし、あと五年、あるいはあと十年、百年、千年続くかもしれないけど、仮に三年で終わるとしても、和田書店の良さを磨き続けていたら、店の仲間や、お客さんや、多くの人の思い出に和田書店の良さが残る。南風書店はもうないけれど、大塚さんは今でも南風書店を大事に思ってくれている。清志郎は死んだけれど、清志郎の歌は今日も元気に歌われていたじゃないか。いつか和田書店がなくなるとしても、和田書店の良さはどこかでしぶとく生き延びるはずだし、そこから何か新しい道が開けるかもしれない。

「店長、お先に始めちゃいました。急いで来て下さいね♪」と町田さんからラインが来て、現実に取り戻される。そうだ、町田さんも二次会に来るんだ。町田さんを含めてパートさんとバイトくんの準社員が四人、社員十六人と大塚さん家族三人をあわせて総勢二十三人。定員オーバーなのに無理を聞いてもらったんだから、着いたら大将とみゆきさんにお礼を言わないと。

そういえば、一次会で「和田書店に就職します宣言」をした健ちゃんが、愛する彼女を二次会に呼ぶって言うっていたけど、ほんとに来るのかな。来るなら席を用意しないと。明るい書店の未来を語って彼女を安心させる、とか言っていたのに、席もないんだとまじいだろう。まあ、遅参組が到着するまで、まだ時間があるか。

あの角を曲がって五十メートルも歩くと「善」に着く。よっしゃ、テンション上げて盛り上がっている。

バイトの予定も入っていないのに五時過ぎに南風書店に現れた宙さんは、買ったばかりの中古のニコンを肩から下げていました。「中村さん、お店の前で中村さんの写真を撮らせてもらえませんか」という宙さんに、清さんは「おおっ、ついに買ったんだね。頑張ったねえ」と声をかけ、奥にいる弘子さんに向かって「弘子、やまちゃんが写真を撮ってくれるっていうから、ちよつと綺麗にして来てよ」と呼びかけて、自分は身なりなど全く気にせずエプロン姿でさつきと店を出て行きました。宙さんがカメラに新しいフィルムを入れて表に出ると、弘子さんも「綺麗にしてって言ったって」と笑いながら表に出てきて、髪を整えてから清さんの横に並びます。宙さんがカメラを構え、ピントと露出を確認して最初のシャッターを切ると、清さんが「風子も入れて撮ってもらえないかな」と言って、レジにいた風子さんと呼んできました。家族三人の写真を何枚か撮ると、清さんは「やまちゃんも入った写真が欲しいな」と言い始め、道行く人を呼び止めて、宙さんも入った四人の写真を撮ってもらいました。左から、風子さん、弘子さん、清さん、宙さん。低くなった西日が斜め後ろから射していて、宙さんは真面目な顔をしています。清さんと弘子さんはにっこり笑っていて、風子さんも自然な笑顔です。翌日、大学の写真部の暗室でフィルムを現像した宙さんは、自分が撮った写真よりも、通りすがりの人が撮った写真の方が、中村さん家族の表情が格段に良いことに気が付いて、口惜しい思いをすることになります。

写真を撮り終えたところで、「珈琲でも飲んで行かないか」と清さんが宙さんを誘いました。清さんは南風書店の斜向かいにある喫茶店がお気に入り、毎日のように通っていました。

「お店は大丈夫ですか」

「今日は風子が手伝ってくれているから大丈夫」そう言って清さんは宙さんと連れ立って喫茶店に入り、窓際の席についてブレンドコーヒーを頼みました。

「カメラ、いつ買ったの。高かったでしょ。いくらしたの」

「四万円です。さつき、前田カメラで買いました」

「一年かけて貯めたお金を全部つぎ込んだんじゃない」

「そんな感じです」

「前のカメラは、どうしたの、売ったの」

「いえ、あのカメラは借りていたものなので」

「へえ、借りてたんだ。誰から借りたの」

「森川の開玄堂です。もう二年間以上も借りていて、返さないといけないと思っていたんですけど、これでやっと返せます」

「そうか。文蔵さんはカメラが好きだったからな。うちの家族も文蔵さんに何回も写真を撮ってもらってね。あそこなら何台もいいカメラがありそうだから、借りっ放しだっ
ていいのに」

「いえ、そういうわけにもいかないのです、週末に森川に帰って、返してきます」

「そうか。ふみさんは、元気にしているかな」

「大学の寮に入ってから、森川にはあんまり帰っていないくて。ふみさんにはずっと会っていません」

「そうなんだ。よろしく伝えておいてくれる」

「分かりました」

店員がコーヒーを持ってきて、清さんと二言三言取り留めもない話しをしてから戻っていきました。店内には小さな音で室内楽が流れていました。

「今日って何日だったっけ」唐突に清さんが聞きました。

「今日は、四月十七日です」

「やまちゃん、今日、仏滅だよ。知ってた」

「知りませんでしたよ。仏滅なんですか。じゃあ明日が大安」

「そう。明日が大安。そのカメラ、明日買った方が良かったんじゃないかって思っているでしょ」

「いや、まあ、そうですね」

「仏滅でいいんだよ」そう言って、清さんはゆっくりとコーヒーを飲みました。カップを置いてから「文蔵さんと自分が戦争中に知り合ったっていうことは話したよね」と話しを続けました。

「フィリピンにいたんだ。同じ部隊に秋山っていう男がいて、この男が仏滅が来るたびに気にするから、文蔵さんが秋山にこんな話しをしてね。『仏滅は、もともとは物が滅びると書いて、古いものが滅びて新しいものが生まれる日、新しいことが始まる日という意味だから、決して縁起は悪くない。自分は、仏滅の日に役所に辞表を出して故郷に帰ったけれど、新しい人生が始められて本当に良かったって思っている』って。秋山は、そんな話しをした仏滅の日は無事に過ごしたのに、翌日の大安の日に亡くなってね」

宙さんは黙って清さんの話しを聞いていましたが、思い出したように首から掛けていたカメラを下ろしてテーブルに置きました。会計をすませたカップルが、笑いながら扉を押して店から出て行きました。

「文蔵さんは、どんな方だったんですか」宙さんが清さんに訊きました。「自分は、中学生の頃に開玄堂で文蔵さんと話す機会があって、いろいろ話しを聞いたり、本も薦めてもらったんですが、中学生ですから良く分からないことも多かったし、文蔵さんは自分が中学三年生の時に亡くなってしまったので、もっといういろいろ教わりたかったのになって、残念に思っていました」

「文蔵さんは、ぎりぎり明治の生まれで、もともとは大浜の家の生まれだったらしいよ。小さい頃に大塚家の養子になって、森川で育って、成績優秀で東大の法科まで卒業して官僚になったけれど、数年で辞めて森川に帰って来て、千代さんと結婚して、地主業をしながら開玄堂を始めた、といったあたりが、自分が知っている限りでの文蔵さんの戦前の経歴かな。戦後は、農地改革であらかたの土地を失って、それでも、うちのお店のビルとか、いくつか街中の不動産が残ったから、そんな不動産を管理して、あとは開玄堂で古書や骨董の商いをして暮らしたっていうことになるけれど、でも、やまちゃんが知りたいのは、そういうことじゃないんだよね」

「そうですね。人となりというか。文蔵さんからは、考えの深さとか、人柄の温かさとか、言葉の重さとかを感じていたような気がするんです。でも、どうしてそう思ったのかは分からなくて。段々と記憶も薄れてきますし」

宙さんはもう少し何かを言おうとして迷っているようでしたが、少し考えてから、結局そこで言葉を止めて、コーヒーカップに手を伸ばしました。

「そうですね。やっぱり教養だろうね」清さんは窓の外を眺めながらそう言いました。「文蔵さんは教養がある人だったし、教養を育てる努力をずっとしていたと思うよ」それから宙さんを振り向いて付け加えました。「南風書店の生みの親って言ってもいい人だしね」

「そうなんですか」

「戦争が終わって厳しかった時期に、書店をやらないかって声を掛けてくれて、開業資金を貸してくれてね。南風書店っていう名前も文蔵さんが名付け親だから。文蔵さんのお母さんが亡くなって、昭和三十年に今のビルを貸してくれることになった時も、随分安く貸してくれたおかげで店も大きくできたし。そういう意味では、育ての親でもあるか。南風書店が今のビルに移ったときに、文蔵さんとお祝いをしてね。あの夜は二人で飲みに行って、遅くまで『南風書店にとって大事なことは何か』っていう話しをしたな」

「どんな話しだったんですか」

「まあ、やまちゃんも考えてみてよ。やまちゃん、来月二十歳になるんだよね。誕生日は何日だったっけ」

「五月十五日です」

「風子と三日違いっていうのは覚えていたけど、三日後か。来月、二十歳になってお酒が飲めるようになったら、一度、家に晩ごはん食べにおいでよ。美味しいお酒でも飲もうよ」

「いいですね。有難うございます」

「その時に、出来上がった写真も持って来てよ。楽しみにしているからさ」

「いいですよ。そしたら続きを聞かせてもらえますか」

「続きって」

「『南風書店にとって大事なことは何か』っていう話しですよ」

「そうだね。そういう時期が来たら、そういう話しもしようか」

翌月、宙さんは仕上がった写真を持って清さんの家に遊びに行き、弘子さんや風子さんも一緒に楽しい時間を過ごしましたが、「そういう話し」にはなりません。それから十年間、南風書店を大きく育て上げた二人の間で「そういう話し」をする機会は何度もあったはずなのですが、結局、清さんが亡くなるまで、「そういう話し」が交わされることはありませんでした。

六月に来たときはタクシーに頼ってしまっただけけれど、今日は開玄堂から歩いて来た。ほぼ三十年ぶりに歩く道だけれど、墓地までの道はしっかりと憶えている。子供の頃に憶えたことはなかなか忘れないものだと思ふ。墓地に向かう坂道に入る手前の花屋に立ち寄る。彼岸の入りだからか、花屋は墓参用の花をたくさん用意していた。子供の頃、祖母と一緒に花屋に立ち寄ると、花屋のおばあさんが皺だらけの顔いっぱい笑顔で顔を浮かべて、花を幾つかおまけしてくれていたことを思い出した。もうあのお祖母さんも丸山のお墓に入っているだろう、そんなことを思いながら、お孫さんだろうか、同年配の女性が新聞紙に包んでくれた切り花を受け取る。

花屋で借りた手桶に花を入れて歩き始めると、雑木林を開いて作られた坂道が続くので、午前九時過ぎとはいえ汗で肌が湿ってくる。恵とあずさは二人並んで私の後ろを少し離れて歩いて来る。何か話しをしているようだけれど、何を話しているのか、ここからだと聞こえない。

坂道を上り始めた時、あの昔の花屋のお祖母さんが抱えていた記憶も、一昨日の夜は開玄堂に来ていたのだろうか、そんなことを考えていた。花屋のお祖母さんだけでなく、丸山のお墓に入っている祖父母や母の記憶も、満月の夜になると開玄堂にやって来るのだろうか、それならば、いつかあの人たちの記憶に少しでも触れることがあるのだろうか。

そんなことを考えながら坂道を上っているうちに、ふと、何年も前に亡くなった人達の記憶も、今この世に生きている自分達の記憶も、どちらもあまり変わらないのではないかと思えてきた。

今から三十年前、十八歳だった自分は、高校を卒業して東京へ出て行く時に、この街に別れを告げる気持ちでこの場所を歩いていた。あの時、この坂道をひとりですべて自分自身が、今坂道を上っている自分の隣にいるような気がする。さらに遡って今から四十年前、母の七回忌の二月の寒い日に、祖母と二人で墓参りに来た八歳だった自分も、祖母と一緒に自分のしばらく先を歩いているような気がする。当時の自分が抱えていた記憶は、四十九歳になった今の自分の頭蓋骨の中にあるのではなく、あの頃の自分と一緒に今もこの場所にあるのではないか。同じように、この場所を通り過ぎていった全ての人、全ての動物や植物、ここに存在した全ての生きものたちの記憶は、ずっとこの場所に留まり続けていて、だから、全ての瞬間がこの場所にあつて、ここだけでなく、世界中のあらゆる場所に、長い時間をかけて積み重なった全ての瞬間の膨大な「記憶」があつて、そうして、森川やその周辺の「記憶」は、満月の夜になると静かに響き合つて、その音が開玄堂にゆっくりと流れ込んで来る。

「お父さん、今朝はどこに行っていたの」追いついて来たあずさに声を掛けられて、突然、現実を引き戻される。

「昨日も遅かったのに、朝早くから出掛けて行って、どこか行きたいところがあつたのになつて、話していたの」と恵が続ける。二人とも、ずっと坂道を歩いてきたせいかな、

あるいは急いで追いつこうとしたのか、少し息が上がっている。

大きく呼吸をして、気持ちを落ち着かせてから話し始める。

「うん。特に行きたい場所があったわけじゃないんだけど、久しぶりに森川の街を散歩してみようかって思ってたね。街中を通り抜けて海まで行って、それから昔通った小学校と中学校の前を通って帰って来たんだけど、小学校も中学校も四十年前とあんまり変わっていなかったな。六月のお葬式の時は、お葬式とお墓参りに来ただけで、どこにも行かなかったから、森川の街中を歩いたのはほとんど二十年ぶりくらいだけど、その割には、どこもそれほど変わっていないように思えたな」

ここ数か月、大浜や和田書店の支店がある場所には何度も出掛けたのに、森川には来る機会がなかった。父の葬儀の時には来たけれど、あのときは時間もなかったし、それ以上に、この場所に馴染めていなかったような気がする。どこにも行ってみたいとは思わなかったし、誰かに会いたいとも思わなかった。用事を済ませて東京に帰ることしか考えていなかったと思う。今は違う。たった三か月の間に多くの出会いがあって、この街との距離が縮まった。

「午後、宙さんの家に行くんでしょ」

「うん、食事をした後で一時過ぎに行くって言うてあるから。そういえば、今朝、散歩の途中で、宙さんの家の前を通ったよ」

「行って来たんだ。どんなところだった」あずさは、昨晚の二次会で、世代が近い和田書店の若手社員やバイトくと、森川への出店計画について盛り上がっていたようだった。

「アーケードを出て二、三十メートルのところで、檸檬色のシャツターが目立つからすぐに分かるよ。良い場所だと思うよ。お昼過ぎに行くときは中も見せてもらえるから、お店のイメージも掴めるんじゃないかな」

ここ一、二か月の間に、宙さんの家の一階のスペースを借りて和田書店の小さな支店を出す計画が動き始めている。宙さんが母親と暮らしている家は、高校の教師だった宙さんの父親が退職後に小さな学習塾を開くつもりで建てた家で、一階に道路に面した十坪程度のスペースがあるらしい。今は全く使われていないこのスペースをただ同然の家賃で借りられるということで、何か面白い企画ができないか、若者たちが挑戦したがっている。森川に出店する計画は、もう何十年前から何度も持ち上がっていたのに、その度に和田会長が悉く握り潰してきたらしい。昨晚はその理由についてもいろいろと盛り上がった。

「宙さんが家まで来てくれるの」と恵が訊く。

「いや、宙さんのお母さんが家にいて、中を見せてくれるって聞いているけど」

「お母さんって、もうかなりのご高齢じゃない」

「九十三歳だって。でも、本当に元気らしいよ。未だに家事も宙さんと分担して、料理も洗濯もするらしいから」

「凄い。お元気ね」

「私も元気なおばあちゃんになれるかな」

「あずさは一〇〇歳になってもこの坂道を歩いて上れるかもね」

「一〇〇歳になったら挑戦してみようかな」

そんな他愛もない話しをしながら、雑木林の中を折り返す坂道をしばらく上っていくと、墓地の入口に着いた。傍らに近くの湧き水を引いてきた水場があつて、ここで手桶にたつぷりと水を汲む。冷たい水に手が触れて、少し熱った身体に心地良い。彼岸の入りとはいえまだ時間が早いからか、我々の他にお墓参りに来ている人は見当たらない。丸山の墓地にはおそらく二、三百年の歴史があるはずで、古いものから比較的新しいものまで、数十基ほどのお墓が集まった区画がいくつか点在している。大塚家の墓は、北西向きの斜面を整地した広めの区画にあつて、森川の街を見下ろすように立てられた墓石には、控えめな大きさの楷書体で「大塚家之墓」と刻まれている。

入口から少し坂道を上って目指す区画に入ると、視界が開けて森川の街が見える。緩やかな段差が付けられた通路を下り、大塚家のお墓に辿り着くと、畳三畳ほどの大きさの墓所はきれいに掃除されていた。枯れた花や雑草もなく、墓石も磨かれていて清々しい印象を受ける。

「きれいだね」とあずさが言う。

「そうね」と恵も頷いている。

「大浜の叔母さんが掃除に来てくれたのかな」と言いながら、そういえば六月に来た時もお墓がきれいに掃除されていたことを思い出す。

手桶の水に浸したタオルで墓石を洗い、恵がお花を供え、あずさがお線香を上げて、三人で手を合わせてお参りをする。会ったことのない祖父と、あまり良い思い出がない祖母、そして、自分が二歳になる前に亡くなった母。この三人に、父が亡くなってからここ数か月の出来事をどう報告しようかと考えてみたものの、一向に考えはまとまらず、そのまま閉じていた目を開ける。

振り向くと、二人は疾うにお参りを終えていたようで、後を向いて森川の街を眺めている。

「開玄堂は、どのあたりになるの」と恵が尋ねる。

「静川がこう流れているから、川沿いのあの少し大きな煉瓦色のビルの五、六軒右側のあたりだね」と指差しながら答える。

「宙さんの家はどのあたり」とあずさが訊く。

「宙さんの家は、あのアーケードの右側に見えているオレンジ色の屋根の建物のあたりかな」

「ここからだ良く見えるね」とあずさが言う。

「そうね」と軽く応じて街を見下ろしていた恵が、「宙さんのお母さんにも会える」とひとりごとのように言ってから、ふと何かを思い出したような微笑みを浮かべてあずさと視線を交わしている。

気持ちの良い風が吹き抜けていって、微かな海の匂いと夏の名残りを運んでくる。目を上げると、良く晴れた九月の高い空が広がっていて、遠くの方に箒で掃いたような薄い雲が浮かんでいるのが見えた。

(二〇一九年二月)